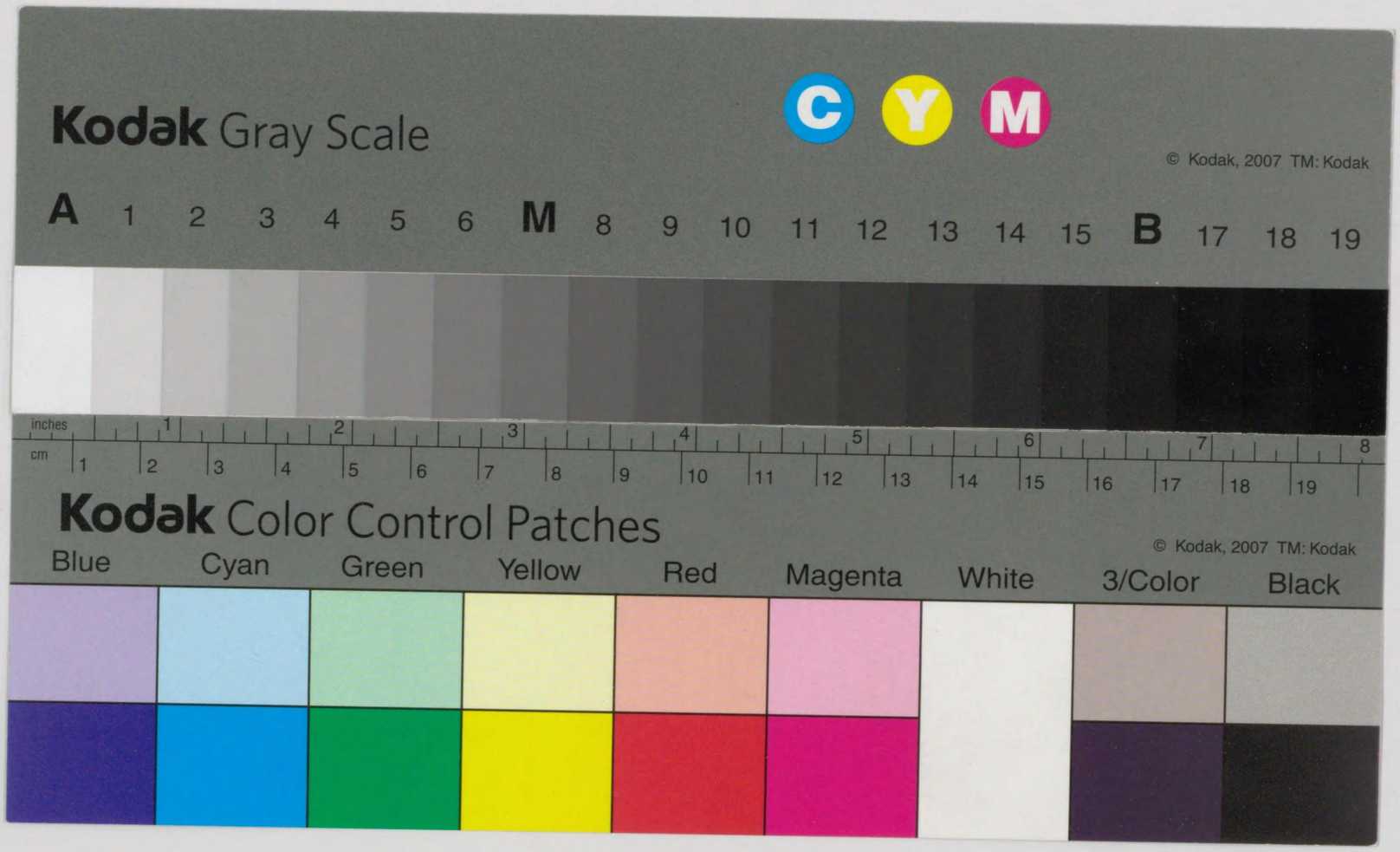

563
16
563-116
12005015130 66

I+4N90

慶應義塾大學經濟學講義

教授 講師 執筆

近世商業史

慶應義塾大學教授
阿部秀助著

昭和十三年

563-116

前編　近世商業史の根本的基礎としての古代及中世
第一章　緒論……一
第二章　古代……一八
第三章　中世……六一
後編　近世
第一章　總論……一六二
第二章　發見時代……一六四
第三章　和蘭英吉利及佛蘭西の經濟的衝突時代……二八八
第四章　英獨の經濟的衝突時代……三五六

近世商業史

阿部秀助

前編　近世商業史の根本的基礎としての古代及中世

第一章　緒論

原始的種族と交換現象

凡そ物と物とを交換する現象が自然人(Naturvölker)即ち最も原始的な經濟狀態を脱しない種族間に存するや否やの問題は今日に至るまで屢々經濟學者又は社會學者にとりて研究の對象に供せらるるのである。殊に此方面の研究に對して一個の新たなる解釋を提供したものは最近迄ライプチヒ(Leipzig)大學の教授であつた獨逸の經濟學者カール・ブヒャー(Karl Bücher)の「自然人の經濟」(Die wirtschaft der Naturvölker)なる一論文である。此論文は彼れの「經濟的原始狀態」(Der wirtschaftliche Urzustand)なる論文と共にブヒャー其人の原始的

經濟觀を吾人に說明するものであるが、然し輕卒な理論化、抽象化の結果、現實其者を遠ざかつた說明が少くないのである。例者彼れは「自然人の經濟」なる論文の中にて「原始民族は將來を顧慮しない、彼れは刹那主義の兒で、何者も其注意に上る事なく、たゞ無限な素朴な利己主義が彼れの心を充たしてゐるのみである、彼れはそれ以上を考へず、寧ろ本能の命ずるまゝに行動するのみで、此の點に於て彼れは吾等よりも自然に近いのである」(Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, zwölfte und dreizehnte Auflage. 1919. B1 S. 41-42) と論せられてあるが、然し事實は必ずしもブュヒャー其人の所論の如くならざる事を示して居るのである。卽ち現時の世界に棲息する原始的種族の一つである錫蘭島のウェダ(Wedda)族は既に食肉貯藏の法――獲肉を野生の蜂蜜で包んで、之れを樹木の空虛(ウトロ)の中に貯藏する――を知て居るし、又婦人の如きは生理的に勞働不可能の時期存する結果、勢ひ其の時期に供ふる貯蓄を餘儀無くせらるゝし、斯くして原始民族の需要に供せらるゝ食料品の中には、ブュヒャーが意味するが如き瞬間的以上に準備せられた場合が少くないのである、次ぎにブュヒャーは原始的種族間に愛用せらるゝ家犬の價値を輕視して純乎たる奢侈的動物に過ぎずと論じて居るのであるが (Karl Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft. B1 S. 52)、之れも事實と相違した所論で、現在の錫蘭島でも「スマトラ」(Sumatra) 又は「ニューギニー」(New Guinea) でも野獸を狩する場合に使用せらるゝものは常に是等の土人の有する獵犬である、現にドクトル、マックス、モズコウスキー(Dr. Max Moszkowski) のニューギニー及スマトラ內地探檢談の中には「自分はニューギニーの人跡稀れな中央山脈地方に於て飢餓に苦しめられたのである、而して其理由は主として食物を求むるに必要な犬を携へなかつた點である」と (Dr. Max. Moszkowski, Vom Wirtschaftsleben des Primitiven Völker, S. 8-9) 殊に此方面に對するブュヒャーの所論の弱點を最も多く吾人の前に曝露して居るのは、彼れの原始種族間に於ける交換否定說である。論者は彼れの所論が、如何に現實其者を遠ざかりしことを立證するに先ちて、彼れの否定說の骨子を紹介する必要があると思ふ、卽ち彼れは上揭の其論文「自然人の經濟」中に次の如く論じて居るのである「國民經濟的意義に於ける商業、詳言すれば各自が利益を得て轉賣する目的に向つて規定的(regelmässig) に職業的に組織せらるゝ物品の仕入は自然人の間には決して存在せず。

吾人が亞弗利加に於て遭遇する土人にして商賣を營むものは歐洲方面の商人又は亞剌比亞商人の媒介的行爲をなすか、然らずば蘇丹の半開化地方に見る現象たり。尙ほ土人間には普ねく交換は單に種族と種族との間に存し、之れが成立を見し主たる原因は、單に天與の物資の待殊なる分布狀態と、各種族に存する生產的技能の發達が互に相異なれるによるのである、若、夫れ同一種族に屬するものにあつては、其間、何等規定的交換なるもの存せず、何んとなれば總ては同一の財を生產し且つ家族の永久的關係の基礎たる職業的組織を缺如せるに依るを以てゝある。文明人は各自の欲する處を市場又は百貨商店に於て容易に貨幣を以て求め得る理由よりして、交換其ものゝ成立に就きては輕々に見做すも、然かも自然人にありては彼等が遙かに發達せる種族と接觸する以前には價値(Wert)又は直段(preis)に就きては徹頭徹尾、何等の考を有せず、初めて濠洲を發見せし人々が其經驗に於て一致する處は大陸方面にありても、又た附近の島嶼にありても、土人は交換の何たるを解せざると共に、是等の發見者が彼等に與ふる裝飾品に就きても、極めて冷澹にして、又た强迫的に受けし贈物は森林中に放擲して毫も意に介せざる風あり、以上と同一の經驗をユーレンライヒ(Ehrenreich)とカール・フォン・デン・シュタイネン(K von den Steinen)とはブラジル(Brazil)土人に就きて繰り返せり、而して是等の種族の間には活潑なる流通行爲存し、卽ち土器、石斧、蓆、綿絲、貝製の頭飾其他之れに類似の製品を相互に讓受す、抑も斯くの如き現象は交換又たは商業行爲に依らずして如何にして可能なるか、此謎を解決することは極めて容易なり、卽ち是等物品の讓受は多くの場合は贈與の方法によりて實現せられ、又た時に奪掠、分捕、貢獻、財產罰、賠償賭博の方法によりてなさる、之れに反して同一の種族に隷屬するものにありては食料の如く全く共同的にして、例者、一頭の牛を屠殺する際、若、隣人に告げずして之れを實行する時は窃盗と見做るゝが如し、尙ほ食時、其前を通過する人を招待せざる場合も亦た以上と相同じ、卽ち吾人は各自の欲する小屋に入り、自由に食事を要求し得るものにして、此場合にありても主人は決して之れを拒絕することを不得」(Karl Bücher, Bl. S. 60-62)と、論者は以上ブヒヤー敎授の所論を主として人種學及考古學の兩方面より批判して見たいと思ふ。

現時の世界に於て最も幼稚な文化生活を營む種族は果して何れの方面に見出

世界最低度の文化生活を營む種族

し得るやに就きては專門家の說く處には、略ほ一致せる點があるのである、即ちスペンサー(Spencer)はフォイエルランド人(Feuerländer)濠洲土人(Australier)ウェダ(Weddah)ブッシマン(Buschmänne)ネパール(Nepal)のチェバングス(Clepangs)及クスンダ(Kusunda)を以て主として其社會の極めて不統一なる點と、政治上の君主とも見做す可きもの缺如せる點よりして世界に於ける最低度の種族と見做してゐるのである(Spencer, The principle of Sociology, I. 539)又たダーウイン(Darwin)は主として文化らしき文化を有せざる點よりして、フォイエルランド人を以て最低度のものとなし、最も多く之れに接近せるものを以て濠洲土人となして居るのである(Darwin, Voyage d'un naturaliste 2e ed', paris, 1883 P. 247)次ぎにワーレス(Wallace)は主として人類學上の見地よりして濠洲土人を以て今日迄發見せられた種族中、最も幼稚なものなることを以てし(A. R. Wallace, Studies Scientific and social, London, 1900. 1. P. 468)之れと同一の見解を有するものにクラーチ(Klaatsch)とモルガン(Morgan)とがある(H. Klaatsch, Ueber den Audral Kontinent und seine Urbewohner, nach einem Referat des „Hamburgischen Korrespondete,n" 8 Januar, 1908. u. L. H. Morgan, Ancient Society, Chicago, 1907, S. 17u. 49)更にフレーザー(Frazer)は濠洲の動植物が自余の諸大陸に比して一般に原始的のもの多きと同一の理由によつて、同大陸の土人を以て社會組織上又た人智の發達上最低度のものと見做し、且つ彼れは人類社會の進步發達を以て、主として之れを組織する各人の生存競爭に基くものとなし、斯くて彼れは天然の障害物によつて、世界の各方面から隔離せられた濠洲の中部を以て、現今世界に於ける最低度の人類社會を研究する理想鄉と見做して居るのである、(J. G. Frazer, Observations on Central-Australian Totemism, Jour. of the Anthrop Institute, 1899. p. 201)以上專門家の考察せし處によれば、濠洲の土人は確かに現時の世界に棲息せる最低度の種族で、殊に此種族が交換現象の有無を考察する上に於て有力なる材料たり得ることは、主として彼等が太古より現時の地方に生活せること、全く他方面から隔離せられて居ることが、此種族其者の固有な經濟狀態を研究する上に於て非常な便利を有するを以てゞある。

原始的種族と石材取引

「蓋、原始的な種族に於て交換に於て供せらるゝものとして、太古から最も重要視せられたものは、彼等が日常生活上に常に使用せる道具の材

料である石材である。而して此等に關して最も多くの研究材料を吾人に提供するものは濠洲土人で、彼等の間には通常石斧の材料となる閃綠岩の如き、或は磨石に供せらる砂岩の如き、何れも交換の用に供せられ(Edward B. Tylor, Anthropologie, London, 1881, 181-180)殊に昔時からムーレイ(Murray)ゴーウルバーン(Goulburn)の種族はマウント・ウヰリヤム(Mount William)附近の石坑から採掘せし閃綠岩(Diorit)を以て石槍と交換し(R. Brough Smith, The Abrigines of Victoria, Loudon, 1878 1 181.)又た南東部の濠洲土人は彼等が有する各種の武器、道具、裝飾品例者、石槍、獸皮、男子用前垂、腕輪等を交換の用に供し、ヤ、ウルング(Ja Jaurung)種族の男子はシャロッテ(Charotte)平原附近の石坑から採掘せらるゝ石材で專ら石斧の材料に供せらるゝものを市場に齎らすのである。其他、東部の諸種族と西部及南部の諸種族とは、彼等にとりて商業上の中心地たるコッペラマナ(Koppera mana)に會して互に交換する處を見るに、前者は多く盾又たは木細工物等を齎らし、後者は多く石材を以て以上の貨物と交換するのである、又たクヰンスランド(Queensland)に於ても石材は最も重要な商品たる結果、同地方の石坑で土人の或者によりて秘密に所有せらるゝものがあるのである、斯くの如く石材が重要な交換物たることは、自然に之を轉賣して其間、利益を收むる一種の商人階級の發生を見るに至つたのである、卽ちデェエリー(Die yerie)族がそれである、而してガソン(Gason)の此種族に對する報告には次の如きことがある、彼等は全生涯を常に取引業務の間に送り、一個の品物と雖、長時期を通じて各自の手許に有することなし彼等は今日仕入れたるものを明日は直ちに手放し、彼等の間に於ける爭議は多くの場合、各自の取引上に於ける意見の相違に起因するのである](F. Somlós, De Güterverkehr in der Ur-gesellschaft S. 19)と、以上の事實は明かにブュヒャー教授の各自が利益を得て轉賣する目的に向つて規定的に職業的に組織せらるゝ、物品の仕入は自然人の間に存在せずとの所論を裏切れるものである。猶ほ石材以外に、濠洲土人にとりて最も重要な取引貨物は或特殊な方面に產するビツク(Duboisia Hopwoodii)なる植物、又た一種の貝殼で裝飾品に使用せちるゝロンカ・ロンカ(Melo Aethiopica u. Meleagrina Margaritifera)及煙草等がある、尙ほロス(Roth)はクインスランドの內地に幾多の組織的な永久的な流通現象の存することを證すると共に、是等の地方には昔時から商業上に利用せられし通路の存在せることを指摘し

て居るのである。(W. E. Roth, Ethnological studies among the North-West-Central Queensland Aborigines. London, 1897, p. 132)次ぎにブュヒャー教授が屢々自己の所論を立證せんが爲めに引用したエーレンライヒはブラジル土人に就きて彼等が斧又は鍋等を得んが爲めに各自の子女を賣却せる事實の存せることを認むると共に、エーレンライヒ自身も亦た彼れが所持せる燐寸一二箱に代ゆるに二本の棒と檑子を得、又た或時は煙草、小刀、釣鉤等を以て弓矢と交換したのである。(P. Ehrenreich. Ueber die Botokudon der brasilianischen Provinzen. Zeitschrift für Ethnologie, 1887 BXXIX. s. 38 u. Land und Leute am Rio Doce. Verhandlungen der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin, No. B, 1886, s. 106)又たウヰド(Wied)も亦た此種族に就きて次の如く記して居るのである、即時土人と交易をなさんが爲め、余は彼等に小刀、手巾等を示せしに彼等は武器其他の道具と交換せり、彼等は殊に鐵製のものを愛するが如し。(Maximilian Prinz zu Wied, Reise nach Brazilien in den Jahre 1815 bei 1817. Frankfurt, I.s. 344)　其他、ダーウヰンをして世界に於ける最低度の種族と稱せしめたフォイエルランド人が屢々彼等の所持せる獸皮、道具、弓矢等を以て煙草、衣服及食料品と交換せし事實は此地方を旅行せし人々の紀行中に散見する處である、殊にフヰツロイ(K. Fitzroy)の如きはフォイエルランド人とパタゴニア人との間に明かに商業上の關係の存在せることを指摘して居るのである。(R. Fitzroy, Narrative of the Voyages of the Adventure and Beagle, London 1839, II. p. 172)又たベンガル(Bengal)灣頭に散布する諸群島に棲息するアンダマン(Andaman)族の如きは今日迄、他種族と混血的狀態を呈しない最も原始的な種族たるに不拘、沿岸の土人(Âryôto)と內地の土人(Frentâya)との間には諸種の道具又たは裝飾品に就きて交換行はれ、此場合に於て媒介の手段たるものは砥石及槌なりと、尙ほマン(E. H. Man,)が同種族の內地土人に就きて記述せる中に「沿岸土人と舞踏を催す際には、必ず交換物として豚肉、木矢漁網等を齎らし、歌舞終つて後、相互に物品を交換し、一二日後、交換物をまとめて歸るを常とす」。(E. H. Man, On Andamaneae and Nicobaseg. Objects. Jouranal of the Anthropological Lnstute, London, 1882, P. 20)次ぎに亞弗利加大陸に於ける最古の住民と稱せらるブシマンは何等組織的の固集にあらざると共に、一定の住所を有せざるに不拘、交換の現象存し現にアイクウヱ(Aikwe)語には(賣買)なる名稱が口にせられて居るのである、又、彼等の生活せる地方が鳥獸

に富みし際には專ら獸皮、象牙、駝鳥の羽毛等を交換に供して居たのである、尙ほ錫蘭に於ける原始種族である森のウエダの如きも彼等が狩獵に於て獲た獸の皮を乾燥して交換の用に供したのである。要するに現時世界に棲息せる最低度の原始種族を通じて交換の現象の存することは、以上、示す處の幾多の例證によつて明白であると思ふ。論者は更に進んで考古、言語兩學上から太古に於ける原始種族が既に交換の作用を理解せしことを立證したいと思ふ、我邦に於ける考古學的研究の吾人に示す處によれば、石器時代に使用せられた黑曜石卽ち十勝石は其名稱の示すが如く、殆んで十勝の產に限られしに不拘、此石材を使用せる石鏃石、槍、剃刀等は北海道全土に普ねきを見れば、此時代に於て交換的現象の存せしことを知るを得可く、其他「サヌカイト」の如き下總の緒締石の如き陸奥龜ケ岡より出でし青玉の如き、何れも我邦の石器時代に於て交換的現象の存せし例證である、尙ほ中澤、八木兩氏の日本考古學中に石器時代に於ける外國との交通を記述せる中に次の如き記事があるのである、「日本の石器時代遺跡より發見せらるゝ色料は單に赤色に限れども、此の中には鐵朱卽ち學名上、赤鐵鑛、代赭石(Hæ matie)と稱する無水の酸化鐵と今一つは學名辰砂若くは靈砂(Cinnıber)と稱する水銀朱の二つあり、此中、後者は日本の產地甚だ乏しきが上に、其製法上必ずスタンプモルター及びミール等を要するが故に、餘程人智の進みし後ならでは造り得らるゝものにあらず、然るに關東平野、就中武藏の荏原、北豐島の兩郡及東京等を初めとして常陸の稻敷郡にある石器時代の遺跡より此水銀朱を塗りたる器物を出せるによりて考ふれば、石は全く支那邊より輸入せられしものならん、勿論直接にはならざるも、其物の本源地は斯く推定せらるゝも不可なからん、我石器時代の裝飾品中間々帶綠色にて半透明若くは不透明の石製曲玉及び曲玉類似の品を出すことあり、是等の內には其硬度六度を示せり、而して我邦の產石中、是等と能く似たるものを求むれば、色合は蛇紋石に近けれ共硬度に差あり、葡萄石は硬度均しけれ共、色を殊にせり、只だ色と硬度と共に右の曲玉類に似たるは支那の硬玉なり、故に是等の材料は前記の水銀朱と同樣、間接に支那より輸入せしならん」(日本考古學一六三―一六四)更に歐洲の石器時代に關するヘルマーン、ゲンテ(H. Genthe)の研究によれば白耳義のヘレネカヴ(Hennegau)にありし石器時代の住民は、其が道具及武器に使用する石材(燧石)を佛蘭

西のシャムパニー(Champagne)等に求めし痕跡あり、又ウルテムベルヒ(Würtemberg)のシユセンリツト(Schussenrieth)の遺跡から發掘せられた六百の石槍及石鏃は同地方では全く見ること能はざる外國產で、其他、ナルボンヌ(Narbonne)附近の穴居時代の遺跡から發見せられた貝殼製の頸飾と腕飾とは共に地中海產である、又たシユワイツエルスビルト(Schweizersbild)を去る遠からざるダハゼンビユエル(Dachesenbühel)の穴居的遺跡から見出された頸飾は地中海產の蟲類の管骨で、既に石器時代の昔時に於て上部ティン方面の住民と地中海畔の種族との間に或程度迄交換の現象存せし證左である。更に今日迄の言語學的研究も太古に於ける交換の存在を肯定せるのである、卽ち印度は日耳曼語系に於て交換なる概念は根綴字mé又たは mai によつて表現せらる、彼のサンスクリツトの Mè màyaté (複數 Ni-mé) 拉丁語の Munus 愛蘭語の Ma'in は何れも以上の印度日耳曼語の轉化と見做す可きものである。又たトルコ、ターター語にては價値を Teg 直段を Tej と稱しゐてるのである。尙ほアイヌ語の iŁok に賣買の兩義存することは明かに我邦に於ける石器時代を代表せりと稱せらるゝ彼等に於て交換の現象の存せし證左である。要するにブユ

ヒヤー敎授をして原始種族の交換狀態に對して輕卒な論斷をなさしめし理由は彼れの經濟階段說、殊に彼れの自足經濟說と極めて密接な關係ありと思ふ、而して彼れの原始民族交換否定說の弱點は(一)證據物件の不充分と研究材料の選擇其の當を得ざること、卽はち彼れの學說上に著しき影響を與へしと稱せらるゝクツク(J. Cook) の南東部の濠洲土人に關する報告中に「土人は贈物に對して何等明白なる滿足の意を表せず、麵包を與へても或は之を與へしものに返却し、然らずんば別に何等の代價を拂はずして受取るを常とす、要するに彼等は贈物に對して極めて冷澹にして全く何等の好奇心を有せざる事を示せり」(Captain James Cook's and Captain James King's Voyage. In voyage to the Pacific Ocean, undertaken by command of his Majesty for making Discoveries in the northern Hemisphere, London, 1788, I. 500) とあるが、然かも此報告が極めて皮想的の觀察たることは、論者が以上、示せし證左によつて充分に明白ならしめ得ると思ふ(二)經濟階段說の論理的抽象化の結果として生れし故、自から現實を遠ざかり、所謂一種の Idealtypisch となりしこと、(三)彼れの研究には獨逸の歷史家として有名なランケ(Ranke) の所謂 Mitwissenschaft と Mitgefühl の二點に就きて著

しく缺如せるものがあるのである。

交換の原始的形態としての默商賣

次ぎに原始的な民族間に交換の現象、存せる事實が肯定せらるゝ場合に於て、更に第二に發生する問題は所謂默商賣(Der Stumme Handel)なるものが交換の原始的形態なるや否やの問題である、蓋默商賣を以て交換の原始的形態となす說は、從來專門家の間にも相當に勢力を有したもので、例者ヘルネス敎授(D. 'Moritz Hoernes)の如きは其著[人類の自然及原始史]の中に[相互に敵意を有する種族の間に於ける商業の最も古き形體は慣例となれる場所に於て自己が交換せんとする物品を他に知られざる樣に、屢々夜間に陳列することにして、斯くすることによりて之れが交換取引に從事する誰人も他を見ることなし、此の風習は尙ほ今日に於て濠洲、亞弗利加、南亞米利加、南方亞細亞(錫蘭)に於て吾人の見る處なり」(Dr. M. Hoernes, Natur und Urgeschichte des Menschen. BII. s. 498) 又たポスト(Post)によれば[總ての流通的業務の最古のものたる交換的行爲は其が最古の形體としては之れが取引に從事するものの存在せざる場合に於ける實際的交換なり、卽ち各人は自己が交換に使用する貨物を豫め一定の場所に存置すると共に之れが相手となるものは前者の不在に乘じて其貨物を自己の所有化すると共に之れに代る可き他の貨物を其場所に置去るものなり」(Post, Grundriss der ethnologischen Jurisprdnenz II. s. 628) と、又たグリルソン(Grierson)が四十有餘の種族に關する報告書によれば此交換形體を有するものは北氷洋方面に於ける諸種族、ラップ人(Lapps)北方日耳曼人エチオペア人(Athiopen)、埃及人、カルタゴ人(Carthager)、リビア人(Lybia)、コンゴー方面に於ける諸種族、其他の亞弗利加土人、印度の諸種族、メキシコ(Mexico)人、サン、サルヴアドル(San Salvadar)ニューフアウンドランド(New Foundland)人、ロアンダ(Loanda)等あるも然かも、今日人類學者によりて看做さるゝ原始的民族中此の交換形態を有するものは只だ單に一のウエダ(錫蘭)あるのみ、之れ明かに默商賣なるものが交換上の原始的形體にあらざることを證明するものである、換言すればゾムロ(F. Somló)の云へるが如く默商賣は交換の原形にあらずして寧ろ之れがより發達せる階級に屬するものである。(F. Somló, Der Güterverkehr in der Urgesellschaft. s. 160-161) 只だ之れが發生原因に至つてはグリルソンは之れを以て異種族と交渉する場合に專ら自己の安全を確保せんとする事に出づとなし、佛蘭西の社會學者デユルケム(Dur-

kheim) は之れ反して宗教的起源說を主張せり、而して後者に對して有力なる證左は濠洲のニギア、ニギアムペー(Ngia-Ngiampe)によつて營まるゝ交換の場合に存する宗教的儀式が全く默商賣の場合に見る行動と同一狀態を呈することてある。以上論者は交換なる現象が既に既に太古の時代に存せしことを明かにせしを以て、吾人は次ぎに斯くの如き現象が如何に古代の歷史に於て開展するに至つたかを叙述せんと欲するものである。

第二章　古　代

東方民族史の史的意義　地中海の東邊に發達した古代民族の歷史は、必ずしも世界最古の文明を表現せるものにあらざるも、然かも之れが精神的活動の多方面に亙れることゝ、之れが能力の充分に發達せることゝは、殆んど當時に於ける自余の文化的系統に吾人の見出すこと能はざる處で、殊に歐洲文明に與へし影響の著しき點に於て、換言すれば是等諸民族の歷史と歐洲文明との間に不斷の傳統的連鎖の存する點に於て、最も著しき史的價値を有するものである、而して論者が是等東方文化の歷史殊に是等の經濟生活を詳細に述ぶることは本講義の許さゞる處なるを以て、玆には主として古代商業史上顯著なる意義を有するバビロニヤ(Babylonia)埃及(Egypt)及フェニキヤ(Phoenicia)に就きて考察せんと欲す。

バビロニヤ　チグリス(Tigris)エウフラテス(Euphrates)兩河に包圍せられた沖積層の地方はフリドリヒ、デリッチをして古代の和蘭と稱せしめたバビロニアで、其面積は略ぼ今日の伊太利王國から之れに附屬した島嶼を除いたものに等しく(Friedrich Deltzsch, Im Lande des einstigen Paradieses. S. 3—4)而して此範圍内に發達した文化の最も著しき要素が二つある、卽ち其一はセミチック族(Semitic)の文化で、他はスメール族(Sümer, Schmer, Shumier)の文化で、兩文化系統の中で、勿論、後者は前者に比すれば其成立年代に於て遙かに古いと共にスメールなる名稱は同民族が自らを命名せしものでなくて、實は南部バビロニア人に對する後人の附した名稱である、但此民族は此地方の草分でなくて、寧ろ遠き過去に他方面より移住し來つたことは彼等の骨骼、彼等の言語及彼等の首都の位置等を考察することによつて彼等が海上、又たは沙漠方面より來りしものでなくて山の手方面

スメール族の名稱と民族的系統

より移住し來りし事を知るとが出來るのである、卽ち骨骼の點から見ると此時代の造形美術が明かに吾人に示す如く頭部の形はモンゴル(Mongol)風で鬚なく、眉は濃く頰骨は突出して一見後ちの支配者であるセミチック族と異なれることを示して居るのである。次ぎに言語に就きて見るに文法、發音共にセミチック族とは異なつて居て、後者の言語が變化的なるに對してスメール語は連結的である、換言すればスメール語の特徴はモンゴル語系に類似せる點である、(勿論、嚴密な批判を與ふる爲めには我等のスメール語に對する知識は未だ充分と云ふこと能はざるのであるが。)又彼等は言語或は之れを表現する文字に於て、國土と山地とを同一義に使用せると共に彼等の主神エリル(Elil)の社殿エクル(Ekur)が山地の屋方を意味するが如きも、同民族が山手方面より來りしことに就きて一種の暗示を與ふるものである、尙ほ首都ニプール(Nippur)が中部バビロニアでイラン(Iran)高原の通路に當れる點より見るも略ぼ此民族の出所を窺ふことを得ると思ふ。

スメール民族と社會生活　西暦紀元前約三千年頃に發達したスメール族の社會組織、殊に政治組織なるものは勿論、確實な知識を缺くのであつて、今迄發堀せられた斷片的材料によつて見るに多くの場合は四通八達の位置に發達した都市を中心として、其處に大小幾多の國家が組織せられて居たことは明白な事實で、例者ニプール(Nippur)エレヒ(Erech)ニシン(Nisin)シルグラ(Sirgulla)アガダ(Agada)アスニュナ(Asnuna)ウル(Ur)等あり、殊にアブラハム(Abraham)の故里で聖書のウルカシヂム(Ur-Kaschdim)に相當すと稱せらるゝウルの如きは前後二回、政治上の覇權を握るに至つたのである、而して是等の都市的國家の元首は國王で、國王は單に天祐によつて之れが位に卽きしのみでなくて、同時に神の化身として信ぜられしものである、更に國王に對して副王の地位にあるものをパテシ(Patesi)と稱し、尙ほ其外大小の官吏、僧侶、裁判官等が存して居たのである、而して是等の官吏其他に支給せられたものは國王の穀倉に集積せられた穀物其他の生活必需品である、以上、特權階級に對して一般の國民は自由民、半自由民及奴隷の三階級に分たれて、其中には地主もあれば小作人もあり、又手工業者の存すると共に單純な勞働者もあつて彼等の社會上に於ける義務としては租稅、兵役、及運河又たは通路の大工事に關する賦役等で、但、最後の賦役は勞力を提供する場合と、之れに相當した金額を支拂ふ場合とあり、又、婦人にし

て土地を有し、或は獨立して義務を營むものは男子の場合と同じ義務を負擔せしものである、尙ほ彼等の家庭と宗教とに就きて見るに、各家庭にあつて家長の地位にありしものは男子で、其間一夫多妻の風行はれ、又結婚後の婦人は法律上資格なきも、夫たるものゝ後見の下に營利の業に從事し得たのである、又、彼等の宗教は頗るシャマン教(Schamanismus)に類似したものであつて、各家族、各人が保護神を有するが如く、當時の各都市は寺社内にて神を祀り、若、一朝有事の際、此神の像にして敵國の爲めに掠奪せらるゝに於ては都市其者は政治上の生命を有せざるものと見做されたのである、故に當時にあつて各國家が互に戰端を開始するに當つて敵國たる都市の神像を齎らさんことを努めしものである、又、當時の僧侶は各自の本職以外に裁判と教育とを司りしもので寺社恰も一種の學舍たる觀を呈し、これに學ぶものは多く僧侶の子弟で、其課目には宗教、習字、天文學、數學、醫學等があり、所謂、宗教と科學との合一的教育を施したことは、尙ほ現時の埃及のカイロ(Cairo)にありて高等教育を司どるエルアッアル(El Azhar)に類似した設備で、尙ほ當時に於ける尼は時に賣笑婦の如き賤業に從事せしものがあつたのである。

スメール族と經濟生　以上の如き社會組織が發達したバビロニアの地は羅馬のプリニウス(Plinius)をして東方第一の肥沃なる農地(fertilissimus ager totius orientis)と稱せしめた如く、此地方の經濟生活の中心をなしたものは農業で、國内の土地は王室の所有地と個人の私有地以外に寺領なるものが存して居つたのである、次ぎに土地經營の場合としては多く小作制度の下に他人に貸與したもので、斯くの如き場合に各人に割當られた面積は二ヘクターから五十ヘクターの間で、之れが小作料は契約の際、相互の間に一定の地位を約するものと、年々の收穫高によつて之れを規定するものとがある、卽ち後者の場合には多く年收穫の約四分ノ一に相當せしものである、又、以上の仕拂に供したものは收穫物である場合と現金を以てした場合とである、次ぎに當時、栽培せられた農產物の主なるもので、今日、明白なものは小麥、大麥、胡麻、黍、豆類等で、彼の小麥麵包の如きは其起源を此地に發してゐるのである、尙ほ當時、專ら農家の副業であつたものは酒造業で、約十七八種の酒類があつたといふことである、次ぎに林業は發達せず、僅かにチグリス、エウフラテスの河畔に一種の蘆荻を見たのみで、終に國内で使用せられた船材及農具用の木材は他方面

から輸入したのである、又、牧蓄は農業に見しが如き、大なる發達を有せざるも、尙ほ驢馬、山羊、羊等があり、漁業は當地方にとりて最も重ぜられたもので、殊にエウフラテスの河中に產した魚類の中で甚しく大なる鯉の存して居たことはデリッチの古代バビロニア商業研究中にある繪畫の吾人に示す處である(Friedrich Delitzsch, Handel und Wandel in Altbabylonien. S. 36)而して漁業に關しては當時既に一種の漁業組合なるものが組織せられて海洋、湖水、河流の各方面より捕獲せられた水產物を各市場に齎らすことを之れが職務としたのである、更に當時に於ける工業及商業に就きて一般的に考察するに、先づ工業に於ては手工業の如き職業上の分化甚しく、大工業としては織物工業最も盛大で、是等の工場では四十人より五百人に至る間の勞働者を使役したのである、尙ほ當時の勞働者は一般の使用人以外に熟練職工と不熟練職工と日傭とが存し、彼等の間には各自大小の組合組織せられ、之れが組合長は主として各自の組合に屬した勞働者の勞働條件及勞銀仕拂等に關して其力を盡せしものである、殊に吾人にとつて興味ある問題は是等の勞働者に支拂はれた勞銀と大小の官吏に支給せられた食祿との比較である、卽ち今日迄の研究の結果によれば、最高の官吏に給せられた額と熟練職工で最も其技術の見る可きものに支拂はれた勞銀と其額相同じく、以下官吏の中位は勞働者の中位に相當し、官吏の下級なものは勞働者の劣等なものと相等しく又、是等の勞銀は官吏の場合と同じく多く現物支拂で、女工は普通男工の半分、未成年勞働者の最高勞銀は一般使用人の最低勞銀に相當し、未成年勞働者で其兩親を失つたものは之が勞銀の一部を支給せらるゝことゝなつて居たのである、次ぎに當時の商業に就きて見るに先づ對外的取引にあつては殊に東方との取引盛大で、主として農產物及工產物を輸出すると共に、當時國內に缺乏した石材、鑛物、木材、象牙、羊毛等を輸入したのである、而して斯くの如き對外的取引に於て最も大なる便益を與へたものは國內を縱橫に貫通した運河で、之れが大なるものゝ附近には倉庫(Silos)が設けられ、以て運輸上の手數を省いたことは近世商業史上の和蘭に類似して居るのである、又、當時にありては鑄造貨幣はなきも、金、銀、銅等の金屬は地金又たは環狀形で使用せられたと共に、金銀の比價確立し、尙ほ以上貨幣の代用物として手形の如きもの既に利用せられ、工業上に於ける投資額の如き一人にて黃金六十タレント卽ち邦貨約十萬圓に達せ

しものがある、而して企業上の利益は投資額の二倍、三倍、甚しきは十倍に及びしものがある、又、利子が一ヶ月二割乃至二割五分の高率を示したことは、當時にあつて資金需要の熾んなりしと、之れが危險性の大なりしことを示すものである、次ぎに本位貨なるものは主として國家其者によつて規定せられしものと、寺社によりしものと、商人間にて規定せられしものとあり、其他、度量衡の如きも統一的狀態に於て存したものでアる。

古代埃及人の經濟的生活

以上、バビロニアと共に古代に於て經濟生活の見る可きものは埃及である、彼のニール(Nile)の河邊にある墳墓に描かれたものは明に古代に於ける埃及人の生活を表現したもので、之れによれば同國は農業以外に工業の見る可きものがあつたのである、殊に麻布の製造業は既に紀元前約三千三百年卽ち十二王朝の時代に發達しヘムニス(Chemnis)ブトス(Butos)テントリス(Tentyris)カシウム(Kasium)タニス(Tanis)等の諸市は各種の衣料、殊に亞細亞方面に於ける高位な僧官の着用する處となつた華美なものを生產したのである、織物工業と略ぼ同一の古き歷史を有するものは玻璃器の製造業で、それと關聯したものは各種の寶石殊に碧玉(Lapis lazuli)を模造した所謂埃及石の製造である、其他、木材、皮革、金屬類を細工した諸道具も併せ有名であつたのである、斯くの如く工業上に於て既に多方面に發達せし上に、此國はニールを中心として其附近の地方が極めて肥沃であつた爲めに農產物殊に穀物の產額多く、之れ亦隣國の羨む處となつたのである、次に乾燥季に於けるニールは水運の便を有したと共に、バビロニアの場合と同じく國內には數多の運河が開通せし結果、內地取引は敏活に行はれたのであるが、之れに反して海上交通は殆んど見る可き物がなかつたのである、其理由としては第一に沿岸に天然の良港を有せざることと、第二は海上交通に必要な船艦の欠乏と第三は同國に於て最も勢力を有して居た僧侶が海上生活を呪つたことである、斯くて埃及に於ける農業的國民は水上生活に興味を有しなかつたのであるが、其後フェニキヤ人との間に通商上の關係が開始せらるゝに及んで、埃及人の中には海上交通の價値を認むるものあるに至つたのである、現にラムゼス二世(Ramses II)紀元前一三二四—一二五八)の如きはフェニキヤの船大工をして紅海の沿岸に於て船艦を建造せしめしと共に紅海とニールとを運河を以て連絡せしめんとしたのであるが、然かも王の

崩去と共に此事業も葬むられ、爾來、海外貿易を試むるものなく、此方面の取引はプサメチクス一世(Psammetich I)の時代迄は一にフェニキヤ人の媒介に依つたもので、只だネコ(Necho)紀元前六〇九—五九三)及アマシス(Amasis紀元前五六九—五二六)の時代卽ち紀元前約六百年前後の頃に於て下部埃及の諸港が更に希臘人の間に開放せられイオニヤ商人の如きはナウクラチス(Naukratis)に商館を設けることを許さるゝと共に、更に幾多の商業上に於ける特權を獲得して益々此方面の取引を旺盛ならしめたのである。

フエニキヤ人と經濟生活

エウフラテス及ニール流域に於ける住民の經濟生活が主として農業に存して、工業と商業とは寧ろ第二義の地位を有せしに對して專ら商業と工業とに依つて國民生活を維持したものはフェニキヤ人である、蓋、彼等の鄉土は彼等をして海上交通に運命付けるに至つたのである、卽ち其狹小な地帶は一方は地中海に他の一方は山脈を隔てゝ內陸地方に接して居るのであるが、其土地が狹小な上に其地味たる埃及、及バビロニアと異つて瘠土質たる結果、農業を營むも其收穫たる殆ど見る可きものなきを以て、此地方の住民は自然に海上に彼等の衣食の資を求むるに至り、斯くて彼等の多くは其始め國內の港灣に於て漁業に從事せし者なりしが、其後レバノン(Lebanon)山中に良好な船材を無限に產すると共に、他方、出されしことと、フェニキヤ其者の地位が一方、地中海畔の諸國を控へると共に、他方、古代に於て最も發達せし文化を有した埃及及バビロニアに通ずるを得し事が、當時のフェニキヤをして世界的商業の中心的地位を有せしむるに至つたのである。加ふるに此國人は純乎たるセミチック族の性質を有し甚しく理解力に富むと共に精勵以て業務を遂行し、殊に利を營むに敏なりしものである、只だ彼等のなせし事業に對し過去の歷史は餘りに大なる評價を拂ひし觀を呈するのである、蓋、最近迄我等の古代史に就きて有する智識の大部分は、希臘及羅馬の文獻に仰いだもので、希臘人が地中海に於て商業上に活動するに至りし以前には一にフェニキヤ人によりて亞細亞方面の產物が齎らされしことは、自からバビロニア及埃及の產物もフェニキア人によりて生產せられし如く誤信せられてゐたのである、而して此の誤信を明白ならしめたものは主として象形文字と楔形文字が讀破せらるゝに至つた結果である、次に考察せらる可き點はフェニキヤ人の通商範圍の問題である。

世に歴史家の鼻祖と稱せらるゝヘロドット(Herodot)はフェニキヤ人の亞弗利加周航を記述して居るのであるが、此事實は千九百八年、下部埃及にて發見せられた二個の遺物に記載せられた文字によつて明かに證明せらるゝに至つたのである、然しマウヒ(Mauch)ベント(Bent)ペーテルス(Peters)によつて主張せられた南亞方面に對するフェニキヤ商業の影響は千九百七年此方面にてフェニキヤ貨幣の發掘せられたに不拘、ルシヤン(Luschan)の研究によつて然らざることが明かにせらるゝことなつたのである、又たフェニキヤ人がヂブラルタル(Gibralter)の海峽を越えて錫の産地であつた英國に赴いたこともエッアルト、マイヤー(Eduard Meyer)の如き歴史家に云はしむれば、フェニキヤ人は英國産の錫を南部西班牙の海岸地方にて其地方の住民と交換によつて獲得せしものとなして居るのである、尙ほフェニキヤ人は琥珀の産地であるバルチック(Baltic)海方面に赴いた説も北歐産の琥珀に似たものがレバノン山中に於て見出されたことによつて今日此説の無價値が證明せらるゝに至つたのである、要するにフェニキヤ人の通商範圍は東部方面を除いては事實地中海に限られたもので、カヂッ(Kadiz)は彼等にとりて本國を去ること最も遠き殖民地であつたのである。

フェニキヤ人の殖民地は北部亞弗利加に於けるカルタゴ(Karthago)を除いては、他は殆んど語るに足るものなく、名は殖民地と稱しても實際はフェニキヤ人の碇泊地、倉庫又たは商館所在地に過ぎなかつたのである、此點より見るとフェニキヤ人の殖民と後ちに地中海畔に活動せし希臘人の殖民との間には著しき相違が存せし結果、後者が一度、西部地中海方面に於て沿岸地方と嶋嶼とを不問、旺んに殖民事業を開始するや、フェニキヤ人の無勢力なる希臘人の活動に對して何等の抵抗を試むること能はずして卽時其地位を讓るに至つたのである。

フェニキヤ人にとつて彼等が通商上の前衞にして特に重要な意義を有したのはマッシリヤ(Massilia, Marseille)とタルテシュス(Tartessus)とである、而して前者に於てはワキゼル(Weichsel)から陸路北海に出で更にライン(Rhein)ソーヌ(Saone)ローヌ(Rhone)の諸河に沿ふて、南方に齎らされた琥珀等の取引せられた場所で、後者のタルテシュスはグッダルキヴィール(Guadalquivir)河口の一小島にあつて、シェラモレナ(Sierra Morena)の銀及銅山によつて好景氣を呈して居たアンダルシヤ(Andalusia)方面の首都である、而し

て此地方の住民は一種獨特の文化を有し、且つ大形の船舶を建造して大洋を乘廻したもので、彼のフェニキヤの商人が齎らした英國産錫の如き、恐らく彼等は此地の住民より求めしが如きである。

海上に於けるフェニキヤ人の商業が或點迄發達せるに對して、之れが沙漠方面の取引狀態にも見る可きものがある、當時地中海畔に於けるシリヤ(Syria)の沿岸より東方文化の中心地域に赴くには三つの主要な交通路が存して居たのである、卽ち第一の通路は上部シリアからタドモル(Tadmor,又はパルミラ(Palmyra)を經てバビロニアに至るもの、第二はシリアの沙漠からエウフラテスの下流地方を通過して埃及に出づるもの、第三はテルス(Tyrus)から北向、ダマスカス(Damaskas)を經てタプサクス(Thapsakus)に至るものである、而して此三つの交通路に沿ふて其處には連鎖的にフェニキヤ人の居住地が存して居たのである、之れを要するにシリア沿岸地方の港であるベイルート(Beirut)アッコン(Akka, Akkon)ヤフア(Jaffa)殊にチルス(Tyrus)とシドン(Sidon)とは西部地中海方面の諸國と亞細亞、埃及方面の文化とを結合せしめた當時最も重要な交通路の衝點となつて居たのである。

次にフェニキヤ人の工業的能力に對する考察としては、彼等が金屬細工に於て一種の技能を有して居た點である蓋、地中海方面卽ちトラキヤ(Thracia)及びタソス(Thasos)島より黃金、西班牙の鑛山より銀、タルテシュムより錫を得、斯くて豐富なる各種の金屬がフェニキヤの都市に流入するに至つたとは彼等をして是等の貴金屬を流通經濟上に於ける價格決定の單位たらしめ得し以外に、自から是等の金屬を加工する機會を見出すに至つたのである、但キプルス(Cyprus)ロードス(Rhodus)其他の方面から發掘せられた遺物によれば、フェニキヤ製の金屬品は獨創的の點なく、單に外國品殊に埃及品を手細工的に模造せるに止まつて居たのである最後にフェニキヤ人は殊に活潑に奴隷商賣に從事したもので、彼等はシリア及パレスチナ方面から求めた奴隷を西班牙に移しタルテシュスの鑛山勞働に就かしめたのである、尙ほ彼等は出來る丈け長く自己の手中に總ての方面に於ける商品取引を獨占せんが爲めに熾んに流言蜚語を放つて他國人の通商を妨害せしに不拘、遂に希臘人の爲めに其地位を覆えさるゝに至つたのである。

之れを要するに最近の史的研究はフェニキヤ人の工業、商業、交通の各方面に對す

る努力が必ずしも昔時の人々が信ぜしが如く大ならざることを示せるも、然かも一面より考察して彼等が造船業に貢獻せし點多きと共に地中海方面に於ける海上交通の草分けたりしこと丶、第二は亞細亞及埃及方面に於ける文化を地中海方面に普及せしめた點に於て史上長く吾人の記憶に殘る國民である。

希臘と自然

一個の國土として希臘の特徴とする處は吾人が曩きに述べしフェニキヤよりも、又、今日の諸威或は英國よりも海陸の配置狀態が極めて理想的に構成せられて居ることである、卽ち深く內地に食入つた灣は水深きが上に其附近に散布した島嶼や半島は自から風波を避けしむる防波堤となつたのであるして斯くの如き地理的狀態は此國土をして夙に海上交通の搖籃たらしめたのである、只だ之れが大なる發展はフェニキヤの海上に有せし勢力の爲めに一時阻害せられて居たのであるが其後フェニキヤがアッシリヤバビロニヤ及埃及の爲めに其勢力を失ふに及んで希臘の都市は茲に始めてフェニキヤの羈絆を脫して自由なる發展を遂ぐるに至つたのである、加ふるに希臘の本土が其面積狹小なると共に地味が瘠土であつたことは自から多數の人口を養ふこと能はざりし結果、殊に地中海の東部方面に多くの移住者を出すこと丶なり、斯くして本國と之れが殖民地との間に漸次交通が頻繁となるにつれて、後者の住民は專ら希臘本土の生產物又たは工產物を文化の程度低き諸國に少からざる利益を得て轉賣せしことが、やがて希臘本土に於ける工業的活動に非常な刺戟を與へるに至つたのである。

エギナ

エギナ(Aegina)の島の如きは其自身充分なる農產物を生產すると能はざりし結果、島民の多くは早くより各自が海上交通上又たは通商上好地位にあるを利用して彼等の間に製造せられし陶器、金屬的製品、香油其他の雜貨を輸出せし以上に他方面の產出にかゝりし貨物や穀物を取引して其間、少からざる富を集積せしが如きである、而して此島の取引關係が比較的廣き範圍に亙つて居たことはペロポネスス(Peloponnesus)(但コリント(Korinth)を除く)及北部又たは中部希臘の大部分に於て所謂エギナの度量衡と貨幣とが使用せられしことにて之れを知るを得るのである。

コリント

以上、エギナの場合と同じく其地位の良好なりしものはコリント市で、同市は一面にはペロポネスス方面に於ける陸上交通を支配すると共

にマレア(Malea)岬附近が海上最も危險性を有せし結果、自然之れを避けるに至りしことはコリント市をして更に東部方面と西部方面との間に於ける海上交通の

ミレトとサモス　中心點たらしむるに至つたものである、殊に希臘人の經濟生活にして最も見る可きものありしは小亞細亞の西海岸方面で、此方面に於ける彼等の商業は著しく膨脹發展し、例者、ミレト(Milet)は四通八達の地位に存せし爲め商業上、工業上、著しき意義を有せし以外に之れが比較的强大なる海權と發達せる敎育と大なる富を有せる點に於てイオニヤ人の前衞たるに恥ぢなかつたのである、又サモス(Samos)の住民も早くより海上交通に從事し彼等の產出せる陶器類及金屬等をプロポンチス(Propontis)方面に齎らせしものである。

アテネ　斯くの如く希臘の各地方に於ける商業が著しき發展をなせしに對して比較的後れて交通上の好地位を利用せしものはアテネ(Athene)である、彼のテミストクレス(Themistokles)がアリスチデス(Aristides)の意見に反對してアテネの將來は海上に存するとを主張せし際に、アテネは急激に農業的國家から商工的國家に變化するに至つたのである、殊にイオニヤ人の叛亂は從來、最も繁榮を極めし小亞亞細の西海岸を疲弊せしめしと共に希臘の本土が再び政治上經濟上の覇權を握るとなり、又ミレトが破壞せられしとは此方面に於ける商工業をして、之れと同族的關係を有して居たアッチカ(Attica)方面に移らしむるに至つたのである、尙ほ波斯戰爭はアテネを盟主としたデルフィ(Delphi)同盟の成立となり之れによつて同市に流入した豐富なる資金は單にアテネをして政治上の有力なる地位に上らしめしのみでなくて、同時に商業上に於ても甚しき發達を遂げしむるに至つたのである卽ち一時、通商上の中心たりしチルスが衰微し、それと共に希臘の諸市が勃興せし場合に於てアテネは何時しか是等の都市を凌駕して、其勢力を占むるに至つたのである、殊にペリクレス(Perikles)の政治はアッチカの首都たるアテネをして藝術上、學問上の中心たらしめしと共に同時に內外貨物の大なる集散地と化せしめたのである、而して有名なプルタルクス(Plutarchus)は彼れのペリクレス傳に於てアテネに於ける商業が如何に活潑に營まれしかを最も巧に描寫せるのである、然かも希臘人殊にイオニヤ人の事業慾は彼等をして單に內地方面の活動に止らしめずして、更にフェニキヤ人の跡を逐て亞細亞の內地に經濟的侵略を試まし

むるに至つたのである、斯くして黑海の沿岸に設けられし彼等の殖民地やキレネ(Cyrene)及ニール河口に於ける彼等の商館は今や亞細亞方面に對する希臘人通商上の一基點たりしと共に印度及支那方面の產物はシリヤ方面の商人の媒介によらずして直接希臘本土に齎らさるゝの盛況を見るに至つたのである、それと共に希臘自身の生產物も亦た是等の商路によつて亞細亞方面に輸入せられたのである。吾人が既に前に述べしが如く希臘其の者の有する地味が極めて貧弱であつたことは僅かにヒメトス(Hymettos)山中の蜜及橄欖油、葡萄酒等の二三種を商品として與へたのみで、希臘に於て最も著しき意義を有せしものは農產物でなくて工產物であつたのである、卽ち同國に於ける手工業の如きは既に早くより發達し、其結果輸出向工業に於て見る可きもの多く、例者、中世のニュルンベルグ(Nürnberg)に比す可きエギナは美術品其他各種の雜貨に於て、テーベ(Thebe)は車輛の產地としてエフェスス(Ephesus)及ミチレネ(Mytilene)は何れも良質の香油を產する點に於てチオス(Chios)とサモスは毛織物類コリントとカルチス(Chalcis)とは何れも金屬的製品を以て有名であつたのである、次ぎにアテネより多く輸出せられし商品は皮革的製品、鑄造物、武器等で又た金銀細工や石彫細工等も此市の聲價を上げたもので殊に希臘の各地に於て見るを得たものはアテネ市製造の陶器である、而して是等アテネ產の陶器にして現存せるものには或は人物或は花鳥等が常に描かれて居るのを見るのである、斯くの如く希臘の工產物が豐富であつた結果、其多くが輸出せられしと共に希臘人にして他方面に發展せしものも亦た決して少くなかつたのである、今之れが重なる中心を求むれば北部亞弗利加方面ではナウクラチス、波斯方面にてはニラルム(Nilarm)とクレネ黑海方面では之れが北海岸にありしタナイス(Tanais)オルビア(Olbia)オデスス(Odessus)テオドシア(Theodosia)に對して南海岸にはシノペ(Sinope)トラペゾント(Trapezunt)ファシス(Phasis)等が存して居たのである。而して是等黑海沿岸地方は單に希臘方面から齎らされし商品の顧客たりしのみでなくて此方面から輸出せられし建築用材はアッチカ地方が森林に缺乏せし結果、アテネの造船所に於て非常に歡迎せられ、其他造船上に使用せられた麻布、黑色塗料、瀝青、皮革、蠟等の如きも何れも此地方の產する處となつたのである、又、希臘方面に於ける製造工業の發達につれてポンタス及トラキヤ方面よりの奴隷の輸入が最も重

要視せられしと共に、希臘の貧弱な國土が益々工業化するにつれて海外殖民地より食料品の輸入の必要を感ずるに至り、斯くてアテネの如きは之れが需要の大部分に加へて魚類及獸肉の如きを專ら黑海の沿岸地方より求めたのである、卽ち今日、クリム(Krim)半島及南部露西亞に於て屢々發見せらるゝ希臘製の粧飾品及陶器は當時此方面の農產物と交換せられた證左を吾人に示すものである之れを要するに希臘人は曩きにフェニキヤ人によつて開拓せられた世界的商路を更にポンタス方面迄延長するに至つたのである。

希臘人の對外的活動　以上述べしが如く希臘人は單に多島海や之に接する地方との商業のみに滿足せずして、彼等は更にフェニキヤ人の例に倣ふて東洋方面の產物を南部歐羅巴方面に齎らすに至つたのである、斯くして北部亞弗利加、シシリー下部、伊太利、南部佛蘭西、西班牙等の地方に希臘人の移住を見る事となり、殊に彼等の通商上天與の地位を占めしものはタレントで單に其位置が良好なるばかりでなく、灣內は到る處魚族に富み、其附近の地方よりは良質の羊毛を產し、其他紫色染業や金屬細工業の盛大であつた事は此市をして單に希臘商品の媒介者たらしめし以外に自から輸出品を他に齎らすに至つたのである、尙ほシシリーの都市中で農產物殊に穀物取引に於て重要な意義を有したのは彼の巖上に設けられたシラクス(Syrakus)の都市である、そして此都市は古代に於て最も壯麗を誇つた商業市の一つであつたのである。

地中海畔地方に於ける希臘人の經濟的活動は、現はれて幾多希臘殖民地の成立となり、是等の殖民地は本國との間に出來る丈け通商上密接なる關係を維持せんとせしもので、而して希臘人の取引の中心となつたものはアテネで、彼れは其商業の最も發達せし時代には同時に最高の政治的權力を握つて居たのである、以上を以て見れば詩人シルレルが云つた如く希臘人は、單に美くしき生活の夢を見しのみでなくて、又た純乎たる物的方面に興味を感ぜしとが、希臘其者の文化を發達せしめる重要なる要素となつたのである。

マセドニアの經濟的活動　當時の世界的交通上に更に大なる進步發達を齎らしたものはフィリップ(Philip)二世とアレキサンダー(Alexander)とである、彼等はマセドニア(Macedonia)をして希臘全土の覇者たらしめしと共に丘陵其他の自然的障害物によ

つて地理的にも政治的にても互に分離せし地方の一般の中心點たらんとしたのである、卽ちマセドニヤの君主は希臘人の勢力を統一して世界的商業上に一個の新しい途を開き之によつて希臘の風俗又は分化を亞細亞の內地に普及せしめんことを努めたのである、斯くて彼等によつてなされた戰役は云はゞ一種の地理上に於ける發見的企圖で、其結果は當時に於ける西方の諸民族をして各自の有せざりし新たなる地理上の知識を獲得せしむるに至らしめたのである、尙ほ軍事上の目的によつて建設せられたアレキサンドリア(Alexandria)なる都市は單に今日存するエ及のアレキサンドリアのみてなくて亞細亞方面に於ても設けられたのてあるが、そは軍事上よりも商業上又は交通上に便利なる地位を有せし結果、其多くは希臘人移住の中心と化するに至つたのである、何んとをれば希臘本國に於ける人口過超の狀態は自から同國人をして是等の新設都市に向はしめ、茲に東洋方面は新たに希臘思想の洗禮を受くることとなり、之れが一面には東西民族の融和を齎らすに至つたのである、殊にアレキサンダーの如きは海陸方面よりバビロニア及印度の方面に兵を進め、此間に於て希臘の商人は小亞細亞及埃及方面に於ける媒介的取引を脫して單刀直入、印度方面に進み得し機會を與へらるゝに至つたのである

希臘の商業上に於ける衰微

然かもアレキサンダーの活動は希臘人の經濟生活によりては、云はゞ燈火の滅せんとする刹那に於て一時、より多くの光を放つが如きものて、今や一般の世界的商業的地位には、著しき變化を生じ、アテネ先づ商業上及交通上に於ける過去の優越性を失ふと共に、希臘の商業的中心は幾多の方面に分裂し卽ち東方に於て最も勢力を有せしものはエフェススミルナ(Smyrna)ローヅスチシクス(Cyeikus)等てある、殊にアレキサンダーの世界的大帝國が崩壞せし以後に於て之が物質的精神的文化の繼續者はシリアに於けるセレウキヤ(Seleucia)王國と埃及に於けるプトレメウス(Ptolemaous)朝とてある殊に後者の政治的勢力は單にアレキサンドリアを以て學問藝術の中心點たらしめしのみならず、同時に古代に於ける最も大なる商業的中心として之れが商船はフェニキヤの通商的範圍を越えて東部亞弗利加及印度方面に赴き、其繁榮は羅馬の時代に於て更に層一層の見る可きものであるに至つたのである。

伊太利半島

以太利半島は吾人が前に述べし希臘に比すれば、海岸線の屈曲出入の

の經濟的意義

程度に於て遙かに及ばざりしものにして同半島の特徴は、寧ろ希臘と反對に住民をして農産物收穫の爲に之が肥沃なる平野を耕さしめ、日當りよき處に葡萄を栽培し橄欖樹より油をとり、石灰質の丘陵地帶に羊や山羊を飼はしむるに適したのである。換言すれば農業と牧畜とは羅馬人にとりて社會的基礎を構成したのである、斯くして羅馬史の著者として著名なモムゼン(Mommsen)は羅馬を以て農民的國家、海洋其者より遠ざかれる國家と見做してゐるのである。

エトルリヤ

羅馬人の商業に就きて第一に吾人の注意に上る點は以太利の北部に於けるエトルリヤ人(Etruscans or Etrusci)との交通である、而して此エトルリヤ人が最も古く住せし處はアルノ(Arno)河口の地方で、斯くて其近海にあるエルバ(Elba)が鐵鑛に富みしとや、彼等が最も熟練せる技能を有せし事が夙に此方面に金屬工業及製陶業の發達を齎らすことゝなり、而して、此地方が海岸線の發達せざる結果、港灣の見る可きものなきに不拘、彼等によつてなされし製品は他方面に輸出せられ、現に西暦紀元前二千年に於てフェニキヤや東方諸國と經濟的關係を結ぶに至つたのである、即ち屢々北部以太利の古墳中より發見せらるゝものは、明かにエトルリヤ人が埃及小亞細亞、希臘、カルタゴ(Karthago)と通商的關係を有せしことを示せるのである、又た他の方面に於てはアルプス以北即ちバルト海方面、ワキゼル河口地方及ライン、ローヌ流域地方に於て其製品の普及せることを認めしむるのである、斯くの如くエトルリヤ人は單に經濟上に活動せしのみならず、同時に政治上に於て全半島の覇權を掌握した時代が存したのである。

羅馬が全く伊太利半島を征服するや、やがてシシリー事件に對する干渉は遂に北部亞弗利加に於けるセミチック族のカルタゴと衝突を惹起するに至つたのである、吾人は此問題に入るに先ちて、羅馬其者の經濟的活動に重大なる意義を有して居たオスチヤ(Ostia)に就きて述べて見たいと思ふ。

オスチヤ

オスチヤは單に羅馬に於ける最古の殖民地たりしばかりでなくカルダゴ征伐の際には海軍の根據地となり、更に帝政時代には當時の羅馬にとつて最も重大な意義を有した穀物倉庫の所在地となつたのである、而して此廢址は羅馬市を西に去る約二十粁で、若、自動車の便を借れば同市の中心たるピアッタア、ヴエネチヤ(Piatta Venezia)から約一時間でオスチヤの堡壘に達するを得るのであ

る、此堡壘は沿岸防備の爲め僧官ギュリアノ、デラ、ロヴェレ(Giuliano della Rovere)の命てバチオ、ポンテリ(Baccio Pontelli)が千四百八十三年から千四百八十六年にかけて築造したもので、此附近の地を一目の下に眺むるには極めて適當した建物である、卽ち此高臺に登つて見ると西にはチルレニア(Tyrrhenia)の海が湛へて居ると共に、其處には羅馬にとりて「生命の親」とも稱す可きチベル(Tiber)河が南北二流に分れて注いで居るのである、而して南流の海に注いで居る處から陸地に向け約二百米の處に今も尙ほ寂寞たる感を抱かしむる高樓が殘存して居るが、此高樓は其名をトルレ、ボアチアナ(Torre Boacciana)と稱して今を去る千八百年前船乘にチベルの河口を知らせた燈臺(Pharus)の遺址に築かれたものである、一體此の邊の海岸線は昔時と今日とは著しき相違があつて、今日では海は遙かに陸地に食込んで居るのである單に海岸線に大なる變化があるばかりでなく、同時にチベル其者も昔時と今日とは其流域上に變化がある、卽ち現時のチベル河はボアチアナから東約半粁の處で鋭角を描いて北方に曲つて居るのであるが、中世時代の河流は(古代も略ぼ同一の方向に走つて居たやうてある)今日の如く北方に曲らないて其まゝ東に流れて堡壘の城壁を洗つて居たやうである、而して此河の南岸にかけて河口から東一粁半に亙る地域は羅馬時代に於けるオスチャ市の所在地で先づ同市を東西に貫いて居る本通(Decumanus)は直接羅馬街道(Via Ostiensis)と連絡し、又此本通と第二の通(Cardo)と互に交叉せる處が市の中心て此處にフォルムが存在し、而して此フォルムは河岸を去る約百五十米て、フォルムと市の南境との間の距離はフォルムと河岸との距離の略ぼ二倍である、尙ほ今日迄の發掘によつて推定せらるゝ處によれば同市の面積は約四十乃至五十ヘクターで昔時の密集的な住居ては約五萬人を入るゝに足ると云ふことである。

更に市の內外に亙つて重なる遺蹟を考察すると先づ市の內外を分つ城門は共和時代から帝政時代にかけて同一の場所に存せしが如く、而して城門外に於けるヴィア、オスチェンシスと之と平行に南に位するウィア、ディ、セポルクリー(Via del Sepolcri)と共に市民の墓地に供せられた地面て、一部は市の名譽職や富豪を葬つた場所て、他は自由民及奴隷の共同墓地で、前者に屬するものゝ中には莊麗な煉瓦造や五色て粧飾したものが少くない、又帝政時代の初期に屬した墓碑の如きは考古學者にと

りて興味ある研究を齎らすものである、次ぎには直接城門に連結した城壁であるが之れは古代に於けるラチウム(Latium)の都市に見るが如き方石材の城壁でもなければ羅馬のアウレリアヌス(Aurelianus)の城壁に見るが如き煉瓦でもなく、寧ろ一種の火山的の石材を不規則に積み上げたもので、之は普通紀元前二世紀から一世紀にかけて吾人の見る處である此防備的意義を有する城壁には其後城門より南三十米を隔てゝヴィア、ディ、セポルクリと城壁の内部とを連絡せしむる第二の城門卽ちポルタ、ロマナ(Porta Romana)なるものが存して居たのである、而して此二個の城門に挾まる城壁の内部は廣場で其南方には家畜用の貯水池今尙ほ存して居るのである、之れは明かに此廣場が羅馬に赴く客の乘合馬車の留場となつて居た事を示すものである、何んとなれば、斯くの如き場所は單にオスチヤ一箇所に止まらずして羅馬ではヴィア、アピア(Via Apia)の入口は御者廣場(Area Carruceo)があるし、ポムペイ(Pompeji)にも市の一隅に一頭曳きの馬車停留所(Ad Cisiarios)があつたのである、尙ほ前に述べたオスチヤの廣場の中央には約三米大の勝利の神の大理石像があるが、之は帝政時代の初期に於ける所作で、疑もなく最近發掘せられたものゝ中では最も優秀な藝術品と稱す可きものである、又同廣場の北の邊には小規模の建築物が澤山あつたのであるが、之れは主として市民に對する市場の如きものである、此市場から百米を隔てゝ本通りが通過して居るが、其道幅が二十米で、之れは羅馬の何れの街路にも見る事の出來ぬ處である、而して此本通の北側は商店や倉庫の所在地となつて居たのである、次ぎに此本通に交叉してチベル河畔に達して居る一小路(Via dei Vigili)の附近は昔時に於ける大都市の典型たる宏壯なる邸宅の所在地で、是等の邸宅と街路とは紀元後一世紀の終末より古くないのである、尙ほ當時の遺物は今日では地下一米半の處から熾んに發掘せらるゝのである、更に此小路の後方に當つて千九百十一年から其翌年に亙つて發掘せられた浴場がある、此の浴場とチベル河畔との間に消防夫の合宿所がある、既に羅馬にありてもアウグスチヌス(Augustinus)が消防夫の一隊を組織したことがあるが、オスチヤ市は殊に羅馬市民にとりて必要な且つ火災の爲に損失を被むる貨物の集積せられた倉庫を有せし結果、此處にも多數の消防夫が派遣せられたのである、殊にトラヤヌス(Trajanus)とハドリヤヌス(Hadrianus)とはともに此の地にありし消防夫の爲めに宏大な宿舍

を設けたのである。更に本通に平行した小路を通過すれば、今や全部發掘せられた市の劇場に達するのである、此劇場は其始めアグリッパ(Agrippa)の創設にかゝり其後セプチミニュス、セヴェルス(Septimius Serverus)の際に根本的に改築せられたのである、而して此劇場の遺跡に就いて特に興味ある點は各室に於ける黑白兩色よりなるモザイックである、尙ほ是等のモザイックの中に、特に古代に於けるオスチアの商業的生活を回想せしむるものがある、卽ち帆や舵を供へた船舶であるとか、穀物を量る桝とか、數層の燈臺であるとか、更に興味あるのは是等の室々に記された文字で、卽ち是等の文字によれば外國方面に於ける海運業者の組合が此地に各自の事務所(Scholae)を設けて居たことが明白であると共に同時に種々の組合の存せしことを知るを得るのである、尙ほ此劇場附近には四個の殿堂や俗にピスチナ(Piscina)と稱せし倉庫や、麵包燒場等の遺趾が存し、又、フォルムに近くオスチヤの殿堂として最も市民の尊信を受けしヴルカン(Vulcan)の遺趾がある、次ぎにカルドの西方に當つて帝政時代の建築物の殘存せるものと認む可きものがあるが、今日の學者の說明によれば多分オスチア市の市場(Mecellum)であるとのことである、尙ほ最近發掘の結果によれば此建物の附近には共和時代の城壁の遺物が存して居ると云ふことである、其他、以上の廢趾と舊時の海岸線との間にはチベル河に沿ふて工場や倉庫の所在地なりしことを認む可き數多の遺物發掘せられ、又、河口卽ちトルレ、ボアチアナの附近には今ま尙ほ埠頭と見做す可き地點が存して居るのである、尙ほ此附近の地域には個人の住宅多く、現に千八百六十年頃に發掘せられたパラッオ、イムペリアル(Palazzo Imperiale)の如きは常に豪奢を極めた邸宅と推定せらるゝのである、要するに古代都市の典型と稱せられたポンペイが火山的丘陵地帶に創建せられた結果、其街路の如きは多少の不規則なる狀態を呈せるに對してオスチヤの市は平野に位する結果其街路の如きもポンペイの場合と全く反對に秩序整然として恰も現時の北米合衆國の都市に髣髴たる觀を呈して居るのである。

羅馬對カルタゴ　羅馬が伊太利全土に其勢力を及ぼすや所謂シヽリー事件を惹起すに至つて茲に亞弗利加の北部海岸に於けるセミチック的國家と衝突を惹起すに至つたのである、而して此のセミチック的國家であるカルタゴは吾人が前に述べた如くフェニキアの殖民地で本國卽ちシリア方面に於ける都市が相次いで衰

徴するに至つたことはチルスの如き其市に住せし名家富豪をして此カルタゴに移住せしむるに至りしと共に、カルタゴ其のものゝ位置が亞弗利加の北海岸の突出せる部分に位せし結果、之れが背地方面との交通に便利多く、斯くて商業上見る可きものが少くなかつたのである、卽ち當時、地中海の東部方面は殆んどカルタゴの勢力範圍の下に存せしよつて獨占せられしに不拘、西部方面に於けるシリア方面よりの殖民地は勿論、其他のもので卽ち亞弗利加の北海岸地方に於けるシリア方面よりの殖民地は勿論、其他コルシカ、サルヂニア、マルタ(Malta)及びバレアレン(Baraalen)等を服し、更に亞弗利加の內地方面に對してもカルタゴの隊商は通商的關係を結んでフェニキヤ方面より齎らされた工業品を以て內地の產物たる象牙、黃金、鴕鳥の羽毛、無漏子、食鹽等と交換したのである、而してカルタゴがシシリー方面に之が勢力をはらんとしたとは羅馬との衝突を惹起し、其結果、カルタゴは一敗地に塗れて羅馬は更に新しき勢

領土擴張と羅馬の經濟生活

力を加ふるに至つたのである、然し斯くの如き領土の擴張は羅馬に於ける手工業の發達を妨げたのである、何んとなれば羅馬人はより低廉なより良き品質を有せし外國品を容易に求め得しを以てゞある、斯くて羅馬方面よりの輸出物として當時吾人の注意に上りしものは單に橄欖油と葡萄酒のみで其他の主なる商品は日用品より贅澤品に至る迄何れも他方面より輸入せられ、之れに對して羅馬は被征服者より徴收した租稅、其他暴力によりて集積した貨幣を以て支拂つたのである、斯くして吾人が前に述べた如く其處に獨立せる工業の見る可きものなかつたことは絕えず羅馬をして輸入超過の狀態に置かしめ、商業上幾多外國方面より贅澤品の輸入を見るに至り、結局以太利全土の幸福を地下に葬るに至つたのである、只だ地中海方面に於ける商業の發達は此の內海地方をして昔時、フェニキア時代に見しが如き秘密鄕たらしむるとなく、殊に羅馬帝政時代に於て之れに隸屬せし領土が史的發達の頂點に達したことは從來、互に隔離せられて居た制限を打破して玆に交通上に完全なる自由を發揮するに至つたのである、卽ち此時代に於て地中海は羅馬にとりての一內海と化し、之れを中心として思想上、又たは經濟上當時に於ける文明國を結合せしめたのである、斯くてタレント(Terent)アンコナ(Ankona)レギウム(Rhegium)及アンチウム(Antium)の如き以太利の諸港には內外の貨物輻輳し、又、チベル河口に位せしオスアの港が如何に羅馬にとりて主要

なる意義を有せしことは吾人が前に述べしが如くである、更に當時に於ける羅馬は世界の國際市場と化し、其狹き街路には東西兩洋の珍品到る處に陳列せられ、世界各地の言語を此都市に於て耳にするの盛況を呈したのである、而して以太利半島内に於ける地味の豐饒なる地方が漸次貴族の爲めに遊園、聖林、池澤、牧場と化せらるゝこと多きに從つて、當時羅馬の倉庫と稱せられて居たシヽリーは益々小麥、豆類、屠殺用家畜の如き各種の食料品を供給したのである、又た西班牙は此時代に於ても其以前にても極めて繁華にして人口緻密な都市たりしカヂスよりして赤色の羊毛を供給し、ゴール地方はマッシリアを經て豚肉、脂肪、鹽魚等を齎らし、更に東部方面よりして羅馬が求めしものは希臘產の葡萄酒、蜂蜜、牡蠣、家鷄、孔雀、鶴等で是等は何れも羅馬市民の食卓を賑はせしものである、尙ほパロス(Paros)とフリギア(Phrygia)方面から齎らされた大理石は柱其他に利用せられて羅馬建築の美を後世に遺すに至つたのである。

羅馬時代と東部方面の都市

羅馬時代に於ける東方の商工的都市の中には商業上の狀態に於て多少以前と異なるに至つたものがある、例者コリント市の如きは享樂的生活の主要なる中心點として昔時の盛況を回復したのであるが、然し希臘に於ける都市の大多數は絕えず衰微の狀態に存しアテネの如きも昔時に於ける世界的通路より遠ざかりし結果、單に思想上の中心として認めらるゝに過ぎなかつたのである、更に小亞細亞の沿岸地方に就きて見るにエフェサスとスミルナとは共に此方面に於て其名を知られし商港なりしが今やローダスの爲に凌駕せられ、殊に後者は當時にありては極めて大規模の造船所を有して居たのである、以上、希臘及小

羅馬對埃及

亞細亞方面に比して更に交通の頻繁であつたのは羅馬對埃及の關係である、卽ち前者によりて後者が征服せられたとは却つて此地方の工業上に大なる刺激を與へ斯くて當時の大工業に於て埃及人が獨占的地位を有せしものが少くなかつたのである、殊に名聲を博したものは昔時より此方面に發達して居た亞麻布の製造で、是等の商品は單に上衣、下着、敷布、帆布として使用せられしのみならず、同時に種々の模樣を施した精巧なるものを產したのである、次ぎに此國の輸出貿易上、昔時から有名であつたのは玻璃器で、これが精巧なるものは多くアレキサンドリアのもので羅馬に於ける貴族富豪の家庭では金銀の食器より

も、より多く尊重せられたのである、又勞働者の多數を使用して居た製紙業は主としてニールのデルタに繁茂したパピルスを原料にしたものである、其他、香油、香料各種の石細工品、皮細工品等が當時にありては此方面の重要な輸出品として目されたもので、是等製造工業の中心はアレキサンドリアである、斯くて同市は商工業の中心と化せし結果、常に其港内には大小の船舶輻輳し、陸上には亞弗利加及亞細亞兩方面の諸民族例者エチオピア人、リビア人亞剌比亞人及印度人等が各自、自國の服裝を身に纏ふて市内に出入したとは所謂異國情緒なるものを十分に現出せしめたのである、彼の好戰的なバルチア人が東方に於ける交通路を遮斷するに至つたとはプトレマイオス朝をして印度方面との交通を頻繁ならしめんが爲に紅海の沿岸に商港を設け同時に内地方面との連絡をなさしむる爲に運河の開鑿を企てしめたのである、而して之を當時の歴史に見るも印度方面との貿易は非常なる膨脹發達を遂げしものにしてストラボ(Strabo)の記す處によれば年々百二十艘餘の商船がマラバル(Malabar)の沿岸地方に航したと云ふとてある、又アレキサンドリアよりニールを溯つてコプトス(Koptos)から隊商の便を借つてベレニス(Bere-

nis)(今日のスアキム(Suakim)地方に出て、之れより亞剌比亞海を經て印度方面に幾多の貨物が齎らされたのである、加ふるに錫蘭島の如きも當時印度人、亞剌比亞人及支那人との間に貨物の取引が營まれたのである、之れを要するに亞剌比亞及自餘の亞細亞方面との取引は殆んど十中八九アレキサンドリアを中心とせしもので、爲めに從來、此方面の商業を一手に引受けて居たシリア、フェニキア方面は著しく衰微するに至つたのである。

羅馬と東洋方面の貨物　ネロ時代に於ける羅馬方面への輸入品の目錄は當時東洋方面から齎らされた貨物の如何なるものなるやを知るを得るのであるが、其中には香料支那産生絲、絹織物、印度方面の更紗、デカン(Dekan)産の金剛石、ルビー、サファイヤーの如き各種の寶石、更に波斯灣及錫蘭島附近に産せし眞珠は羅馬の貴婦人にとりては寶石よりもより多く尊重せられたのである、斯くして印度方面より以太利に齎らされし奢侈品の總額は絹織物と寶石とのみにて年に約八百萬圓に達したのである。

次ぎに當時に於ける世界的商業の發展上に著しき意義を有したのは亞細亞方

南北歐羅巴の交通　面に對する通商以外に南北歐羅巴の間に交通の途が開かれたことである、既に石器時代青銅及鐵の時代に於て北部歐羅巴の琥珀の産地と中部歐羅巴に於ける貴金屬の産地との間には其處に多少交易の事實存して居たことはヴルガスの「原始時代よりフランク王國成立に至る迄の獨逸の商業」(Vargas, Der Deutsche Handel von der Urzeit bis zu Entstehung des Frankenreichs)が明かに吾人に示す處である、降て羅馬の兵營がドナウライン兩河の附近に設けらるゝと共に是等の方面と羅馬との間に於ける連絡的通路がアルプス越によつて開始せらるゝに至つたことは自から羅馬方面の大商人をして北部に於ける獨逸民族に接せしむるの機會を與ふるに至つたのである、但、之れが初期に於ては南方商人が奢侈品を齎らして純朴な習慣を破壞すとの故を以て、北方民族の間には彼等商人の來るを防止したのであるが然かも大勢の向ふ處、斯くの如き鎖國策を永續せしむること能はざりし結果、羅馬の商人は專ら衣類、家具、陶器、玻璃器、其他金銀の粧飾品を輸入したことは今日發掘せられる古墳中より發見せらるゝものによつて之れを知るを得るのである、當時獨逸民族にとりて主要な財産として認められたものは主として家畜類で牛馬羊豚は專ら自餘の財産を評價する標準に使用せられたもので、隨つて商業上、最も主要なる交換的手段となつたのである、殊にチュリンゲン方面に産出せし馬匹は體軀小なるも能く勞役に耐ゆとの故を以て羅馬の武人によつて賞用せられたのである、加ふるに獸皮の如きも彼等にとりて僅用多かりしものである、又獨逸の牧場に飼養せられた鷲鳥も羅馬人の賞味したもので、更に獨逸人が戰場其の他の場合に獲得した奴隷や主として下部ラインにて製造せられ羅馬の貴婦人の假髪(カツラ)として使用せられた黄金髪の如きも共に重要な輸出品であつたのである、尚ほ獨逸の農作物の中で羅馬皇帝の食卓を賑はしたものは甜菜と赤大根とである、而して以上擧げたる諸産物よりも更に多く羅馬人の心を引付けしものは北方の黄金と稱せられし琥珀である、即ち之れが用途は或は貴婦人の粧飾品に武器又たは獵具の飾りに或は子供の護符に更に醫師によつて藥用に供せられたのである、而してこれが主なる産地は東普魯西の一半島であるザムランド(Samland)でライン、モーゼル、ソーヌ、ロース等の諸川を經てマッシリヤに齎らされ、此の地にて英吉利方面よりの輸出品たる錫と共に羅馬方面に輸入せられたのである。

海上交通の點では羅馬人は殆んどバルト海には達しなかつたやうである、而して西暦紀元前四世紀にマッシリヤのピテアス(Pytheas)が歐羅巴を周航した際、到着せしと稱せられし、ツレ(Thule)の島はアイスランド(Island)でなくて寧ろ今日のシェットランド(Shetland)諸島であると思ふ、羅馬人は此マッシリヤ人の發見的事業を利用して一方には英國に於ける自己の勢力を擴張すると共に羅馬の艦隊は屢々西部獨逸の近海に現はれたのである。

羅馬の滅亡

羅馬は一日にしてならずと稱せられし羅馬は如何にして滅亡せしやの問題は今日まで歴史家にとりて興味ある問題であるがエッアルト・マイヤー(Eduard Meyer)及ルヨ・ハルトマーン(Lujo Hartmann)等の説によれば之れが眞の原因は北狄の侵入や内亂にあらずして、羅馬が「カルタゴ」征服後此方面に於て大地主制度(Latifundium)の發達は低廉なる穀物を以太利に輸入するの機會を齎らすに至り、而して低廉なる穀物の輸入は以太利其者に於ける農業を根本的に破壞するとなり、農民の多くは其職業を失したる結果相爭ふて都市に入りしも、是等の都市は大小の程度に於て其附近の農村を顧客として發達せし者なるを以て、地方の衰微は都市の衰微を意味し斯くて羅馬は經濟的に滅亡するに至つたのである。

第三章　中　世

コンスタンチノープルの意義

羅馬の時代に於ては地中海の沿岸地方を通じて、其處に政治上の統一の相違を存せしもので、殊にコンスタンチヌス(Constantinus)が金角灣頭に一個の新らしき世界的都市を創建せし以來、東羅馬帝國が、ともすれば北狄たる獨逸民族の爲めに又は民族移轉の爲めに、帝國の中心たる意義を失せしに反してコンスタンチノープル(Constantinople)は羅馬の繼承者たる地位を占むるに至つたのである、而して斯くの如く同市をして當時に於ける世界の文化的經濟的中心たらしめしものは勿論他に諸種の原因ある可きも之れが主なる要素は地理上樞要なる地點を占めて居た點である、斯くて自然的地位によつて驚く可き發達を遂げたコンスタンチノープルは中世の初期に於ても尚ほ其勢力を維持して居たのである、何んとなれば當時の通商上に於ける範圍は之れを羅馬の共和時代に比する時は遙かに

廣大なる部分に亘り、新民族、新領土、新海洋がコンスタンチノープルの通商上に解放せられて居たのである。

北方民族と交通業　北部獨逸民族の間に於ける造船業は既に古代に於て相當の發達を遂げて居たことは青銅時代の遺物と稱せらるゝスカンヂナヴィヤ(Scandinavia)の巖壁に刻された諸種の模型が之れを示すと共に、北方神話の中にも航海者殊に海賊者の存せしことを表現し、又、羅馬の史家タキツス(Tacitus)は既に此の方面に於て沿岸航海に從事せしバダベル(Bataver)ブルクテル(Brukter)フリース(Friss)等の諸民族の割據せしことを物語れり、就中フリースは後世のハンザ同盟の船舶に見るが如き帆船を以て旺んに北部歐羅巴方面を通航し、又たバルド海の南海岸に沿ふてエルベ以東のスラブ民族も海運に從事し、茲に從來海賊の横行跋扈を極めし方面が世界交通上に開放せらるゝに至つたのである。

古代のフェニキヤ及希臘によつて開放せられた西部方面、即ち以太利、西班牙、佛蘭西の諸國中、佛蘭西はマルセイユを以て之れが通商上の中心とせしもので、從つてコンスタンチノープル及東洋諸國の使節がメロヴィス(Merovis)王朝及びカロルス王朝に派遣せられた場合には十中八九、マルセイユに上陸して、それより兩王朝の政權所在地に赴いたものである、但、當時に於ける是等兩者間の外交的史料が缺除せることは、當時是等の外交的關係が果して如何なる影響を通商上に與へしかを知る能はざることを遺憾とするのである、尙ほ當時北方に赴く途は羅馬時代の如くロヽヌ、及ライン等を經て獨逸やフリースの沿岸地方を經て英國に達したのである。

更に東羅馬帝國の商人はコンスタンチノープルより昔時の希臘人によつて開かれし通路を經て東方に向つたのであるが、而し希臘人の如く黑海沿岸に於て露西亞內地の生產物を取引するを以て滿足せずして彼等は進んで北方民族と直接的の通商關係を結ぶに至つたのである、即ち露西亞內の河流が其勾配極めて少く、船運に便なるに乘じて彼等はアゾフ(Azov)海よりドン(Don)の下流に達し、更にウルガ(Wolga)の支流によつて深く露西亞の內地に入ること、他はオデッサよりドニープル(Dniepr)を溯りてキヹフ(Kiew)に達し、それより更にヂュナ(Düna)に入り遂にバルト海に達したのである、而して以上擧げし諸川の流域に於て希臘及北部諸國にて

使用せられし貨幣の多く發掘せらるゝことは明かに當時コンスタンチノープルとスカンヂナビア諸民族との間に旺んに商取引の營まれし、明白なる證左である、之れを要するにコンスタンノチープル、マルセイユ、倫敦、バルト海、オデッサは中世の初期に於ける最も主要なる通商的基點と見做されて居たのである。

ライン地方　勿論以上、擧げし以外の方面に於ても經濟上重要視せられた地方が存して居たのである、例者、ライン流域地方の如きは之れが顯著なるもので、此地方は既に羅馬時代に於て見る可き工業を有せしと共に河川交通の如きも發達し、殊にストラスブルグ(Strassburg)スパイエル(Speier)ウォルムス(Worms)の如き宗教的都市は當時の商業上にとりては重要なる意義を有せしものである、何んとなれば是等の都市にある寺院の祭日に遠近より參詣者の絶えざることは其處に自から一種の市場又たは歳市を催さしむるに至つたのである、殊にマインツ(Maint)の如きは西暦十世紀に於ける亞剌比西の地理學者たりしアル・クアッウキニ(Al-Quzaoni)—彼れの飜譯者たるゲォルグ・ヤコブ(Georg Jacob)の如きは彼れを稱して中世のヘロドタスと稱せり——の記す處によれば「此の都市は小麥、大麥、稞麥、果實及葡萄園に富む云々」とあり、然かも西暦十二世紀の終末には既にキョルン(Köln)市に凌駕せらるゝに至つたのである。

ドナウ方面　以上、ライン流域地方と共に、吾人にとりて注意す可き方面はドナウ流域の地方である、殊にレゲンスブルグ(Regensburg)は當時に於けるバイエルン(Bayorn)の政治的中心たりしと共にドナウ方面に於ける通商上の燒點である、尚ほレゲンスブルク以外に此方面に於て有名なりしはウルム(Ulm)ドナウェルト(Danauwörth)殊にドナウとイン(Inn)との合流地點であるパサウ(Passau)等である、而してドナウ河畔に存せし稅關所「スタイン」(Stein)の十二世紀に於ける關稅表によれば以上の諸市を通じて取引狀態の極めて活潑なりしことを知るを得るのである。

獨逸の東部方面　更に獨逸の東部方面に於ては當時、幾多鬪爭の存せしに不拘、尚ほエルベ・ザーレ線に沿ふて其處には獨逸民族とスラブ民族との間に通商的關係が存して居たのである、殊にメムレーベン(Memleben)メルゼブルク(Merseburg)ギビヘンスタイン(Giebichenstein)クエドトリンブルグ(Quedlinburg)ハルベルスタット(Halber-

stadt)等の諸市場から輸出せられし生産物の集散地はマグデブルグ(Magdeburg)て殊に此の市の主宰者たりし大僧正が市内の商人に對して幾多の特權を與へしことは更に此都市の發達を可能ならしめたのである、但、是等都市の多くは中世の初期迄は何れも大なる市場の所在地に過ぎざるもので、其處には地方の消費に充たされし以外の農産物や、當時漸く發達し始めし工業品の交換に止まつて、遠國の物産の齎らされしことは極めて少なかつたのである、卽ち當時の獨逸に存せしものは多くの場合に於て地方的交通に過ぎなかつたのであるが、斯くの如き狀態に對して著しき變化を與へたものは云ふ迄もなくコンスタンチノープルが世界の商業上より其姿を沒するに至つたことである。

中世に於ける主要なる貨物　次ぎに中世の初期に於て取引せられし貨物の主なるものとしては、北方地帶の毛皮、バルト海産の魚類、當時專ら寺院の祭禮用に供せられし蠟及穀物等にして、殊に英國に於ける品質良好なる羊毛は同國の錫、靑銅等と共に之れが主なる輸出品であつたのである。

尙ほ歐羅巴大陸方面に於て殊に取引の旺盛であつたのはボーデン(Boden)湖畔に於ける農民の副業として昔時から製造せられた麻布で、又、當時最も高價であつたのは專ら東洋方面の民族によつて使用せられた毛織物で、之はフランダー(Flander)方面と下部ライン地方卽ちデュイスブルグ(Duisburg)ドルトムント(Dortmund)アーヘン(Achen)方面で生産せられたのである。尙ほ是等の織物を色付けるために主として使用せられたものは、チューリンゲン(Thüringen)地方に産した染料植物(Isatis-tinctoria)である、更に中世を通じて專ら寺院向きの商品はエルザス産の葡萄酒で、其他ペロポンネサス及チロル産も、亦た歐羅巴に於ける之れが市場を支配したのである。

看府の經濟約意義　以上述ぶるが如くコンスタンチノープルは歐羅巴方面に對する重要なる貨物の集散地と化したのであるが、然し同市の意義は東洋諸國民に西洋諸國の商品や北部歐羅巴の原料品を供給する點にあらずして寧ろ文化の程度に於て當時尙ほ及ばなかつた歐羅巴諸國にとりて、東洋方面から齎らされた高價な品物の寶庫と看做されて居たのである、卽ち之れを事實上に徵するも當時東洋方面に産した奢侈品にして西洋諸國に於ける王侯又は宗教上の大官の需要

する處となつたものが少くなかつたのである、又たビザンチン方面の住民は優秀な技能を有して居た結果各種の工藝美術が發達して居たのである、卽ちモザイクの如き金屬細工の如き象牙細工の如き其他金細工と絹織物の如き何れも當時にありては歐洲方面に對する主要輸出品と看做されたのである。

亞剌比亞商人の活動　何故にコンスタンチノープルが當時にありて總ての商業の重要な地點であつたことは東洋方面に於ける商業上の發達を考察することによつて吾人は明かに之れを理解し得るのである、卽ち東羅馬帝國は之れが背地として東方に於て亞剌比亞文化によつて發達した地方を見出すのである、而して砂漠方面に於けるセミチック族は年少氣鋭の意氣と事業慾とを以て世界史上に活動し小亞細亞は勿論亞弗利加の北岸をも征服した結果コンスタンチノープル方面の商業は一時大なる打擊を被むつたのであるが、然しイスラム敎徒の狂熱的態度が薄らぐとともに極東方面の貨物に對して之れが利益を求めんとする彼等の慾望が熾んなるに至り、斯くてビザンチン方面の商人は亞剌比亞人の勢力範圍で亞細亞方面の產物の集散地たる地方に向つて活潑に通商を營み殊にチグリス河畔のバグダット(Bagdad)の如きは之れが主要なる地點となつて居たのである。

亞剌比亞人の文化的普及能力の下に其が軍隊の通過せし地方には幸福なる平和宿り、卽ち南部西班牙及バレルモに現存する建築物の如き或はシラクスの遺蹟の如き何れもサラケン文化の如何なるものなるやを回想せしむるものである、又當時の人は口を極めて之れが各都市に於ける工業の發達と庭園、田畑、森林の美を稱へる者多く、同敎の勢力範圍を通じて大西洋よりアラル(Aral)湖及スンダ諸島に至るまで各種の關稅或は手數料を徵收しない統一的な商業的區域存し亞剌比亞人の商船又たは隊商によつて取引せられたのである、何んとなれば敎祖モハメット(Mohammed)は商家の出身で商人として各地を旅行し斯くて彼れの敎義に於ては商業を神聖視せし結果、當時に於ける亞剌比亞商人の中には橋梁を架設したり通路や水路を開いたりして便利を與へたもので、後には亞剌比亞商人の勢力範圍は亞弗利加の東海岸からコモレン(Komoren)に及び更に一方には其勢力は小亞細亞方面からカブル(Kabul)峠を越えて印度に達し、他の方面にてはサマルカンド(Samarkand)から蒙古を經て支那に及んだのである、尙ほ同々敎の敎典と仰がれたコラン

が之れが教徒に對して神聖なる義務と看做したのである又たメッカ(Mekka)への巡禮は同時に隊商の組織で、是等の隊商は各地の産物をカーバ(Kaaba)の附近に齎らし、神聖な寺院が亞弗利加、歐羅巴、亞細亞の各方面の産物を交換する重要な歳市となつたのである。

亞剌比亞人は紅海及波斯灣方面に於ても極東方面と西洋諸國との間に於ける通商上の媒介者となつたもので、彼等は此方面の商業を全く獨占し、斯くて彼等は商業上の搾取によつて數百年に亙つて巨額の利益を占むるに至つたのである。

ゲオルグ・ヤコブは亞剌比亞方面の史料によつて當時此方面の住民の工業上に於ける活動と、商業的行爲とによつて西部諸國民に供給した商品に關して極めて價値ある觀察を試みて居るが、其後此史料の補充となつたものは數多の發掘せられた古墳と中世に於ける關税表或は商人の帳簿例者ロストック(Rostock)のヨハン・テルネル(Johann Tölner)ハンブルグ(Hamburg)のヴヰコー・フォン・ゲルデルゼシ(Viko v. Gelderseu)リュベック(Lübeck)のヘルマーン・ウヰテンベング(Hermann Wittenberg)ヨハンウヰテンベルグ(Johann Wittenberg)等の記したものである。

而して當時、西洋諸國に供給せられた商品の中で殊に高價のものは絹織物で、此製品は希臘工業の進歩を以てしても及ばなかつたのである、東羅馬帝國の皇帝が祭典の際に舊時の慣例によつて宮廷の高官に贈つた禮服の材料は十世紀の頃には埃及からコンスタンチノープルに齎らされたもので、又た亞剌比亞人の勢力の下にあつたアレキサンドリアと共にトリポリ、ダマスカス、アンチネキヤ等が主として之れが製造の旺んであつた地方である、而して各種の色に染められた絹織物は金絲、銀絲を以て花鳥其他獅子の如き動物が縫出されて居たのである、現に千七百八十一年にバレルモの寺院にある中世の諸王侯の廟が開放せられた際に皇帝フリードリッヒ二世の屍體には亞剌比亞文字の記してある精巧な衣料が見出されたと云ふことである、又た、獨逸皇帝が戴冠式の際に身に纏ふた禮服は現に墺都「ウヰン」(Wien)に存するものであるが、それはサラセン人の手になつたものである。

東洋方面の織物が西洋諸國に於ける需要は非常なもので、殊に莊麗を誇つた寺院は是等の商品に對する最も主要なる需要者であつたのである、現にハルベルスタット(Halberstadt)の一寺院の所藏にかゝる絹織物はコンダット(Kondad)僧正が聖地に

巡禮をした際に持歸つたといふことである、尙ほ斯くの如き東洋産の織物は單に寺院に於て尊重せられしのみならず、同時に王侯又たは地方に於ける豪族の邸宅に於て吾人の屢々見し處で、加ふるに歐洲に於ける都市の富豪が祭神の場合には競ふて各自の邸宅を飾つたもので、卽ち絹地の旗が風に靡り又サラモン産の毛氈が破風窓にかゝつて當時に於ける都市驕奢の面影を語つたのである。

斯くの如き東洋方面の産物は中世紀末に於て同々敎徒の手から基督敎徒の手に移り、以太利の諸市殊にルカ(Lucca)は之れが新しき産地となつたのである、更に以上述べし絹織物と共に良種の棉花はレヴァント(Levant)方面から齎らされ、其他駱駝の毛によつてなされた織物や、美麗な毛氈は何れも東洋方面に於て常に精巧品を産したもので、又た亞剌比亞人によつて製せられた陶器は當時彼等の技巧の優れた點よりして最も價値あるものと看做され現にアッバス朝(Abbasides)の遺物でコンスタンチノープルの帝室博物館に藏せらるゝものゝ如きは如何に當時の製品が精巧なるやを吾人に示すものである。

更に東洋産の香料は既に十字軍以前にコンスタンチノープルを經て歐洲方面に齎らされたもので、當時同方面に於ける料理法が發達して居なかつたとは自から香料の必要を感じ斯くてマレイ諸島の天産物に對する亞剌比亞商人の仲繼業は著しく膨脹發達するに至つたのである、而して是等の香料中にて殊に歐羅巴人によつて愛せられたのは胡椒で、之れを混じたソースは常に何れの方面に於ても珍重せられたのである、斯くて商人が總ての香料の中で胡椒を齎らせしことや、又た各都市の富豪に對して當時のゴロッキ武士が豐富な胡椒袋との渾名を附した如きは此間の消息を語るものである。

以上述べし香料以外に當時東洋方面よりの最も主要な輸出品は香水と藥種とである、亞剌比亞と之れが隣國は太陽の熱度と地味の狀態よりして芳香を有する花草を産するのであるが之れによつて製せられた香水は王侯其他富豪の家庭に出入せし婦人が瓶などに入れて之れを携帶したものである。

其他東洋方面に産する藥種の中で中世に於て最も需要の多かつたものは蕃紅花(サフラン)である、之はクローカス(Crocus)の花で單に染料として毛織物に使用せられしのみならず同時に藥劑として醫師によつて用ひられしものである、又た前印度から

齎らされたブラジルホルツ(Brazilholtz)の如きも赤色の染料として輸出せられしものである、尙ほ西洋諸國に於て最も熱望せられた商品は寶石類で、之れは亞細亞各地から豐富に供給せられたものである、而して亞剌比亞商人がコンスタンチノープルに齎らしたものには波斯產の藍寶石、オクサス・ヤクサルテス方面(Oxus—Jaxartes)のラピス、ラズリ(Lapis Lazuli)、前印度方面の玉髓、綠玉、サファイヤ、金剛石、錫蘭產のルビー及眞珠等が就中、各方面の愛翫する處となつたのである。

ヴェニスと泉州堺　次ぎに十字軍時代には商業上に於ける東羅馬帝國の勢力衰へて之れが中心は以太利方面に移るに至つたのである、而して民族移轉の如き史的運動の存せしに不拘、上部以太利の諸都市にありては之れが一部の敎養ある市民にして當時に於ける政治的狀態の不安なるを意とせずして活潑なる企業的精神を有せしものが少くなく、彼等は既に九世紀に於てシリア及パレスチナの沿岸に航し、又た十字軍の初期に於ては東洋と西洋とを連絡せしむる通商に從事し其結果以太利の沿岸都市に於ける航海業をして長足の進步を遂げしむるに至つたのである。

而して是等の以太利沿岸都市に於て就中アドリア(Adria)の女王と稱せられたものはヴェニス(Venice)である、同市が如何にして其富の根元を齎らせしやに就きてはゾムバルト(Sombart)敎授は之を主として地代の集積に求めたのであるが、最近の研究によれば同市の富を其初期に構成したものは海鹽と漁業とであることが明白となつたのである、蓋、理想的鹽田なるものは(一)其海岸の遠淺なること(二)其附近に河口を有すること(三)激浪怒濤の患を有せざると共に出來る丈け鹽田の地層面が潮水干滿の平均點に存する事である、而して此三者を具備せしものは實に初期のヴェニスである、何んとなれば其の海岸が激浪怒濤の患なき遠淺たるに止まらずして、アルプスに源を發する諸流は今日と異なつてラグン方面に流入せしものである、斯くて是等諸流の河口附近は到る處鹽田に適し尙ほ中世に於ける此方面の鹽田は私有、國有の兩種に分たれ、之れが所有者は受負者より普通產額の三分一を徵收せしものである、而して當時に於ける海鹽の取引がヴェニス其ものにとりて重要なる意義を有せしことは千百七十九年同國家が此取引に干涉せし點より見るも亦千百八十七年軍費支辨の爲め公債を募集せし際、此商品を擔保に利用せし點を

見ても之れが一般を知るを得るのである。

若我邦に於て以上述べしヴェニスと略ぼ同一の成因を有するものを擧ぐる時は泉州堺であると信ぜらるゝのである、蓋、井鹽、湖鹽、山鹽の乏しき我邦にて海鹽の需用が極めて多かりしことは、我邦の古代に於て之れが一個の重要なる財産と看做されし點より知るを得るのである、卽ち日本書紀仲哀天皇紀に「八年春正月己卯朔壬午幸筑紫、時岡縣主熊鰐聞天皇車駕豫枝取百枝賢木口立九尋船之舶、而上枝掛白銅鏡中枝掛十握劒下枝掛八尺瓊參迎干周芳沙歷之浦、而獻魚鹽地(ナシホノトコロ)、因以奏言自穴門至向津野大濟白東門以名籠屋大濟爲西門限設利島阿閑島爲御菅割柴島爲御甑以逆見海爲鹽地」とあるが如きは實に之れが一端を示せるものである、降て德川時代にても加賀、仙臺、大村、松山、德島の諸藩の如きは何れも鹽專賣に類似の制度を設けしと共に、又、一方には專ら徵稅の目的物として之れが保護奬勵を怠らなかつたのである、殊に黑田藩の如きは元祿十六年大野忠右衞門、貞勝なるものをして今の和白村に鹽田を開き、貧民を雇ひ、一方には藩の利益を增進せしむると共に、又一方には之れを以て失業問題の解決策に供したのである、其他、赤穗の大石良雄の如き夙に製鹽事業の有利なるを認め、大にこれが經營に力を盡したのである、而して斯くの如く國民生活上、重要な意義を有した食料品は實に堺をして他日、經濟上大活動をなさしめた原動力となつたのである、換言すれば堺は實に古代に於ける京畿地方にとつて一個の重要な魚鹽地であつたのである、論者が斯く推定する理由の第一は古代に於ける堺の自然的地位が極めて鹽田の開發に適合せしとである、蓋、瀨戸內海地方が今日に於ても一年の產鹽額四億四千餘萬斤に達し、全國產額の過半を占むるのは其製法の進步發達せると勿論其一部の原因なる可きも又、同時に其の地理的狀態が之れが發達に適せるによるものである、而して堺は斯くの如き自然的地位を占めしと共に大和川流域變遷前に於ける附近の河流との關係及激浪怒濤の害を被むらざる地盤との狀態が此地をして一個の製鹽地と化せしめたのである、現に嘉永改正の堺大繪圖によると大和川の河口右岸に鹽濱新田の名稱を有して居るのである、更に記錄方面に之れが傍證を求むるに、先づ衣笠一閑の堺鑑神廟の部に同地にて最も古き歷史を有する三村大明神の事を記して「鎭守三村大明神は舊日本記にかけまくも忝き天神七代伊弉諾尊の御子として日向國小戸の

鹽瀨にて御誕生在りて、其後葦原瑞森に移住給ふ事無量歳也、御神號を事勝食勝國長尊（ナガサノミコト）と申奉る鹽梅の事を司どり給ふに依て鹽津老翁とも名付け奉る」と云へることは既に古代に於て此地方と海鹽との間に關係の存せることを示すものである、更に第二の傍證となるものは泉州志の左の記事である。

堺ノ津

余按古書鹽穴郷土師郷ノ下條ノ諸村也

北莊（北ノ半町、旅籠町、綾ノ町、錦ノ町、柳ノ町、九間町、神明町、宿屋町、材木町、車ノ町、櫛屋町、戎ノ町、湯屋町）

余按、舊土師ノ郷ノ下條也、今日北莊

南莊（昔鹽穴郷市ノ町、甲斐ノ町、大町、宿院町、中ノ町、寺地町、少林寺町、新在家町、旅籠町、南ノ半町）

和名鈔鹽穴（三保乃阿奈）

俗志保阿奈曰志波奈、保阿反波也、鹽飽之類和語此例多、後倣之

論者は元より土師、鹽穴兩郷を以上の如く嚴密に規定せんとするものでないが、しかし以上の兩郷が相併んで存在したとは、やがて同地方が一個の製鹽地たりしことを推定せしむるものである、蓋古代に於ける我製鹽業は極めて幼稚なもので、

卽ち自然的に撒布せられた細砂面に海水は毛細管引力によつて漸次旺騰し、更に太陽と風力とによつて水分蒸發し鹽分は細砂に殘留、附着せしものを溶解して濃厚鹹水となせ、しか、或は現時本邦内で最も幼稚な製鹽業を有して居る大島地方の如く簡單なる器具で煑沸し萬葉集の所謂片鹽を製造せしか何れにしても或土器を必要としたのである、之れ實に鹽穴郷が土師郷に對立せし所以であると思ふ、勿論、土師氏に就いては日本書紀垂仁紀に「三十二年秋七月甲戌朔己卯皇后日葉酢媛命薨臨葬有曰焉、天皇詔群卿曰從死之道前知不可、今此行之葬奈之爲何、於是野見宿禰進曰夫君王陵墓埋立生人是不良也、豈得傳後葉乎、願今將議便事奏之、則使者喚上出雲國之土部壹伯人、自領土部等、取埴以造作人馬及種種物形獻于天皇、曰自今以後以是土物更易生人、樹陵墓爲後葉之法則、天皇於是大喜之、詔野見宿禰曰、汝之便議治治朕心、其土生始立于日葉酢媛命之墓仍驟是土物謂埴輪亦名立物也、仍下令曰、自今以後陵墓必樹是土物無傷人焉、天皇厚賞野見宿禰之功、賜鍛地、卽任土部職、因改本姓謂土部臣、是土部連等主天皇喪葬之緣也、所謂野見宿禰是土部連之祖也」とあり、又、新姓氏錄和泉國神別の部には「土師宿禰、秋篠朝臣同祖天穗日命十四世孫、野見宿禰之

後也」とありて、明かに堺附近にある應神、仁德兩帝の山陵宮造の爲め移住せしものであるが、然かも同地方に於ける特殊な經濟的狀態が彼等をして漸次職業上の轉化をなさしめたとは必ずしも誤れる斷案でないと思ふ、彼の堺鑑土產の條に「今の壺鹽屋先祖は昔時は藤太郎とて猿丸大夫の末孫と云へり、花洛上鴨島林村の人也しに、天文年間に當津湊村に來、住居してより以來紀州雜賀鹽を求め土壺に入て燒返諸國に商賣して壺鹽屋藤太郎と號し世に廣用故に今に至迄其子孫相續す」とあるが如き、又、或意味に於て播州赤穗燒鹽の先驅たる堺名產花鹽と共に古代に於ける製鹽業の遺風を傳ふると共に、一面、堺に於ける鹽の取引が資本集積上、重要な意義を有せしことを知るを得るのである、而して以上、堺の經濟力を大ならしめた他の原因は此附近に魚族の多かりしことと、是等の魚族を分配するに都合よき背地を有せしことである、卽ち前者に就きては堺鑑土產の條に「住吉明神の社の御前の海邊より寄來魚を前魚と云、又た一說には西宮戎の御前の海邊より寄來ると云共、申傳り時節は三月より六月までの事也と云ふ、歌枕に爲家卿歌に、ゆく春の堺の浦のさくら鯛あかぬかたみにけふや引らんと讀たれば、鯛許に限樣なれ共、總じて當浦の魚を前魚と云ふ」とあるが如きは其一端を示せるものである、斯くの如く一定の時期に限られた魚族を出來る丈け其市價を維持し且つ之れが販路を擴張する爲めには其魚類の保存時期を長くする必要がある、所謂鹽魚の問題は玆に發生するのである、彼の延喜式宮內省式に和泉より例貢となりし鯛及鰺の如きも必ずしも常に鮮魚のみでなくて、寧ろ鹽煮及鹽漬の魚類多かりしことゝ信ずるのである、而して堺方面の魚類が漸時、其販路の擴張につれて大量的に取引せられたとは自から一面納屋の設備を必要とし、又納屋の設備を有するものが自然に富を貯積するに至り、進んで堺の民政を左右するに至つたと信ずるのである、卽ち糸亂記總年寄の條に「されば他所とかはり、此所は昔より町總年寄といふ者もなかりける、たゞ濱側に納屋を建てゝ之をかし、其料を取りて德分としたる人を上方の者となす、則ち納屋がしの衆と號し、三宅主計、今井などいへる頭方の人を十人衆と號す、されば堺の人家名なりといへども、凡て納屋と名のるは此故なり、公の訴訟の類も此十人聞とどけてすましけるとかや、されば織田信長公京都をしづめ其威天下をかゞやかし玉ひし折節、此所の濱にも年貢のきはまれる外に、納屋年貢を取んとのたまひ、彼十人

に下地あれども、前代其例なしとて、かへりて受合申さゞる上に、尾州安土に立越え再三うたへ奉れば其性からき信長公なにかは御免あるべき、皆々獄にとらはれぬ、漸く一兩輩堺へにげ上るといへども悉く首を北の端にかけ玉ふは目もあてられぬ次第なり、此十人がためにとて、十年十體を作りて一宇の堂を建て、後世をとぶらひ申せしとや、其跡今の臨工庵これなり」とあり、要するに堺の史的意義を明かにするには吾人は以上述べし海鹽取引と漁業とを注意するの必要あるを信じて疑はざるものである。

ヴェニスが如何に海洋其ものと密接な關係を有して居たかを象徴的に吾人に示すものは同市の古例である、例者大統領卽ちドーゼ(Doge)の寶石を鏤めた冠が同市に於ける漁夫の頭巾を擬した如き、又た大統領が新任せらるゝ毎に自己の指にはめた指環を海中に投じて海洋と結婚する意志を表示せし如きは何れも之れが著しき例證である。而してヴェニスがアドリア海の奥深くヴェニス灣に臨めると共に更に他の一面に於ては同市よりアルプスおよび諸河の流域に於ける便利な通路はロンバルヂーの沃野を經て北方に出づるを得せしめ、斯くてヴェニスは海外の

産物を歐洲の内地へ齎らすを得て其間大なる利益を占むるに至つたのである、殊にアドリア海の海岸線が屈曲出入に乏しくして他に世界商業上、好都合の海港を有せざることは益々此方面の取引をヴェニス其ものに集中せしむるに至り殆んど一千年を通じて勢力ある地位を維持するに至つたのである、斯くの如きは單に中世に於ける之れが商業上の發展のみに止まらずしてホヂソン(Hodgson)、ルヨ、ハルトマーン(La Hartmann)、ツウキヂニックズ、デンホルスト(Zwiedineck-Südenhorst)、ヘーネン(R. Heynen)、クレッチマール(H. Kretschmayr)、シュアウベ(A. Schaube)等の專門史家が論ぜるが如く、當時の歐洲の政治上に於ても最も大なる活動をなせしものである。

ヴェニスは東羅馬帝國に屬せし結果、金角灣頭の都市に於ては始んど完全な市民權を有し、且つ東羅馬帝國がランゴバルト(Langobard)アラビア人及びノースメン等と衝突を惹起せし際には前者に直接、間接の援助を與へしものである、又、十二世紀に於て東羅馬帝國の海軍が衰微の徵候を現せし際に絶えず同國の海上に於ける勢力上の缺陷を補充したものはヴェニスの海軍であつたのである、尙ほヴェニスの政治上に於ける當局者は單に炯眼と鐵石心とを以て同市の商權を發達せしめし

のみならず、同時に常に新しき特權を要求し、現にヴェニス市民は自國の殖民地としてコンスタンチノープルに於けるペラ(Pera)を專有し、加ふるに東羅馬帝國の領土内にありては何れの港に於てもヴェニス人は何等關稅を課せらるゝことなくして自由に各自の貨物を輸出入し得たのである、次ぎに十字軍の時代は以太利人が商業上の勢力範圍を擴張することに努力した際で、殊にイスラムに反抗する基督教徒の宗教的狂熱を商業的國家の利欲問題に利用したものはヴェニスである。

第四回目の十字軍は從來勢力の中心であつたコンスタンチノープルの地位を根本的に打破せしと共に、更にヴェニスの勢力を增加せしめたもので、當時の佛蘭西人にとつては聖地に渡海するに必要な資金を調達すること能はざるに際してヴェニスの大統領ダンダロ(Dandalo)が是等の佛蘭西人と結んだ協約の吾人に示す處によれば後者は前者より資金の供給を仰ぐ代りに、前者を威赫するが如き態度をとる敵に對しては之れを打破するに必要な兵力を供給することである斯くて當時、十字軍に投ぜし騎士の中にはイスラムに反抗するよりも寧ろヴェニスに對して敵意を有して居た基督教徒の國家に對して戰つたものである。

東羅馬帝國が破滅するにつれて、領土を擴張したものはヴェニスであるが、然し彼れの專ら意を注ぎし處は自國の商業上に於ける覇權を如何にせば確實に持續し得可きやの點であつたので、從つて彼れが殖民地として有して居たのは單に一のクレタ(Kreta)に過ぎなかつたのである、而して此の島の價値は既にゲルランド(Gerland)が千八百九十九年に歷史年報の中に論ぜし如く綿花、米、甘蔗の栽培地としてよりも當時に於ける主要な航路の交叉點たりし結果、自然、船舶の碇泊所又たは避難所として利用せられし點に存するものである、尙ほ他にヴェニスが領有せし處はエピルス(Epirus)ヅラッツオ(Durazzo)で、同市は商業上良好な地位を有せし上に、守るに易き地點に存したものである。而してヴェニスは彼れが獲得した領土を采邑として同市の豪族や市民に委して、自己は出來得る丈け直接、政治其のものに關係することを避けたのである、何れの場合に於てもヴェニス人が其の鞏固な意志の下に實現せんことを求めた主なる目的は今まで、コンスタンチノープル方面に齎らされた各種の貨物をヴェニスに流入せしむることである、彼れは巧妙なる商業政策によりてポー河口やアドリア海畔に於ける貿易を獨占し、ヴェニスの土耳其商館(Fondaco

dei Turchi)に住せし亞剌比亞商人をして歐洲の內地に入る可能性を與へざらしめしと共に一面、歐洲大陸の商人をして自由に海上に於て貿易を營む機會を與へなかつたことにとつて、當時の西洋諸國と東洋諸國との間に交換せられた總べての貨物をヴェニスが獨占せしことによつて、市其のものに非常なる富を集積せしむるに至つたのである、例者、同市の大統領であつたギュスチニアノ、バルチアコ (Giustiano Particiaco) 及びオルン僧正の遺言狀又たグラド(Grado)の富豪であつたフォルチュナタス Fortunatus)が同市の寺院に寄進した家寶の目錄等によれば其處には銀製の大懸燈、金銀製の容器、香爐、供物臺、四十二人の殉敎者を象つた金銀製の彫刻、寶石等を鏤めた金杯、美麗に縫をした絹織物等があつて、中世の初期、ヴェニスの名家に如何に多くの富が藏せられしかを明かに示すものである、要するに後世のヴェニスはヘーネンが其著「ヴェニスに於ける資本主義の成立に就きて」(Zur Entstehung des Kapitalismus in Venedig)の中に述べしが如く手工業的な小賣的な經營狀態を脫して所謂投機的行動によつて自己の富を求めんとせし企業家的典型を有するに至つたものである。

當時經濟的生活の中心が漸次西に移り斯くてこれが中心はボスポルス (Bosporus) の附近にあらずして寧ろアドリア海畔に於て世界的商業の中心を見出すに至つたのである。

屢々ダルマチア沿岸地方の勇敢な水夫によつて組織せられた强大な艦隊によつて、ヴェニスは東方に於ける自己の商業上の勢力を擁護すると共に每年、一定の時期を限つて、是れ等の艦隊を同市の商人の貨物を輸送する用に供せしものである當時、ヴェニスの對外的通商は三つの主要な方面を有せしもので、卽ち之れが第一は埃及方面で卽ち亞剌比亞商人が紅海を經て齎らした貨物をアレキサンドリア又たはカイロにて受取ると共に、木材又たは鑛物の如き北部歐羅巴の產物を、以上擧げし方面に輸出したのである、更にシリアの沿岸にも自國の艦隊を派遣したのであるが之れは一面、聖地に巡禮を送ると共に、東洋方面の產物を積載して歸航したものである、又、極東方面の集散地から輸出せられた貨物はバグダットからユーフラートを溯つて更にアンチオキア(Anchiochis)バイルト(Beirut)及トリポリ(Tripoli)を經しものと、他はダマスカス方面から昔時のフェニキアの都市であつたチルス及シドン方面を經しものとである、次ぎに地中海の北東方面卽ちポンタスの諸都市が亞細亞

方面の産物の集散地であつた結果、此方面にもヴェニスの商船が屢々往復し、ジェノア(Genoa)との間に血を流すが如き衝突を惹起せしに不拘、尙ほ多くの利益を齎らしたのである。

ドン河口の附近にあるタナ(Tana)に於てヴェニチア人は集團を組織して露西亞産の毛皮と印度の貨物との交換に從事せしものである、殊に彼等は此地の奴隷市場を自己の勢力の下に齎らせしものである、而して此商賣は時として百八十パーセントの利益を生じたのである。

西部方面に對してもヴェニス人の勢力は漸次加はりしものにして卽ち北部亞弗利加及び西班牙に於けるサラセン人及び南部佛蘭西人とヴェニス人との間には各種の貨物に對する取引行はれ、更にヴェニス人の商船はヂブラルタルを通過して英國及びニーデルランド方面に赴いたのである、漸次ヴェニスの大艦隊は北部ライン河口に赴き專ら南方の貨物と北方の生産物との交換に從事せしものである、斯くて其昔、微々たりし一漁村は今や有數の經濟的中心と化し、千四百二十三年大統領トーマス、モチェニゴ(Thomas Mocenigo)が死するに先ちて自己の周圍に集つた人々に當時に於けるヴェニス共和國の商業狀態に就きて報告せし處によればヴェニスが世界の各地に輸出した貨物の年額は百萬ヂェカットに達し、毛織物、胡椒、奴隷等に關するロムバルヂー方面との取引が同市に齎らした富は年に二百七十九萬ヂェカット、又たフロレンスから年々輸入せられた各種の織物は多くレヴァント方面に輸出せられたのである、更にヴェニス共和國の海軍力に對してトーマス、モチェニゴの記述せし處によれば三千三百艘の商船に二萬五千人の水夫と四十五艘の戰艦に一萬一千人の乘組員を有して居たのである。

ジェノア　アドリアの女王たるヴェニスと共に中世の以太利に於ける第二の大都市として當時に於ける航海業及び通商上好地位に存したものはジェノア(Genoa)である、同市は之れを內にしては幾多の黨派に分たれ、之れを外にしては屢々ヴェニスと戰端を開きし結果レヴァント方面に於ける經濟上の覇權を握ることは不可能であつたのであるが、しかも航海業に堪能なバルセロナ(Barcelona)人と共にチルス(Tyrus)の海を支配したのである、又、同市に於ける毛織工業、絹織物業と共に造船事業は之れが隣國たる佛蘭西及西班牙に對しても著しき影響を與へたので

ある、尙ほジェノアの勢力はボスポラス、黑海方面、チォス(Chios)に及び、加ふるに同市の名家にしてスミルナ灣の北口にあつたフォケア(Phocäa)の明礬坑を所有し、よりて以て約二百年に亙りて之れが取引を獨占したものもあつたのである。

フロレンス　以太利に於ける第三の商業的中心はフロレンスである、同市は未だ曾つて火災に罹つたことなかりし結果、同國の都市中最も多く參考史料を有する處で、中世期末に於けるアルノー(Arno)の溪谷は科學及藝術の搖籃で、或意味に於て古代のアテネと羅馬とを合一せしが如きものである、而して斯くの如き偉大な文化を構成した主要な要素は主として氣候、地理的地位及民族の特殊性に存するのである、卽ち丘陵地帶と平原と相半ばしたトスカナ(Tuscany)の氣候は北歐地方に見るが如き酷寒を有せざると共に南歐の蒸暑き狀態なく、身體に適し各自をして其事業に熱心ならしめたのである、次ぎに地理上から同市の地位を見るに當時にありては世界交通上の最も樞要な地位をしめて居たのである、卽ち一方には羅馬に通ずると共に、又他の一方に於てはヴェニス及ジェノアに通じ、更にピサ(Pisa)によつて海上を支配したのである、尙ほ第三の點に就きては當時トスカナの住民はエトラスカン希臘、拉丁、チュートンの混血的民族で商工業上に自由に活動せしと共に、又藝術上に於ても大なる貢獻をなすに至つたのである、而して同市の起源に就きては何等確實な證左なく、今日迄の研究によればダンテが地獄の卷に高尙な民族の丘陵的搖籃と稱したフィゾレ(Fiesole)に對して羅馬時代のフロレンスはそが防禦的地帶として利用せられしが如くであるが、其の後此地がアルノーによつて交通上便利な狀態に置かれしことは、茲に一種の市場を構成するに至り、更に四通八達の地位になつたことは、同市場に向つて漸次、都市的形體を與ふるに至つたのである、西曆七百八十六年カール大帝が此市を通過せし際には既に同市の工業殊に皮革及毛織物業に於て見る可きものありし結果、之れが奬勵の爲め幾多の特權を附與するに至つたのである、八世紀より九世紀に亙つて法王の位に上りし人々例者アドリアン(Adrian)一世及レオ(Leo)三世は以太利に於ける各種の工業の發達上には大に力ありし人々で當時の以太利が尙ほ鑄物業に於て見る可きものなかりし結果、希臘人を招くと共に、東洋方面の絹織物の模造品をも併せ製造し、其後グレゴリー(Gregory)四世及セルギユス(Sergius)二世も亦た各種の工藝技術を奬勵せし結

果、寺院の裝飾品の如きは單に羅馬に見しのみでなくて同時にフロレンス方面に於ても之れが發達を見るに至つたのである、殊に同市に於て最も有名なりしは毛織物業者の組合で彼等は英國や佛蘭西産の羊毛を加工して、之れを當時に於ける歐洲の大市場に輸出したのである、更に此都市の商業的意義として最も顯著であつたのは金融事業であつたのである、蓋、中世に於ける一種の宗教的課税たる教會税なるもの〻仕拂方法は各地方の通貨を以てするか、然らずんば英國に見しが如く、主として其地方の特産物を以てしたもので、從つて羅馬の大本山が之れを自己の用度に充つる爲には勢ひ是等の地方的産物を貨幣に換へ、又、地方的通貨も一般に使用せらる〻通貨に取換ふるの必要があつたのである、斯くの如きは當時に於て兩替なる經濟的職務の存在を必要ならしめた理由で、其他、課税せらる可き地方が羅馬を去る遠隔の場合にあつては單に徴税上多くの時日を要したのみならず、又、課税を羅馬に齎らす上に於ても危險多く、從つて送金を容易ならしむる方法卽ち約束手形の如き制度の必要を促すに至つたのである、而して中世に於て一種の金權黨であつた猶太民族が異教徒たる地位にあつたことは充分に此任務を解決

すること能はずして、其結果以太利商人の勃興となり、彼等をして近世歐洲に於ける金融機關の創造者たらしむるに至つたのである、勿論、フロレンスをして斯くの如き地位を有せしめた原因は單に以上述ぶるが如き法王廳に對する財的關係のみでなくて、他に英國との羊毛取引、佛蘭西及フランダー方面との毛織物取引等よりしてフロレンスは是等の商業的取引の大なるに至りし結果、之れが通貨は當時に於ける世界的市場に於て流通するの盛況を呈するに至つたのである、之れを要するにフロレンスの兩替組合に加入したものは當時に於ける歐洲の各市場に存し、同市の銀行家であつたバルヂ(Bardi)及びペルッチ(Peruzzi)とは法王廳は勿論英佛兩國の君主に對して資金を調達し、又、各種經營の根本的基礎、卽ち有價證券、爲替、商事會社等にして其起源をフロレンスに發せるものが少くないと共に、當時の歐洲に於て金權黨の旗頭と稱せられたメヂチ(Medici)家の如きも同市の銀行家であつたのである。

ハンザ

以上述ぶるが如く以太利に於て新たなる商業上の發達が齎らされしに對して地中海方面の市場から全く離れて、北部歐洲に於て一種封鎖

的な經濟區域を見出すに至つたのである、而して之れが中心は主として獨逸の都市でバルト海に臨めるものである。

昔時のバルト海は何等世界交通上に有力な地位を占めしものでなかつたのであるが十二、十三兩世紀に及んで之れが商業上の狀態に著しき變化を與ふるに至つたのである、斯くの如きは實に中世に於ける獨逸國民の最大の名譽であつて卽ちザーレ及エルベの東方にあつたスラブ民族の領土が獨逸化せられ、基督敎化せられた事で、此時代に於て東方の平原が獨逸文化の光に浴すると共に所謂都市なるものがッキゼル以東に於ても獨逸的性質を有せしもの漸次多きを加ふるにつれて、本國方面と是等殖民地との間に取引業務の開始を見るに至つたのである、而して斯くの如くバルト海方面に於けるスラブ民族が壓迫せられて彼等の有せし領土が獨逸民族の手に委せらるゝに至つたことは實に其後に於てハンザ同盟なるものが發達するに至つた根本的基礎をなすものである。

而して其の位置の良好なる點よりしてリュベック(Lübeck)は忽ち此の方面の取引の中心と化するに至つたのである、卽ちバルト海方面に於て守るに易き地位を有すると共に水運の便あるトラヴェ(Trave)に臨めることは市民の企業的精神を覺醒し旺んにバルト海の各方面に活躍するに至つたのである又、內陸方面に對しては、ホールスタイネル(Holsteiner)街道がコルベ河口及び北海に達し、爲めにリュベック市に陸揚げせられたものは陸上よりしてハンブルグ(Hamburg)方面に齎らされ、以て海上通航の危險を避くるを得たのである、殊に此の間に於て重要な意義を有したものは千三百九十年から九十八年に亙つて開鑿せられた運河で、此の運河は、獨逸に於て數多の都市を設置したハインリヒ、デス、レイウェン(Heinrich des Löwen)の創意にあるものである、尙ほ此の運河はトラヴェからラウエンブルグ(Lauenburg)附近に於てエルベに達し、全長二十一粁で、此運河によつてマグデブルグ及ブラウンシュワイヒの如き中部エルベ方面から齎らされた各種の貨物殊に穀物、木材及ルネブルグ(Lüneburg)の食鹽—バルト海方面では之れをトラヴェ鹽と稱したのである—の如きものはリュベックを經てバルト海方面へ輸出せられたのである、而して其の後バルト海の北部及び東部方面に於ける獨逸の取引は益々旺んとなり、忽ちにしてエストランド(Estland)リヴランド(Livland)クルランド(Kurland)方面に於て定期的な海上交通を

見るに至り殊にリガ(Riga)の如きは此の間に於て著しき發達を遂げたものゝ一つである、更に當時に於ける獨逸商人はネヴァ(Newa)河に沿ふてラドガ(Ladoga)湖に達し更にウォルチョフ(Wolchow)を溯つて當時此方面にあつては勢力ある共和國であり且つ同時に通商の旺んなノヴゴロド(Novgorod)に達したのである、又、ペテルスホーフ(Petershof)にあつては獨逸商人は專ら露西亞內地の天產物と西部歐洲の工業品との交換に從事したと共に、同時に黑海方面から露西亞の北部地方に赴く交通路にも接觸して專ら北部獨逸の商人はウォルガチョフの附近に於て東洋方面の產物を接手したのである。

更にハンザの通商上に於て重要な意義を有した第三の方面はゴットランド(Gotland)殊に十二世紀に於て既にバルト海方面の商業上に活躍したウィスビー(Wisby)である、瑞典の學者ボヨルカンデル(Bjorkander)の研究によれば同市は獨逸人がバルト海方面に活動せし以前に既に見る可き發展を遂げて居たのである、現に寺院、修道院及城壁の遺跡は明かに當時此都市の如何に繁榮なりしかを物語るものである。

尙ほポンメルン(Pommern)の海岸一體には極めて迅速にウヰスマル(Wismar)ロストック(Rostock)ストラルズンド(Stralsund)グライスワルト(Greiswald)の如き富有な都市が相次で發達し、是等の都市は何れもバルト海產のヘリングによつて之れが膨脹發達を求めたもので、實に當時のバルト海は全歐洲に對してヘリングの供給を司どつて居たものである。

當時に於ける法律上の必然の結果として國外にて屢々其地の君主や人民の爲めに虐待せられた商人は彼等自身の財產を保護し、且つ相互の援助を求むる必要上よりして互に商業上の結合を齎らせしもので此間から發生した商人の大組合が專ら十四世紀の中期以來獨逸人の同盟(Hanse der Deutschen)なる名稱の下に歐洲の商業上殊に北部歐洲の通商關係に於て顯著な意義を有するに至つたのである。

テォドル・リンドネル(Theodor Lindner)ヂェトリヒ・シェファー(Dietrich Schäfer)デェネル(Daenell)等の諸氏とハンザ史研究の有力な機關雜誌であるハンジセ・ゲシヒツブレター(Hansische Geschichtblätter)に於ける特殊的な研究とは吾人をしてハンザ其者の意義、本質を明かにせしむるに至つたのである。

ハンザの史的本質

ハンザ(Hanse)なる名稱は最近の大戰役前にあつては屢々獨逸に於けるハンザ・ブント(Hansa-Bund)と混同せられたのであるが後者は單に千九百九年に成立した獨逸の商工黨で之れが主なる要求は國家の農業偏重の政策を打破して農工商を對等の地位に置かんとせしものである、之れに反して吾人の玆に述べつゝあるハンザは西暦十三世紀の頃から十七世紀の頃迄北歐の商權を掌握した都市の聯合で之れが起源には凡て二個の主要な要素が存して居るのである、卽ち之れが第一は倫敦及ブリューヂの如き獨逸の國外にある都市に於て各種の企業に從事した獨逸商人の組合である、蓋獨逸商人がネーザーランド及北部佛蘭西を經て倫敦に入つたのは西暦紀元十一世紀の頃で、一方には當時に於ける英國の特產品とも稱す可き羊毛の取引に從事せしと共に、更に他の一面には之れが對岸に於けるフランダー方面の織物を英國內に輸入したのである、而して前者に關する取引の最も盛大であつたのは千二百七十三年以後で、當時、之れが取引に從事した獨逸商人の多くはケルン及ドルトムント(Dortmund)の兩市から來たもので其の有名なりしはズーデルマーン(Sudermann)ノイホーフ(Neuhof)クレッピング(Kleping)フォン・レヴレ(Von Rovele)フォン・エルゲステ(Von Ergeste)フォン・ブロケ(vor Broke)等である、尙ほハンザ商人が羊毛又は毛織物取引以外に金貸の事業に從事するに至つたのは千二百七十五年以後で之れが初期にあつては專ら貴族及市民を顧客としたのであるが、千二百九十九年三萬麻を半ケ年期限辨濟の約束で時の英國の主權者エドワード一世に貸與するに及んで玆に英の主權者との間に直接金錢上の關係を生ずるに至つたのである、次で千三百十七年には再び約三萬麻をエドワード二世に貸與したのであるが、之れが債務の目的とした處は千三百十三年來法王クレメンス(Clemens)五世から借受けし金額を償却するにあつたのである、而して此資金はウェストファリアからケルンに移住したフォン・レヴレのみによつて調達せられたもので更に千三百二十七年好戰的なエドワード三世が位に卽くや、彼れの財政上の融通者は先代の場合と同じく主としてフロレンス市のバルヂー及びペルチと他は一、二の當時に於ける英國の富豪例者ウヰリヤム・ド・ラ・ポール(William de la pole)及ポール・ド・モントフロルム(Paul de Monte florum)で彼等はハル(Hull)に於ける羊毛關稅を抵當として前後、九十六萬麻を王に貸與したのである、卽ち前者の調達した資

金は一萬磅に達し、又、後者殊にウヰリヤム・ド・ラ・ポールの貸與せしものは千三百三十五年迄合して四千磅となつたのである、斯くの如く債務の過多なりし結果、千三百三十二年以後は之れが償却迅速に運ばざりし爲め、一時英國内の關税はバルチ及ウヰリヤム・ド・ラ・ポールの手に歸し、コーンウォール(Cornwall)の錫鑛採鑛權も以太利人の所有する處となつたのである、當時、英王エドワード三世は百年戰爭準備中て殊に彼れの政敵たりし佛蘭西がアヴィニヨン(Avignon)の法王クレメンス六世から七十萬グルデンの補助を得しことは英王をして、一層力を財政上に注がしむるに至つたのである、但此戰爭は當時英國ては非常に人氣に投じた爲に議會と一二富豪の助力とによつて千三百三十七年、十五萬磅の内國公債募集せられ、加ふるに千三百三十六年から千三百四十年迄は十分の一税及十五分の一税に關した特別税及九分の一税等の新税と關税の增率とによつて國庫の收入は非常に增加し、尙ほ千三百三十八年議會は王に羊毛二萬包を寄進し、然かも以上の資力にては不充分なりしを以て王は千三百三十七年及三十八年にはライン地方及ネーザーランドの諸侯から千六百萬麻の短期借入をなし、殊に三十八年の如きは王自からケルンに幸して市民の歡迎を受け羊毛四百包に對して八萬麻を借入れたのである、勿論當時のケルンは既に資力豐富な都市で、之れが市民の中には廣大な地面を所有せしもの多く、彼等は隣國の諸侯に對しても資金の貸與を營みしものてある例者、ヂェトリヒ(Dietrich)但ヨハン・フォン・クレーベ(Johann von Cleve)對ケルン市の貸借關係の如きは之れが著しきものである、而して王は尙ほ自己の資力が不充分なる點よりして、千三百四十三年、十三名の獨逸商人から百十七萬六千麻を借受けたのてあるが、此時期から獨逸商人は以太利の商人に代つて王の御用達となつて、總て關税のことに參與せしが、千三百四十四年十二名の英商人は三箇年賦にて毎年三百萬麻を王に貸與し、以て獨逸商人をして關税に對する關係を斷たしむるに至つたのてある、要するに獨逸商人は約二十年に亙つて英國金融史上最も重要な地位を占めしもので、彼等は千三百五十年以後再び商品取引の舊地位に復するに至つたのてある。

更にハンザ同盟に對する第三の起源的要素は當時の獨逸國内に於ける大小の都市が各自の利益を共同的に保護するため組織せしもので、例者、千二百四十一年に於けるハンブルグ及びリュベック同盟の如きは之れが著しき者である、而してハン

ザ同盟は時代を經過するにつれて此の同盟に加入せし都市の數は約九十に達し其の中には獨逸以外の都市も少くなかつたのである、例者、白耳義のヂナン(Dinant)波蘭のクラカウ(Krakau)等で、尙ほ此の同盟の勢力範圍は西は和蘭のヅイデルゼー(Zuidersee)南は獨逸のアンデルナハ(Andernach)グッチンゲン(Göttingen)ハーレ(Halle)ブレスラウ(Breslau)及波蘭のクラカウ北は瑞典のカルマル(Kalmar)エランド(Äland)ゴットランド(Gotland)等である、レヴァル(Revaal)(露語の Reweli で芬蘭灣の南部)は實に此同盟の北東部に於ける勢力範圍の終點である、今ま十六世紀に至る迄此同盟に屬した都市を地方的に區別すればケルンを中心とせしウェストファリア方面とブラウンシュワイヒ(Braunschweig)を中心としたザクセン方面とリュベックを中心としたウェンデン方面と更にダンチヒを中心として普魯西、リノブラント方面とである。

ハンザの商業政策　次ぎにハンザの商業政策に就きて見るに彼れの偉大なる活動は世人が屢々想像するが如き强大な兵力を有せしものでなくて、寧ろ商業を以て生命とせし彼等は之れを惡魔の如く呪ひし者である、卽ち彼等は自己の死活問題に觸れし際のみ手に劍を取つたのである、而して彼等が戰爭を呪し理由の一は彼等の求めんとせし商業上の發達と各自の幸福を奪ふ危險あること、之れが第二の理由は都市として多數の傭兵を備ふることは徒らに市民の負擔を過大ならしむると云ふに存せしのである、要するにハンザ同盟をして其勢力を盛んならしめしものは軍事上の理由でなくて寧政治上、外交上の技能に於て見る可き點の存せしによるのである、換言すれば怜悧達見の政策によつて之れが商業上の基礎を築きし點に存するのである、然らば此怜悧達見の政策は果して如何なる人々によつて實行せられしと云ふにハンザ同盟の都市にあつて市政の任に當つたものは商人階級である、現にリュベック市の法度に就きて見るも手工業を以て生計を營むものは市の樞機に參與するを得ずと規定せられて居るのは此間の消息を洩せしものである、然かも市政に參與した是等の商人は單に自己の利益のみを打算せしものでなくて常に市民一般の利益に着眼し實際的に行動したのである、又、ハンザの都市にあつては專ら其市政をして世襲的に富豪の手に委ねることを避けたのである、尙ほハンザ商人が如何に各自の利權を獲得するに敏活であつたかは吾人が前に述べた英國對ハンザの關係に就きても之れを知るを得るのである、要するに

ハンザの各都市に於て對外的商業を指導するものが能く其時代に於ける都市其ものの地位を認識し、且つ出來る丈け巧妙な政策によつて之れが勢力を維持すると共に常に新しき手段、方法によつて之れが取引範圍の擴張を務めたのである。

南北歐洲の企業的接近

以上述ぶるが如く、當時の歐洲に於て南北兩方面に企業上の中心が發生せし場合に、此兩中心が接近するに至ることは自然の勢で、其結果は當時の世界的商業上に更に一個の新しき方面を齎らし、此場合に於て最も有利な地位を獲得したものは獨逸であつたのである、何んとなれば以太利の諸市から北部方面に赴くには勢ひ獨逸を通過せざるを得なかつたのである、斯くして從來、何等見る可きものなかつた小都市にして、一時に急激な發達を遂ぐるに至つたものが少くなかつたのである、スチダ(Stieda)教授の吾人に教ゆる處によればハンザは既に遠き過去に於て以太利の都市ヴェニスと直接的に取引を營みしと云ふにあるが、然し一般的には未だ斯くの如き狀態に到達せざりしもので、只だ此間に於て多少、此兩方面の貨物てライン・ロースを經たものは主としてシンパノニュの市場に於て取引せられたのである。

以太利に於ける諸市の中て、北部方面と經濟上の關係を結んだ最も著しいものはヴェニスてある、卽ち同市よりブレナー(Brenner)を越えてインスブルック(Innsbruck)に齎らされた貨物は更にイザル(Isar)及レヒ(Lech)の兩流域を經てアウグスブルグに輸入せられたのである、尙以上の通路以外に當時、南方の貨物が輸送せられた方面はメラン(Meran)よりヴィンチガウ(Vintschgau)を西方にレセン・シャイデック(Reschen Scheideck)を越えてランデック(Landeck)に出てレヒの溪谷に達せしものと、更に他の一つは此ランデックの附近にあるエンガヂン(Engadin)よりスタンツェル(Stanzer)の溪谷を西方に進みてフェルトキルヘ(Feldkirchen)に赴くものとあり、ヴェニスは以上の通路によつてドナウ及ラインの兩流域と連絡を保つに至つたのである、又、ゼノアも上部獨逸方面と經濟上の關係を結ばんゐめに專ら其の通路をマイラ(Maira)の溪谷よりライン方面に求めたのである、其他のアルプス越て當時特に世人の注意に登つたのはスプルゲン(Splügen)シンプロン(Simplon)サン・ベルナルド(St. Bernard)で、彼の中央部にあるサン・ゴタルト(St. Gothard)が南北の交通上に利用せられたのは、之れよりのことてある、要するに南北交通衝路となつたミラノ(Milano)ブリクセン(Brixen)が

ツェン(Bozen)メラン(Meran)トリェント(Trient)ヴェロナ(Verona)等の都市は直接間接之れが爲めに少からざる利益を被むるに至つたのである。

獨逸方面との取引が益々旺盛なるにつれて最も大なる利益を得たものはヴェニスで同市はハンザ同盟の如く搾取的行動は取らなかつたが、然し同市に來つた獨逸商人には其商業上の活動範圍を限定したのである、卽ち大陸方面から同市內に入る者は絕えず探偵の監視の下にあつたもので之によつて獨逸商人が各自自由に取引を營むことを禁止したのである、而して當時の獨逸商人の遺蹟として今尙ほ存するものは獨逸人の會館卽ち Fondaco dei Tedeschi である、此會館は一面は取引業務の爲めに更に他の一面は商人の宿泊所として使用せられしものである、斯くの如くヴェニス在留の獨逸商人に對して幾多の制限の存したに不拘、當時のヴェニスが彼等を惹付けた理由は主として同市が東洋方面の產物の集散地たりしと共に市內に於ける工業に見る可きものがあつたことである、卽ち兵器製造所は精巧な武具を齎らし、織物業は絹織物と綿織物とを生產し、其他玻璃器製造の如き今日に至る迄有名である、加ふに當時のヴェニスは獨逸の大商人の子弟にとりて一種敎養の場所となつて居たものである十四世紀頃より彼等は文法、算數、商事等を此世界的都市に於て學んだものである、斯くてヴェニスは單に經濟上より獨逸に影響を及ぼせしのみにあらずして寧ろ精神的方面殊に藝術的方面に於てそれが影響は著しかつたのである。吾人は次ぎにヴェニスとの交通によつて富を齎らしたアルペン方面の都市とドナウ方面の都市とマイン河畔の都市とを述ぶる前に、玆に中世都市の典型として今尙ほ獨逸に存するローテンブルグ(Rothenburg)に就きて論者自からの實際的考察を記して見たいと思ふ。

ローテンブルグ　獨逸で中世都市の研究上、最も適當した標本は其成立年代の略〻相同じいヒルデスハイム(Hildesheim)とタウバー河畔のローテンブルグ(Rothenburg an Tauber)とである、但前者はハノーブァー(Hannover)の南東部にあつて伯林からマグデブルグ、ブラウンシュワイヒ等を經て倫敦、巴里方面に赴く鐵道幹線の通過驛である結果、本邦人にして此都市を訪ふた人は少くないと思ふが、後者は南方に僻在して居る上に交通も不便であるから、此都市を訪ふた日本人は前者に比すれば極めて少數のことゝ思ふ、卽ちローテンブルグは現時バイエルン領であるが、

其實はウェルテンベルヒの國境に近く、其の附近の都市としては北部に大學所在地のウェルツブルグ(Würzburg)東部に商工業を以て今尚ほ有名であるニュルンベルグがあるのみである、而して伯林方面から鐵路ローテンブルグに入るにはウェルツブルグを經てスタイナッハ(Steinach)で乘換へてゆく支線と他はニュルンベルグからアンスバッハ(Ansbach)で乘換へて同じくスタイナハ線をとるのとがあるが、論者は後者によつて此都市を訪ふたのである。

ローテンブルグの人口の最近の狀態は之れを知ること不可能であるが、約一萬たらずであると思ふ、而して其多數は新教徒で市内には商工業の別に見る可きものなく、今を去る十年前には僅かに乳母車の工場が二ヶ所あつたに過ぎなかつたのである、單調であるが何處となく中世的氣分の漂ふて居ることは彼のアルノー河畔でもヴェニスのゴンドラの中でも味ふことの出來ない史的回想にみちて居たのである、今此都市の成立の起源に遡つて考へると我等は先づタウバー河に近く約六十米の高處にある二箇の舊城址を着目しなくてはならぬ、即ち第一の城址は同市の西端に突出せる丘陵地で、處の口碑によれば紀元四百年頃此地方にフランク(Frank)族が移住した際之が主領の居城で現にファラムント・ツルム(Pharamund Turm)なる名稱が殘つて居るのである、第二は同じく同市の南西端にある丘陵即ち里俗エッシヒクルグ(Essig Krug)と稱する處で、之れは前者に比すれば稍其年代が後れて居るのである、要するにローテンブルグは此二箇の中心的基礎の下に發達した一箇の城下町である、殊に同市成立上重要な意義を有して居たのは前者で、殆んど之れを中心として同市は發達した者と云つてよい位である、さて軍事上の要害が如何にして一箇の人口集團地と化したかと云ふに第一の源因はビュヒヤー教授が論ぜられたやうに比較的强大なる武力が地方農民の保護機關又は避難所を構成した以外に論者の考察する處を以てすれば、此强大な武力は單に領主、其人の個人的勢力のみから成立したものでなくて、寧、領主其人の下に幾多の主從關係を有せしものゝ存在を認定しなくてはならぬのである、現にローテンブルグに就きて見るも舊城址の前方から市場に出る大通には今も尚ほ殿町(Herren Gasse)の名稱が殘つて居るので明かである、而して是等の徒輩が純乎たる消費者の階級であつたこと自から市場其者の發達上重要な要素となつたと共に普通市場に求むる

こと能はざる物品を供給する商人階級の必要を喚起すことになる、かくして成立したものが最初のローテンブルグであると思ふ、而して同市の區域には凡そ前後三回に分れて著しき變遷があると思ふ、卽ち第一の時期は同市成立の當初から千二百四年頃迄、第二の時期は千二百四年頃から千四百年頃迄、第三の時期は千四百年以後である、先づ第一の時期に於ける同市の區域は今日の約三分の一位で當時の城門で今日殘存して居るのは停車場方面から市場に出る大通りにあるレーデトール(現時の內門の方)と其北部にあたつてウュルツブルグ街道に聯絡して居るウュルツブルグ小路にあるワッサートルム(Wasserturm)のみである、次ぎに當時に於ける市の中心は自餘の中世都市に見るが如き市廳と市場とである、殊にローテンブルグの市場は幾多の記憶す可き歷史上の事件の發生した場所で、例者昔時の獨帝は屢々此處で市民の賀を受けられ、又、千四百七十四年に獨逸議會の開かれたのも千七百三十一年にチリー(Tilly)が侵入したのも此地である、而してチリーに關するものは今尙ほ同市の考古館に葡萄酒をもる一個の大盃と年々一回同市で演ぜらるるマイステルトルンク(Meistertrunk)なる芝居がある、此芝居の筋書は當時の史實をかたどつたもので、卽ち三十年戰爭の當時ローテンブルグは新敎側に味方せし結果チリー軍の侵入する處となつて、當時、同市の市政に參與して居た者は悉く死刑に處せらるゝことゝなつた際、當時の市長はチリーの命ずるまゝに葡萄酒をなみなみとついだ大盃を傾けて市民の生命と財產とを救ふたのである、次ぎに市廳は今の位置に建設せられる迄に二回の變遷がある、最初の市廳は市場の南隅卽ち今日の考古館の所在地で之れは千二百四十年に殆んど燒失し盡したので、唯だ此時代の遺物としては十字形の天井が殘つて居るのみである、次て其反對側に建設せられたゴシック式の市廳は千五百二年に再び燒失し、最後に現時見るが如きルネーサンス式の建築を見るに至つたのである。

而して此市の年代記によると現時の建築物は千五百七十二年から七十八年まで前後七年の星霜を費してニュルンベルグの一建築師によつてなされしものである、第二の時期は同市繁榮の時代で從つて同市の區域は舊時の約二倍以上に膨脹したのである、卽ち現存する同市の城門スピッタートール(Spitter Thor)ブルグトール(Burgthor)の二門を除いた外は多く此時期の間に出來たのである、殊に此時期は市

内に各派の寺院が建立せられた際て、例者、殿町のスタウト(Staut)家(同街の第十九番で千五百四十年獨帝フェルヂナンド(Ferdinand)千五百四十六年カール(Karl)五世の行在所となつた處である)の内側にあるフランシスコ派の修道院(千二百八十年建立)を最古のものとして、他には千三百七十三年に時の市長トプラー(Topler)によつて着手せられ千四百七十一年に略ぼ竣功した市内第一の偉觀たるセント・ヤコブ(St. Jakob)の寺院や其附近にドミニカン(Dominican)の修道院等がある、而してローテンブルグの一面が中世式な寺院の都市であることは、試みに夕陽の將さに沈まんとする際、タウバーを狹んで居る對岸のエンゲルスブルグ(Engelsburg)に登つて此都市を眺むると、さながら此地方の人々がゼルサレムと稱した面影が彷彿として我眼前に映ずるのである、更に此都市に於ける第三回目の變遷時期は、同市の南部卽ちエッシヒクルグを中心として發達したスピッタル方面が編入せられたことで、斯くして現時見るが如きローテンブルグ市が成立したのである。

中世に於ける猶太人

我邦の都市或は其附近に特殊部落なるものが存する如く、中世に於ける歐洲の都市には多くの場合、猶太人居住の一區域を見たのである、例者以太利のヴェニス、獨逸のニュルンベルヒの如きは之れが著しきものである、而して彼等の勢力は我邦の特殊部落に比して遙かに大なる意義を有して居たもので、殆んど中世の都市にとつては必要缺く可からざる經濟上の機關であつたのである、論者は左に少しく之れが史的意義に就いて說明して見たいと思ふ、西曆紀元後七十年聖都エルサレムに於ける殿堂の破壞と共に猶太民族の國家が滅亡の淵に臨んだ時代のパレスチナの内外に於ける此民族の經濟的行爲は多く農業及手工業で商業殊に金貸業の如きは極めて小範圍に於て營まれしに過ぎなかつたのであるが、其後同地方が羅馬の領する處となるや穀物稅、人畜稅等の收斂は到る處に行はれ殊に紀元後三百五十二年彼等は反旗を飜せしもならず爲めに課稅は益々酷となり、其結果として彼等が非常に窮境に陷つたことは當時同地に在住したアガヂストの言に「以前は金貸を見しと屢々なりしも今は殆んど之を見ざると共に民は只だ苦しみの爲めに弊疲するのみ」とあるに徵して明かである、斯くの如くパレ

スチナに於ける猶太人が經濟上何等發展の見る可きものなかつたのに對して其隣國バビロニアに在住した猶太民族は土地經營者として著しく好成績を擧ぐるに至つたのである、而して之れが理由としては當時ユーフラチス流域には所有者の確定しなかつた土地多く、是等の土地は開墾せしものが直ちに所有し得しを以てとある、斯くて此の地定住の猶太人中からは前後幾多の富豪を輩出するに至つたのである、次ぎにパレスチナ以西の猶太人の經濟的活動を考察するに先ちて茲に一言を必要とする點は古代に於ける猶太人がフェニキアに代つて東西兩洋の商權を獲得するに至つたとなすキェゼルバッハの假定說である、而して此の說は事實上七世紀の初期に至る迄歐亞交通の媒介者であつたシリア商人と混同せしより生じた僻論であつて當時の猶太人は依然として農業に熱中した民族であつたのである、只だ茲に一個の除外例として認む可き事實はアレキサンドリア在住の猶太人である、卽ち彼等は早くから商業及び金貸業に從事し、又彼等の或者は政府の許可を得て輸出向穀物の監督の任に當り、更に或者は海川交通の事業を經營し、殊に彼等をして其富の大部分を集積せしめたものは金貸業で、卽ち是等の金貸業者に中にはアグリッパ王に二十萬ドラヒメ(古代希臘の銀貨で之れが相場は各地方に於て同じからざるも約五瓦內外の重量を有したのである)を貸與せしものもあり、又皇帝クラウヂュスの母の御側用人たりしものもあり、更にエシオピアの女王カンダケの藏相たりしものもあつたのである、然かも百十六年及十七年の慘殺と四百十五年に於ける迫害とは同地方に於ける彼等の經濟的源泉を悉く乾涸せしむるに至つたのである、轉じて希臘方面に於ける彼等の活動は商業上には何等見る可きものなく、只だ農事、養蜂業、養蠶業に從事せるもの多くシリー王ロジャー二世が希臘より猶太人の織匠を其國に傭聘せしが如きは此間の消息を語るものと云はなくてはならぬ、又、ビザンチン帝國にあつては絹織物、製油、穀物其他生活上の必需品は總て專賣的制度の下にありしを以て猶太人の商業的活動は何等見る可きものなかつたのである、次ぎに以太利に於ける猶太人の社會的地位が良好でなかつたとは羅馬の如き彼等の中から幾多の無產者階級の徒を出し、自餘の徒も多く裁縫師、鍛工の如き手工業者に過ぎなかつたのである、又、東洋方面からの奢侈品の輸入は前に述べたシリアの商人とアレキサンドリア在住の猶太人によつて營まれし

ものである、又西班牙及獨逸地方にあつた猶太人も羅馬帝政時代の末期迄は商業上何等活動の痕跡がなかつたのである、以上の史的事實を概括すれば次の如くである、羅馬帝國滅亡の時期に至る迄、猶太民族によつて集積せられた大なる富は只だバビルニア方面に於ける土地經營と金貸業とに於てのみ之れを見るのである、專ら商業によつて集積せられたアレキサンドリアの猶太人の資金は五世紀の初期に於て全く掠奪的悲運の下に煙の如く散ずるに至つたのである。

民族移動の際に獨逸民族によつてなされた國家が羅馬の領内に成立するや此地方の猶太人は獨逸民族と共に羅馬の市民權を有せしを以て彼等は地主として活動したのである、卽ちキヨルンの一猶太人の如き、又佛蘭西地方の猶太人が自由に其農業を營んだとはナルボンニュ附近の丘陵に今尙ほ猶太人に關した名物が存するによつて之れを知るを得るのである、次ぎに以太利方面では六世紀の頃ロンバルヂー地方に於ける猶太人の地主が多數の基督教徒を使役せしこと及シシリーに於ける寺領が猶太人の手に落ちしことはグレゴリー一世の書信の明かに證明する處である、其他五百三十八年及五百四十一年に於けるオルレアンの結集五百八十一年のマーコンの結集五百八十九年のドレドの結集等も此間の消息を語るものである、然かも其後猶太人の經濟的社會的地位に對して多少の變化を與ふる源因發生するに至つたのである、卽ち此源因は獨逸民族がアリアニスムスから舊教に改宗するに至つたことである、之れより舊教を奉じた羅馬人と新たに舊教化した獨逸民族との間に混血作用行はれ其結果として猶太人は必ずしも羅馬の市民たらず、斯くて一方においては彼等に對して羅馬法の勢力及ばざると共に他の一面に於ては各民族の地方法なるものも彼等を之れが適用の範圍外に置きしを以て彼等は從來の如く自己の財産の安全を保つこと能はずして土地讓渡換言すれば不動産を動産化する現象を生ずるに至つたのである、而して此の如き現象はフランク王國では遲くとも六世紀の後半期に以太利では七世紀に於て發生したのである、但是等の事實は何れの地方にも存せしと云ふにあらず、例者西班牙に於ける猶太人は單にグラナダ、タラゴアの如き都市に居住せしのみならず、又、地方にあつては多くの奴隷を使役して葡萄園及橄欖園等を營みしが六百九十四年西ゴスの主權者は信仰上の統一のため一切猶太人は領内に於て土地家屋を所有す

ること能はざるに至つたのである、然かも西班牙に於ける亞剌比亞人の領内にては却て彼等を歡迎し斯くて彼等は長く此地方にて不動産を推持するに至つたのである、又、十一世紀に於ける獨逸にては彼等が土地を所有せし事實甚だ多いのである、卽ちマインツに於ける猶太教の一宣教師の記錄によれば當時猶太人にして葡萄園及農地を所有せしもの多く、又彼等の同族たる婦人にして結婚の際家屋及土地を齎らし、又ハインリッヒ四世がスパイエルに於ける三人の猶太人に對する特許狀は明かに彼等の土地所有權を認定せるもので十一世紀末には彼等が葡萄園を所有せし實證あり、加ふるに彼等の一人は其所有地の一部を基督教徒に賃借せり、降て十二世紀に於ても彼等がシュレジェンにて土地を所有せしことは千百五十年頃彼等の一人がブレスラウの南西十三粁の地にあるチンツ村を領せしにて之れを知るを得るのである、以上の例證は明かに獨逸の猶太人が十二世紀迄は主として農業によつて生活せしことを意味するものである、而して此世紀以後に於ても彼等が金貸業をなせし結果として自から土地を所有せし場合多く或者は數多の大村を有し或者は諸侯の采邑を領したのである、只だ是等の場合に於ては彼等は尙ほ貴族的地主の如く土地よりの收益を求めしもので、自から手を土地に下せし場合は極めて僅かであつたのである、殊に中世紀末に於て彼等の主なる職業が金貸なりしと公民としての彼等の社會的地位が極めて不確實で屢々迫害を被むつて各自の財産を沒收せらるゝに至つたことは彼等の所有權の下にあつたものを務めて動産化せんとする努力を生ずるに至つたのである、而して是等の動産化せられたものが此以後猶太人の世界的商業に向つて其が物的基礎を構成したのである。

吾人が既に前に述べた如く以太利、佛蘭西、西班牙に於ける猶太人の主業は少くとも紀元六世紀迄は農業で商業は尙ほ充分の發達をなさず、而して當時の商業に於て比較的重要な意義を有したものは人口の減少した都市又たは未墾地多き農場に勞力を供給する奴隷商賣で、以太利は實に當時に於ける之れが中心地であつたのである、而してグレゴリー一世の如きは奴隷制度を是認せしに不拘(彼は自己の目的の爲めにアングロ・サクソンの奴隷を求めたことがある)基督教徒の多くが奴隷として猶太人に使役せらるゝを見て斷然羅馬及びネーブルスに於ける奴隷市場の閉鎖を命ずるに至つたのである、此結果として大なる損害を被むつたもの

は以太利の猶太人て彼等の或者は更に他の販路を求むる爲めゴール地方に赴きしものがあり、又或者は官吏に賄賂を送つて自己の商業の永續せんことを計りしものもあるのである、尙ほネーブルスのバジルスの如きは自己の商賣を遂行せんが爲めに其子をして假りに基督敎徒の洗禮を受けせしめしこともあつたのである、其後法王の態度稍々寛大となりしも各地方に於ける結集は益〻此商賣の背理なることを攻擊したのである、例者トレドの結集(六五六)では敎導職に從事するもので基督敎徒を奴隷として西班牙の猶太人に賣渡すを禁じ、又、オルレアン及マーコンの結集の決議によれば基督敎徒は猶太人より奴隷一人を十二ソリヂ(當時一般商業上の通貨として流通せし金貨)に買ひ、之れを自由に解放する權利を附與するに至つたのである、斯くてマルセイユ・ツールーズの猶太人は七世紀に於て專ら其販路を英國に求むるに至つたのである、而して之れと前後して佛國の猶太人は既に商品取引に從事せし證左あり、卽ち巴里在住のプリスカスは王チルペリヒの御用商人として殊に王の知遇を被むり、又、ツールスのグレゴリーの記せし處によればクラーモンの僧正が屢〻其地方の猶太人から高價の香料を購求せしことがある、

蓋、當時にあつて高貴の僧官は猶太人にとつて最も大切な顧客で彼等は更に進んで、尼寺にも出入したのである、而して當時佛國內の猶太人が商業上及財政上重要な地位を有して居たことは彼等を最も惡んだダゴベルトが其領內から猶太商人を排斥することが出來なかつたのである、而して彼等が斯くの如く重要な地位を占めたことは單に彼等が富を有せしばかりでなくて寧ろ彼等の理財的能力に歸せざるを得ざるのである、次ぎに此時代に於て東洋方面の產物たる絹織物、埃及產麻布等が佛蘭西の南部及中部地方に出現したことは多くシリア商人の媒介によつたのであるが、其間猶太人も亦た間接に之れが媒介者たる地位に存したのである、而して西部歐洲の猶太人が東洋方面と直接の關係を有するに至つたのは七世紀以後で、爾後數百年に亙つて彼等は東洋方面の商品に對する只一つの取引者として殆んど獨占的の勢力を有するに至つたのである、何んとなればシリア商人が西部歐洲に於て勢力を維持したのは六世紀で、又一方亞剌比亞商人は概して十一世紀迄は西方に於て商業的活動の見る可きものなく、スラブ及希臘の商人は共に其取引範圍を東部地方のみに限りしを以てである、尙ほ是等猶太人の東洋貿易が著

しく發達した理由はカロリンガ朝殊にカール大帝の如き能く東洋方面より來る物産を理解し厚き保護を彼等に加へしによるものである、而して彼等は以上の保護に對して時々貢物を呈せし外は關稅國稅其他一切の支出を免ぜられしものである、但、此制度も後世に至つては多少訂正せられて年々或は二年毎に其利益の一部を獻ぜしめし者である、又西部にては基督教徒の商人が純益の十一分の一を提供せしに對して、猶太人は之れが十分の一を納めしものである、尙ほ西部歐洲の猶太人が商人として東洋方面に赴いた事實は紀元九世紀に於ける亞刺比亞の驛遞監イブコルダドベーの記述せし處によつて明白である、卽ち此記述に從へば當時猶太の商人が東洋方面に赴いた通路は大略四つ存したのである、卽ち第一の通路は主として海路によつたもので先づ佛國から海路埃及に出で更に紅海を經て印度洋に達せしもの第二は海陸相半ばせしもので地中海から北部シリアの河流オロンラス(現時のナル、エル、アシ)河口に上陸し更にユーフラチス、バグラット、チグリス波斯灣を終て印度洋に達せしもの、第三は陸路で先づ西部歐羅巴から獨逸及スラブ民族の地方を經てカサレン王國の首都イチルに達し(カサレンはウォルガ河畔の王國で、其首都イチルは約百年を通じてブルガリア、露國、希臘等の諸國の商人が集合する最も重要な市場で殊に紀元七百二十三年ビザンチン帝國に於ける猶太人追逐せらるゝや、彼等の多數は此王國内に移住し專ら亞細亞及希臘方面に對する取引を營しものである)更にカスピ海を渡りて中央亞細亞方面に至るもの、第四は同じく陸路によるもので先づ、佛、西兩國地方から亞弗利加に渡り之れが北岸地方をたどつて蘇西に出で更にシリア、バビロニア等を經て印度或は支那方面に達したのである、而して彼等は何れも其途次の海港に於て到る處に同族の在住せしものありしを以て之れが爲に取引上非常な便利を有したのである、又復航の際には彼等の一部はコンスタンチノープルに赴き、此地にて其が東洋方面から齎らした貨物の一部を賣却したのである、而して當時取引に上りし貨物は奴隷、小兒、絹、毛皮、刀劍(以上歐洲より東洋方面へ齎らせし物)麝香、樟腦、肉桂(以上東洋より歐洲に齎らせし物)等である、蓋猶太人は是等の東洋的產物によつて大なる利益を獲取するに極めて好都合の地位にあつたとは彼等の顧客が購買力の貧弱な農民の徒でなくして、當時に於ては富者の地位にあつて王侯或は高貴の僧侶であつたとである、彼

のマインツの大僧正リシュルフが一猶太人の齎らした珍獸を購求せしが如き其他各寺院の内殿を飾つた絨氈の如き多く彼等によつて齎らされしものである、殊に彼等の利得を大ならしめしものは單に是等の貨物が珍奇高價のものなるが爲でなくて、彼等が是等の貨物を獲得せし際之れが代償として使用した奴隷が比較的低廉なりしことである、要するに猶太人對僧侶の關係を斷たしめんとした法王令や結集の決議の存したに不拘、十世紀迄は其間何等の變化を見なかつたのである、尙ほ猶太人が東洋方面に赴いた事實は以上述べた以外にサンガレンの一僧侶の語りし處によればフランク王國の猶太人は屢、パレスチナ方面から高價の物品を齎らし、曾つてナルボンヌの港に一船舶の出現せし際、同地の人々は猶太人の來りしことを云つて居るのである、又、ルードウヰヒ・デル・フロンメは當時の猶太人に向つて東洋方面に渡航せしむるための朱印狀の如きものを與へたのである、又、ヴェニスの大統領ペトルスがマインツの大僧正に與へた書信中には猶太人がエルサレムから獨逸國内に毛織物、金屬、香料等を齎らせしことを記して居るのである、尙ほ茲に一の假定說がある、それはマキシリアングムプロウヰツによつて主として唱へられたもので、卽ち猶太人を以て北方バルト海方面と亞細亞方面との間に於ける商業の只一の代表者と云ふに存するのである、而して此假定說の基礎となるものは露國及バルト海方面に於て東洋方面の銀貨の夥しく發見せらるゝことである、但吾人が前に述べたイブコルダットベーの記述によれば當時の露西亞人殊にスカンヂナビア人は單に海賊としてでなくして寧ろ平和的な商人としてカスピ海を渡つてバグラット方面に赴いた事實の存するより見れば、以上の假定說は直ちに之れを肯定することは不可能である、之れを要するに八世紀及九世紀に於ける猶太人の資產が增加したことは專ら商業上の利益に基くもので、以上の富を齎らした原因は彼等の人格的要素以外にルードウヰヒ・デル・フロムメの言にあるが如き默許主義、東洋貿易の獨占的行爲と特別な法律上の保護、納稅力、市場取引上宗敎を異にせし結果一般公衆に對して重要視せられしこと等である、然るに其後彼等の東洋方面に對する獨占的地位を奪はんとするもの出現するに至つたのである、卽ち以太利方面に於けるアマルフィ、ヴェニス等の商業的活動で彼のチャスヂーの書信中に「吾人は埃及其他遠土の地方から來れる商人を見る、而して彼等は香料、寶石其他珍奇の物を

王侯に齎らせり」とあるのは主として十世紀に於て西班牙アレキサンドリア及カイロ間に交通したアマルフィ人を云ふものである、而して九百四十五年ヴェニスの大統領カルソ・バッルチ・バオが同市の船主に向つて猶太商人を同船せしむるを嚴禁せしとあり、斯くて猶太人は已むを得ず各自の貨物をヴェニスの船によつて東洋方面に輸送せし爲め其の利益の大部分は伊太利商人の手に落ち殊に九百九十二年ヴェニス人がビザンツ帝國から得た特權は益々當時の猶太人をして不利の地位に陷らしむるに至つたのである、斯くて以太利の猶太人は東洋方面との直接的交通を斷絶せられし結果として、彼等の多くは更に方向を轉じてヴェニスその他南部以太利の商人から購求した東洋品を西部フランクの市場に齎らしたのである、次ぎに十一世紀は歐洲に於ける都市發達の時期で、卽ち之れが發達は歐洲に於ける企業の國際化を呼起すと共に又一方に於ては特殊的制度の下に歐洲商人の組合運動を促し其組織の漸次鞏固なるにつれて彼等は一方には自己の舊主たる諸侯に對抗して獨立的地位を確保すると共に、又一方には從來、自己の前驅者として且つ競爭者の地位に立ちし猶太人の勢力を掣肘し更に彼等を驅逐せんとするに至つたのである、此解放的運動は以太利の諸市にあつては既に十世紀の中期に始まり、南部佛蘭西では十一世紀、但獨逸にては十二世紀の前半期其他東部歐羅巴にては其時期が更に後れて居るのである、而して十一世紀に於ける獨逸の猶太人は商業上最も重要な地位を有し殊にマインツ其他ライン、マアン河畔の諸市に於ける彼等の取引は頗る活潑でケルンの歳市に赴いたマインツ商人の大多數は猶太人で、又、此市の商人と共に有名であつたのはウォルムスの猶太人で彼等は關稅を免除せられたことに依つてフランクフルト・アム・マインハムマースタイン、ドルトムント、ゴスラー等に各自の商店を設け其が日常取引せし商品は葡萄酒、染料、食鹽、肉類等であつたのである、又、彼等の或者は露國地方から毛皮を輸入せしものがあつたのである、而して彼等が當時都市の發達上極めて重要な意義を有したとは新設の都市に移住した彼等に幾多の恩典が施されしを見ても、又政治上の主權者が基督敎の盛大になるにつれて屢、寺院の有力者に都市の猶太人を隷屬せしめしを見ても猶太人が經濟上都市其者に於て有力な地位を有せしことを知るを得るのである、例者オット大帝は九百七十五年にマグデブルグを其市内の猶太人を加へて僧正の寺領

となし其後八年を經てオット二世は更にメルゼブルグ寺領内に彼等を隸屬せしめたのである、千九十年ロジャー一世はサレルノの大僧正に其他の猶太人を屬せしめたのである、斯くの如きは只だ單に彼等より徵集せらるゝ課稅其者を目的とせしものでなくて、寧ろ彼等の能力である、殊に都市其者の成立に向つて猶太人が重要なることを示して居るのは千八十四年のスパイエルの特權と稱せらるゝものである、而して猶太人が重要視せられたのは單に彼等が資力豐富なりしが爲めのみでなくて寧ろ都市の發達上最も必要な企業的能力を有せしによるものなりと信ずるのである、而して此點を最も能く吾人に證明するものは十世紀に於ける西班牙の猶太人で當時に於ける彼等の富は大部分彼等の企業的能力の所產である然かも斯くの如き企業的人格者たる彼等は一方に於て基督敎徒たる商人の團結して政治上社會上の優越權を占むるに反比例して其社會的地位を失ひ、而して社會的地位の失落と共に更に經濟上に於て自己の地位を回復せんとする努力は彼等をして遂に金貸の淵に投ぜしむるに至つたのである、リーベーの言に彼等の社會的地位の失落は、彼等の經濟的意義の增加に反比例せりと云つて居るのである、

中世にあつて資金の需要を促した原因としては、其間、自ら積極的、消極的の二面が存して居るのである、卽ち前者にあつては著しき原因たるもの四つある、卽ち之が第一は都市の增加發達で彼の商業の隆盛、手工業の特殊化、及之に關連して新慾望の發展は自ら一面に於て資金の需要を惹起せしもので殊にニュルンベルグの如き砂質の瘠土上に築かれし都市にあつては此要求は最も切實であつたのである第二は宗敎的方面の要求で當時歐洲諸國に於て建立せられた莊麗な寺院には巨額の造營費を要し爲に町人の手を煩せし場合少くなかつたのである、卽ち之が一例を擧ぐればケルン市寺院の建立費がボロニヤ町人によつて融通せられた如きである、又、各地方に於ける僧侶の中には高位高官に登らんが爲め羅馬の本山に巨額の貢をなす結果、資金の需要を必要とせしもの多いのである、第三は政治上の君主殊に諸侯が戰事用の費用に向て之を要求せしとて特に十字軍時代に於て彼等が要した遠征の費用は更に此要求を大ならしめ、又、彼等が東洋の奢侈的風習に染し結果、自己の外的生活を向上せしめんとせし傾向の爲め資金の需要を多くせしとである、第四は地主階級で彼等は都市の富豪と競爭せし結果巨額の資金を必要

とせし機會屢々發生したのである、更に轉じて消極的方面を見るに其間、著しき原因二つある、第一の原因は長時期に亙つて戰役の結果として所領經濟又は農民經濟が著しく疲弊するに至つたと、換言すれば農民階級に於て資金の缺乏を感ずるに至つたこと、後者は中世に於ける基督教の信條が當時に於ける資金の流通に一種の制限を與へしことである、蓋、論者が既に前に述べた如く基督教對俗界の關係を見るに此教は單に各人の心靈上に干渉するを以て足れりとせずして、又、社會上の問題に對しても一種の見解を存して居たのである、卽ち强者の階級に對して弱者を保護せしことて、彼の中世の寺院法が吾人の營利行爲に對して冷淡な態度をとりしが如き、或は貨幣を以つて何等利益を生せざるものと見做せし如きは之れが一二の例證である、又、當時の實際上に就きて見るも僧侶で金貸業を營んだ者は或は其職を剝ぎ或は其所領を沒收し、又在家の徒で屢々禁を犯した者は破門の刑に處せられ、又、十一及十二兩世紀にあつては生前は姦通罪と同一に見做され死後は祖先の墓地に葬ることを禁ぜしが如き、直接、間接資金の流通上に多大の制限を與へしものである。

以上、述べた如く資金の流通が一方に於ては制限せられし丈け他方に於て之れが要求が熾んであつたことは理の當然で、之れが事實に就てはランプレヒトの言に獨逸に於ける金貸業は十二世紀迄は僧侶によつて十三世紀は町人及び貴族、十四世紀は猶太人によつて營まれしものであると、勿論以上の如き時代の區分は實際の事實と符合せぬ點多く尙ほ獨逸方面に資本を供給せしものには、以上の外、十三十四の兩世紀にはロムバルデンとカウウェルチニーが存在したのである、先づ歷史上の事實に就いて見るに第一に宗敎方面の者で金貸業に從事せしことは必ずしも中世獨特の現象でなくて古代に於けるバビロニアの寺院、我邦にては德川時代に於ける芝增上寺の如きが存して居たのである、中世にあつて修道院には財務を司どる者があつて之れが主要な任務は債務に關することで、殊に修道院にあつて此の方面の利益が大であつたのは十字軍時代である、勿論宗敎方面の人々で斯くの如き行爲を非難せしものも多かつたのである、例者ウォルムス、バーゼル、の兩僧正、コンスタンツ、巴里、ウォルムス等の諸結集の命令又たは決議の如きがそれである、然かも一面から見れば所謂大僧正、僧正と稱せらるゝもので斯くの如き行爲を是認せし

ものも少くなかつたのてある、殊にバムベルグの僧ロベールト(一〇七一)は斯くの如き行爲によつて非常な富を蓄積せしもので、又、略ぼ同時代にあつた同市の僧正ヘルマーンの如きは殊に此方面に活動せしと云ふとである、而して是等宗教方面の金貸業者が債務上の抵當としたものは多く葡萄園、田地、及奴隸等で、若、債務を履行せざる者は各週に一日、二日或は三日を限つて勞役に服せしめたのである、當時一般民衆に彼等が危險視せられたとは彼等が食料品の獨占を企てたとてある、而して之によつて彼等が獲得した利益は百パーセント乃至百五十パーセントに達したのである、尙ほ寺院相互の間にも資金の融通は行はれたのである、第二は貴族或は諸侯が金貸業を營みしもので之が最も盛であつたのは以太利で、又、カロリンガ朝では政府の高官又たは地頭職にあつたもので屢、斯くの如き行爲に出でしものが少くなかつたのである、殊に十三世紀に於て地代の暴落と奢侈の發達とは彼等をして領主的地位を獲得せしむる機會を見出さしめたのである、第三は都市に於ける町人によつてなされしもので、例者寡婦となつた者或は市政に參與するものゝ如き直接商業を營まない資本家は屢々實際的業務に從事する者と一種の商事會社を組織し年々其利益の幾分を受けしものである、例者リュベックのヘルマーンモルネウェヒは十四世紀の初期に於て十八の會社に關係し、其間、大なる利益を占めしものである、其他、斯くの如き事實は、維也納及ブレスラウに於ても吾人の見し處てある、最後にロムバルデン及カウウェルチニーの兩者に就きて見るに獨逸方面では以太利の資本的企業は分ちて之れを二つとなすことを得るのである、卽ち之れが第一は時々獨逸に來つて投資事業に從事した以太利の大資本家階級で第二は同國に於ける中流の資本家階級で之れが多くは獨逸の都市內に定住せしもの而してロムバルデンとカウェルチニーとは共に此後者に屬するのである、更にロムバルデンには羅馬、シェナ、フロレンス、エステ、ピサ、ピストァ等の商人之れに屬し、其任務は主として北部地方と羅馬本山との間に立つて財務上の媒介をなせしものである、又、カウウェルチニーに至つては其名稱の起源不明であるが或は佛蘭西の都市カオールの轉訛せしものとなし、或はピェモントのカオルサより出でしものと見做されて居るのである、要するに北以太利に於けるアスケ及チェリーの商人から主として成立つたもので此兩者の傳統及其業務の異同に至つては一二の說あるも未だ充分なる解

釋を得ないのである、而して彼等は其後、南方獨逸の富豪であるフッガー及ウェルザー等の活動によつて獨逸の金融界から驅逐せられたやうである。

以上述べた處は基督教徒で金貸業を營んだものであるが彼等に對立して此の業務を遂行したものは中世に於ける猶太民族である、殊に基督教の非營利的思想が鼓吹せらるゝに及び彼等の經濟上に於ける地位は極めて重要視せらるゝに至つたのである、而して論者は彼等が金貸業を營むに至つた動機を論ずるに先ちて少しく之が根本的な基礎たる資金を彼等は如何にして獲得せしやに就いて論じて見たいと思ふ、而して此資金の性質に至つては今日迄確定せざるも、其間著しき假定說が三つある、卽ち第一說はシッペルの地代說で卽ち中世の初期に於ける猶太民族は獨逸民族の所在地にあつては主として地主として其地代の蓄積と其所有地を他に讓渡すことによつて之が資金を得たと云ふのである、第二はゾムバルト教授の唱ふる所で、彼等が古代から有した金銀財寶が中世に於て其活動資金の要素となれりと云ふのである、第三說は是等の資金を以て主として商業上の利益から成立せしものとなすのでホフマーンの如きは此見方をとれるものである、論者は第一及第二を以て副因となし、第三を以て之れが主要なる原因と見做すものである、而して此資金を以て金貸業を營んだ彼等の動機には主なるものが三つある、第一は彼等が中世寺院法の適用以外にあつて之れが宗教上に於ける見解が基督教と異なれる點である、卽ち彼等の信條によれば自己の同族より利子を受くることは禁止せらるゝも、然かも異教徒に對する場合は之を默認したのである、第二は彼等の社會上に於ける地位の變遷で一度羅馬法の適用外におかれた彼等は尙ほ中世に於ける蕃客法によつて一縷の命脈を保ちしが、十字軍以後、此法の消滅と共に所謂、猶太人追放の運動を生ずるに至り、十二世紀の中期に在ては其前世紀に彼等の味方たりし町人も却て彼等を迫害するに至り、殊に十三世紀中期以後彼等の顧客が農民及手工業者にして直接、消費的方面に投資せられたとは更に此運動の範圍を擴大するに至たのである、蓋、ロッセルが評した如く中世の後半期に於ける猶太人追放は主として債務者が自己に對する證文をなくせんとする一種、信用上の恐慌である、換言すれば債權者に對する債務者の帳消運動、資本主義に對する貧民階級の軋轢を意味するものである、斯くの如き場合に於て猶太人が其の身の危險を

脱する途は自己の有する全財産を以て王又は諸侯の財産たらしむることである而して當時の諸侯は何れも財政困難の狀態にありしを以て彼等は一面に於て猶太人を保護すると共に又、他の一面に於ては出來る丈彼等の企業的能力を利用して益、金貸業をなさしむるに至つたのである、而して此間の消息を語るものは實に當時に於ける各國の猶太人に對する法律又たは地方制度に於て彼等が一種の財政上の目的物と見做されしことである、換言すれば彼等の保護者は何時と雖、彼等の財産の一部又たは全部を賣却し或は他に讓渡し得しものである、以上の二原因よりも更に彼等にとつて重大な動機となつたものは十一、十二の兩世紀に於て資金需要の最も大なりしことである、蓋、十字軍は明かに之れが必要を促せしものである。

中世に於ける三種の階級である僧侶、貴族、町人に對して猶太人は常に債權者たる地位に立つたもので、先づ僧侶に對して彼等がなした主要な業務は寺財を抵當として資金を融通せしことである、勿論、僧侶が斯くの如き行爲に出づることはカール大帝以來嚴重に禁止せられた處であるが、然かも實際に於ては少しも效果がなかつたので、千二百二十七年のトリエル結集は其の間に多少の制限を附することになつたものである、即ち捕虜解放の爲め資金を調達せざる可からざるが如き緊急の場合、又は大僧正及僧正の如き高位の者の許可ありし際のみ、斯くの如き行爲に出づるを許したのである、今、其二三の例を擧ぐれば千百七年プラーグの僧正ヘルマーンはベーメンのスワトプルク公をハインリッヒ五世の手から受取らんが爲めに一萬麻を要せし結果、袈裟を抵當としてレーゲンスブルグの猶太人から多額の資金を借受けたのである、又、千二百五十年セフトラルン兄弟はオットー公に租稅を納付する必要上よりして寺財の幾部分を抵當としたのである、又、千二百五十三年ミヘルスベルグの修道院は穀物を買求むる必要上よりして僧服を抵當とし、千二百五十五年バウリンツェンの修道院は大負債を有せし結果、同じく僧服を抵當として猶太人から資金の融通を受けたのである、其他ゼリゲンスタットの修道院ヒルサウの修道院フッセンの修道院等も十三世紀頃に猶太人から資金の融通を受けし爲めに一時之が辨償に苦んだのである、斯くの如きは明かに當時の宗教的方面と猶太人との間に貸借關係の存せしことを示すものである、轉じて貴族、諸侯對猶太人

との貸借關係に就きて見るに、之れが例證として指摘され得るものは少くないのである、例者、ルードウヰヒ・デル・バイヤーはイベルリンゲン及アウグスブルグの猶太人から資金を引出す爲めミュンヘンを抵當とし、千三百四十三年ヨハン・フォン・ニコルンベルグは八十名の猶太人に對して債務者となり、千三百四十六年エバーハルト伯の父及ウルリヒ・フォン・ウルテムベルヒはコルマー及びシュニレットスタットの猶太人を債權者となしリェグニッツのボレスラウス三世は千三百二十三年シュワイトニッツの猶太人からニムプチの領地を抵當として八千麻を借受け、ハインリッヒ・フォンヤウエルはローウェンベルグを抵當としてブレスラウの猶太人ヤコブから百六十麻を借受け、千三百四十八年ボルコ三世はシュワイドニッツの猶太人イサークに資金の供給を仰ぎ、而して是等大小の貴族及び諸侯の中には同一の抵當品を數人の債主に流用せしものありしを以て中には其奸策露見して之れが貸出を拒絶せられしものがある、例者ブラウンシュワイヒのヨハンの如きは之れが一例である、更に都市卽ち町人對猶太人の關係を見るに總て都市にあつては猶太人に對する課稅は帝國の場合と同じく都市其者にとりて重要な財源となりしもので斯くて一方には課稅によつて又、一方には彼等の團體或は一個人によりて巨額の資金を借受け以て都市經營の事業に投ぜし場合少くないのである、例者千百九十年シュレジェンに於けるブンツラウの市民は其市の城壁を築造する爲めこれに要する費用を猶太人に仰いだのである、千二百九十年エルザスのシュールハウゼン市が一猶太人サルマーンに二百麻の債務を有せしが如き猶太人サラチェルが前後三回に至つて其資金をロストック市に貸與せしが如き千三百七年ミュンヘン市がアウグスブルグ在住の二名の猶太人に七百五十フントを借受けた如き、又、アウグスブルグが猶太人に對して可なり大なる債務を有せし結果千三百四十一年には市民一般から强迫的に市債を募集して之れが辨償となしたのである、其他エスリンゲン對イベルリンクの猶太人、マインツ對ストラスブルグ、バーゼル、スパイヤー、ウォルムス等の猶太人チュリヒ對シャフハウゼンの猶太人ハゲナウ對ストラスブルグの猶太人等は何れも當時に於ける貸借關係の存せしことを示せるものである。

中世に於ける猶太人の團體は宗教的團集で、只だ當時の宗教は民刑兩方面の法律と內部的關係を有せし結果として自から團體は其所屬者に對して法律上之れ

を主裁する權能を發揮せしものである、而して金貸業の最も盛大であつた際にも各團體の總てが悉く此事業を營みしものではなかつたのである、卽ち彼等の中には彼等の屬せし團體の日常生活にとつて必要な手工業に從事せしものありしと共に又、一方には全く金利の問題から遠ざかつて猶太法の研究に沒頭せしものも少くなかつたのである、故に中世に於ける猶太人の團體は徹頭徹尾金貸業者の經濟的組合ではなかつたのである、只だ此事業が比較的彼等にとつて重要視せられた理由は彼等の經濟上に於ける滅亡が同時に彼等の社會的滅亡なるものを意味せしによりしものである、蓋、團體其者の納稅力を出來る丈け鞏固ならしむるとは彼等が全力を擧げて務めし處で、之れが爲めに多少の犧牲を拂ふも辭せざる處であつたのである、例者、或團體に屬した一二の富豪に對して巨額の納付金が强迫的に命ぜられた場合に、其團體に屬した者は悉く之れを負擔するを常としたのである、何んとなれば其團體內にある大なる納稅能力を有するものゝ財的能力を弱くすることは團體其者の損害を釀すを以てゞある、斯くの如く皇帝、諸侯、都市の誅求に對して絕えず自己の納稅力を涸乾せしめざる爲には出來るだけ他に經濟上の財源を求むるの必要が存したのである、卽ち彼等中世の猶太人にとつて金貸業は基督敎徒に奪はれた資金を再び彼等の懷中に復歸せしむる方法である、而して此方法は當時にあつては極めて發達せしもので大組合と稱せらるゝものは多きは十人少くも三人の投資者から成立し、之れが組合の繼續時期は多く一年內外で、又、時に特定の金融市場に於ける開設時期に限られしこともあつたのである、尙ほ組合の組織に就いては專ら實務の任に當る資本家と只だ資金のみを投ぜし大資本家より成り其利益は折半せられしものである、其他各都市に於ける猶太人間に相互に競爭を禁じた如き、遠隔の地に對する支拂を便にする爲めに專ら手形の方法を用ゐた如き、殊に斯くの如き組合の變體として屢々基督敎徒が其宗法を破つて此組合に加入せしことは獨墺兩國古文書の明かに吾人に示す處である、例者猶太人テカニュスは千二百三、十五年維也納の町人と共同事業を營み千三百四十五年同じく猶太人ダニエル及イサークの兩名はコブレンツのゲルハルトラインの關稅を抵當とした出資事業をなせしが如きである、然し之れは只だ變體で其本質は依然として自己の生存を全ふせしめんとする本能の發現である。

之れを要するに猶太人が金錢に對する狂熱的な態度は一方に於て彼等が此者の魔力を認めしと共に自己の生存を全ふせんとする救世主は只だ此者のみと信ぜしを以てゞある、何んとなれば當時にあつては只だ金錢のみが彼等を壓迫者の手から救ひ出す力を有せしのみである。

要するにローテンブルグは以上述ぶるが如き猶太人を有せしと共に又、同市内には處々に昔時のバトッチャが住んだ宏壯な屋敷がある、現に論者が宿泊したホテルアイゼンフットの如きも其一つである、尚ほ同市の年代記にはバトリチアとしてフルメーター、エバーハルト、アイゼンフット、エックハルト、エルツフェルトガイヤー、グライフ等約四十餘の名稱が見えて居るのである、伯林大學のゾムバルト教授は近世資本主義の成立要素を以て是等バトリチアの地代が流動資本と化した點に歸して居たのであるが、論者は必ずしも同教授の說を全然肯定せんとするものでないが、然し中世都市の社會上、絕えず手工業者の一階級に對立して彼等が大なる勢力を有して居たことは事實である、要するにローテンブルグの起源は軍事上の要害地であつたのが其前面にニュルンベルグの穀倉と稱せられた沃野を控へて居た結果、自から多數農民階級の避難所となり、又、一方には彼等の農產物を直接交換する市場の成立となり、斯くの如き市場の成立と共に消費者階級に屬した武士階級の存在とは更に他方面から商人階級や手工業者の階級を誘ひ、殊に猶太人の一團體が移住し來つて潤澤な資金を同市に放下した結果、市の經濟的活動には見る可きものが多く、現に以太利方面の史料の吾人に示す處に據ればローテンブルグ商人の多數は年々コモ(Como)にいつて獨逸產の羊毛を取引したのである、今同市を都市其者の形體より見れば(一)城下町の時代(千百七十二年頃迄)(二)帝國直轄市の時代(千八百二年頃迄)(三)地方的都市の時代(千八百二年より現今に至る)の三期を經過した獨逸自治發達史の標本であると共に、同市の內外にある建造物はいづれも中世期の貴い參考的史料である。

サルペン方面の都市で殊に有名であつたのはインスブルックで此都市は千二百三十九年以來貨物の留置權を保有せし結果、商取引の見る可きものがあつたのである、又、此時代に著しく膨脹した都市にルチェルン(Luzern)チュリヒ(Zürych)及バーゼル(Basel)がある、是等の都市は一面、アルプス方面に於ける宿驛であつたと共に更に他

一面に於ては山地方面と平原地方との物資の集散地として賑つて居たのである殊に殷盛を極めたのはボーデン湖畔の地で此地方は產物の豐富な沃野と山脈によつて風波の難を有せない湖水とを有する結果夙に水運の便開け又商業上に於ても之れが活動に見る可きものがあつたのである。

上部方面の湖水と下部方面の湖水との連絡點にあつて商業の活潑であつたのはコンスタンツで即ち生絲、絹織物、葡萄酒及諸種の雜貨の取引所であつた同市の建物は今も尙ほ當時盛んなりし狀態を物語つて居るのである、確かに當時の國際的取引上に於てはボーデン湖は極めて好地位を占めたもので、各地方に對する商業上の最も樞要な衝路であつたのである、卽ちレヴント方面の貨物はヴェニス、ラレデックより此の地方を經てライン方面に、次ぎにマイランド及びゼノア方面より獨逸に齎らされしものも此地方を通過したのである、更に西部方面に對するもので最も商取引の盛んであつたのはボーデン湖畔よりシャハウデン及びバーゼルを經て佛蘭西方面に對するものである、而してボーデン湖畔は單に以上述ぶるが如く當時に於ける國際商業の主要な通路たりしのみでなくて、同時に此の湖畔の都市には一種獨特な工業が發達して居たのである。

ボーデン湖畔の都市　既にレックス、サリカの時代に於てボーデン湖畔には亞麻及大麻が產せし結果、此原料を使用した織物工業が一時盛大を極めしと共に千三百年代、毛織物が貴顯紳士の愛用する處となつたので此方面の手工業も亦た綿織物工業と共にコンスタンツ市を中心として營まれたことはモネーが上部ライン史學雜誌に公にした文書の明かに吾人に示す處である、尙ほ此地方の製品は多く伊太利のゼノアに輸出せられしもので、其中麻布は更に此地から南部佛蘭西のローヌ溪谷地方と、バルセロナを經てカタロニア地方に齎らされしものと、更にストラスブルグを經てロートリンゲン及ブルゲ方面に赴きしものと最後にアルプス方面を經てウュルテムベルヒ及フランク地方に輸出せられたのである。

ドナウ方面の都市　當時に於ける獨逸の商業的都市の第二の通商區域はドナウ流域地方で既に十字軍の初期に於て此方面の商業には見る可きもの多く、卽ち此流によつてコンスタンチノーブル及バレスチナ方面に赴きしものもあつたのである、然しコンスタンチノーブルの經濟的地位がヴェニスの占むる處となつて以

來其影響はドナウ方面に及び就中、大打擊を被むつたものはドナウウエルト、インゴルスタット、バサウ、リンツ、オウェン等の諸市である、只だウ井ン市のみは飽く迄、昔時の地位を維持することを務めしが當時此都市が尙ほ交通上樞要の地と看做されたことは匈牙利方面に對して大なる販路を有せしこと殊に都市の生命たる背地の大なりしことである、次ぎにジーベンブルゲンは當時獨逸方面からの移住者を以て充たされたもので是等の移住民はライン方面に於て得たる各自の工業的能力を東部匈牙利の鑛山地方に於て實際化するに至つたのである、尙ほヘルマーンスタット、クロンスタット、シェソブルグ、ビストリッ等の諸市も亦た獨逸方面からの移住民によつて發達せしもので、是等の地方には農業、牧畜、鑛山の見る可きものありし以外に木細工、皮革品等の手工業存し、就中、有名であつたのは金及鐵の細工物であつたのである、尙ほジーベンブルグンの住民は一面河川交通の便によつてウ井ン方面と物資の取引に從事せしと共に更に東洋方面に對しても其間通商の盛んであつたことはクロンスタット及ベストリッ兩市の寺院に今尙ほ精巧な東洋產の敷物の所藏せらるゝにて其一般を察するを得るのである。

ヴェニスの有した偉大な勢力はウ井ンの市民をして自から南部方面との經濟上の關係を結ばしむるに至つたのである、殊に地理上の位置卽ち中部ドナウ地方の伊太利及びレヴント方面の貨物に對する需要は當時益々增加するに至りし結果、是等の貨物は當時にあつて比較的交通の便利なゼンメリングを經て輸送せられたのでコンスタンチノープル衰微後のウ井ンは實に地中海方面と下部ドナウ地方との間に於ける主要なる中心市場であつたのである。

過去に於てドナウ方面に於ける第一の商業地と見做されたレゲンスブルグは交通路の變遷に伴ふ衰微を以太利方面との通商的活動によつて補はんとしたのであるが、然し此都市の非常な努力も新興の都市で同時に當時に於ける交通上の衝路に當りしウルム及アウグスブルグの爲めに漸次凌駕せらるゝに至つたのである。

以太利方面からの輸出で特に見る可き方面は當時にあつて文化の程度の比較的進んで居た北西部方面で卽ち是等貨物の輸送せられし處は主として中部ライン地方及フランデル方面であつたのである、斯くしてレゲンスブルグが直接之れ

が衝路に當つてゐなかつたことは益々此都市を衰微せしめしに對してアウグスブルグは地の利を得しと共に市民はボーデン湖畔の住民の如く工業上の努力に熱心であつたのである、卽ちアウグスブルグに於ける麻布及毛織物の製造は著しく發達し、殊に十四世紀の終末以來は同市は地中海方面から綿花を輸入し、之れによつて綿織物業も亦盛大となり織匠は最も資本の潤澤で然かも勢力ある組合を組織し彼の世界的な企業家と稱せられたフッガーの如きも實に此織匠の階級から輩出せしものである、殊に金屬細工の如きも見る可きものの多かつたのである、斯くてアウグスブルグは當時に於ける以太利獨逸間の通商によつて繁榮すると共に金權的豪族の多くを有するに至つたのである。

アウグスブルグ

マイン方面の都市

次ぎに第三の通商的區域はバイロイト、バムベルグ、ウルッブルグ等の諸市を包有したマイン及之れが支流の流域地方で、是等の地方から輸出せられたものは主として葡萄酒及木材であつたのである、而してマイン方面に於ける通商の中心地は、マイン河畔のフランクフルトである、而して此都市が斯くの如き意義を有したのは水陸兩方面に於て特に便利な地位を占めしによるのである、而して此フランクフルトと共にアルプス方面よりアウグスブルグを經てマイン方面及チュリンゲン方面に貨物を齎らす上に於て繁榮を來たしたものはニュルンベルグである、曾つてヴェニスの當局者の言にヴェニスとの商業によつて

ニュルンベルグ

ニュルンベルグ人は無一物から非常な富を積むに至つたとあるが如く實際上活氣を呈した都市であつたことは十五世紀に於ける有名な一天文學者が商業上當時に於ける歐洲の一中心たりし此地に其の居を移せしを以て知るを得るのである、加ふるに同市をして更に旺んならしめたものは工業である、千二百十九年皇帝フリードリッヒ二世の特許狀中に葡萄の栽培が不可能であると共に水運の便なく只だ瘠土の上に存するとあるが如きの狀態は同市在住の市民をして工業的方面に大なる努力をなさしむるに至つたのである、卽ち同市に於ては單に玩具の製造が盛大であつたばかりでなく同時に工藝品に見る可きもの多く卽ち金細工、武器及鐵器の製造、木細工、角及象牙細工及皮革細工等は驚く可く精巧なものであつたことは今日同市の日耳曼博物館の藏品に徵して明かである、更にニュルンベルグ及マイン方面よりの貨物は當時チュリンゲン方面の中心市場であつたエルフ

ルトに齎らされたのである、而してチイレが公にしたコンラット、ヌトルレの報告によれば同市が有名となつたのは其附近に生産せられた染料取引によるのであつたのである、以上列擧せし如き獨逸に於ける商業的都市の西部及東部方面に於ける三個の中心的區域に對して更に當時の世界的通商上考察に價する第四の區域が存して居たのである。

エルフルト

ライン方面の都市

ライン流域方面に於ける商業は年々其の範圍擴大せられ、殊に商業上の中心がコンスタンチノープルよりゼノア及ヴェニスに移るに及んで更に層一層の活氣を呈するに至つたのである、卽ち北以太利方面からアルプスを越えてバセールに集中せし貨物がライン河によつて之れが流域地方に齎らされしのみならず、更に當時に於ける世界的商業上の最も重要な通路はゼノア、アヴィニョン、ゼネバよりジュラを越えてバーゼルに齎らされ、次でライン河方面に及んだのである、而して此の西部方面に於ける主なる交通路はライン方面で、之れが主なる取引は、地中海方面と獨逸との間に於ける香料及絹織物に關したものである、尙ほライン方面に於ける商業上の活動は更に船運に便なる支流たるネッカー及マインに及び是等の方面の產物の加はることによつて更に活氣を呈するに至つたのである、殊にエルサス方面の如きは農業上及工業上の非常な進歩によつて著しく好景氣を呈し同地方の都市は其人口に於て何れも急激な增加をなすに至つたのである、シュモラーは彼の著たるストラスブルグの織物組合に關した研究に於てワスガウの織物業が幾多の技術的改善を見し結果、著しく產額を增加せし爲め住民の商業は爲めに非常なる影響を受けたのである、實にエルサス方面の富は木材、葡萄酒及穀物に存したのであるが、然し上部ラインの溪谷の中心地として其勢力を有して居たストラスブルグは各種の織物工業によつて殊に顯著な意義を有するに至つたのである、更に昔時よりの寺院的都市であるウォルムスとスパイエルとマインツとは何れも中世に於ける貨物留置權を保有せし結果、ライン方面の通商上最も有利な條件の下に存して居たが此留置權なるものは凡そ商人が貨物を遠方に輸送する場合に於て之れが通過する都市に於て少くとも三日間其の貨物を市民一般の展覽に供したのである、更に下部ライン方面に於て所謂聖地ケルン市はリュベックと共に當時の獨逸にあつては最も大なる最も勢力ある都市で殊に極めて

廣き範圍内に適用せられた留置權とによつて下部ライン地方に於ける商業上の覇權を握りし以外に夙にニーデルランド及び英國方面とも取引し、更に他の方面に於てはドナウ河によつてウヰン方面に、又、ライン川を溯つてアルプスを經て以太利方面にも其活動を及ぼしたのである、斯くの如くケルンの商業的努力は又此都市の工業的努力を促し、卽ち同市の毛織物商の組合等には豐富な資力を有した商人の加入せしもの少からざりしと共に尙ほ同市の大商人にして、十四世紀に發達したジゲルラント及マルク方面の鐵工業に投資せしもの多く、斯くて同市はライン、ウェストファリア市方面に於ける工業品の集散地と化し殊に當時内外に名聲を博したのは武器の製造で之れは主としてソリンゲンの技術家によつてなされたのである、加ふるにケルンは絹織物に於て當時の獨逸都市中之れに及ぶものなく又中世式な金細工に於ても精巧品を出したのである。

ハンザの都市　ハンザ同盟の都市殊にリュベックがケルンの勢力を多少奪つたにも不拘尙ほライン方面に於ける第一流の都市として同時に此方面に於ける商業の中心として其名聲を維持したのである。

當時歐洲方面に於ける最も主要な商業上の中心がコンスタンチノープルから以太利方面に移つたことは獨逸に對しては顯著な意義を有したもので、單に富と幸福とが獨逸の都市に流入したばかりでなく之れが工業上に新刺激を與へ、それによつて文化的發達を齎らしたことはドナウ及ライン方面やペグニッ及レヒの河畔に見る莊麗な建築物の吾人に示す處である。

獨逸と以太利との間に於ける多方面な内的な觸接の存したに不拘、然かも南北歐洲に於ける商品の取引は更に他の方面に於て營まれたのである。

交通機關の不備な當時に於て貨物輸送に伴ふ幾多の困難は當時に於ける商人をして自から一定の時期に一定の場所に於て取引に從事せしめたのである、而して當時の歐洲商人にとつて南北兩方面の經濟的接觸點は佛蘭西のシャンパーニュの

シャンパーニュ　市場であつて此地は當時に於ける世界的商業の集中點を構成したのである、既に地理上の位置より見るもシャンパーニュは斯くの如き取引に最も適したのである、何んとなれば以太利より英國に赴くには必ず此地方を通過すると共に政治的にも此地は最も適當な場所であつたのである、何んとなれば此

地方の統治者である領主は佛蘭西と獨逸とに對して殆んど中立的な態度を持した結果、當時に於ける國際的な葛藤に捲き込まるゝ憂なく加ふるに領主が外國商人に對して之れが保護に任じたことは更にシャンバーニュの市場をして繁榮に赴かしめたのである、而して此市場は四ヶ所に分れて居たのである、卽ちセイヌ上流に於けるトロアとアウブ河畔のバールとが東部の市場で之れに對して西部の市場はセイヌの南のプロバンスとマルヌ附近にあるラグニーである、此四ヶ所に於て交代的に殆んど一年間市場取引が營まるゝのであつたのである、斯くてシャンバーニュは最も主要な市場生活によつて當時の世界的商業を規定する大なる國際的の場所であつたのである、北部佛蘭西、英國、ニーデルランド、中部及南部獨逸、南部佛蘭西及ロムバルヂー方面の商人は何れも此地に集まつて彼等の所持した商品の取引に從事したのである、殊に此の地に於て多く見し商品は羊毛、麻布、絹織物の類から東洋方面の香料、其他以太利方面の果實及葡萄酒、柔皮、皮革の如きものであつたのである、以上述べし商品取引は自からシャンバーニュをして金融の中心地たらしめ又十四世紀には一種の大なる取引所たらしむるに至り總て當時の歐洲に於ける金融上のことは多く此地に於て決濟せられたのである。

而してシャンバーニュの此國際的市場は早くも十四世紀の中期に於て衰微するに至り、其後再び回復するの時機を見出さなかつたのである。

曾つて中立的地位にあつた此領土は國家的に發達した佛蘭西王國の邊境と化し、それと共に屢々內亂の渦中に投ぜられし結果、長時期に亙つて交通不可能となり、又、佛蘭西の統治者が財力上の壓抑を加へたことはロムバルデン其他の金融業者をして此地を避けしむるに至り、茲に市場其者の破壞をきたすに至つたのである、殊に此市場に向つて一大打擊を與へたものはフランダーの都市である、殊に十四世紀の初期に於てゼノア及ヴェニスの海運業者はヂブラルターを越えて歐洲の西海岸に沿ふて遂にブルゲの港に到着し茲に初めて以太利とフランダーとの間に定期的な航海を見るに至つたのであるが、それと共にシャンバーニュの市場は全く荒廢すると共にブルゲなる星はいやが上にも輝くに至つたのである、ツウヰン河畔の此都市は旣に北部方面との商業に於て顯著な地位を有し國際的な流通狀態に於て略ぼヴェニスに匹敵しレヴント方面や獨逸又た南方の

工藝品に對して北方の原料が交換上に齎らされたのである、各國の船舶が此港を訪れた十四世紀の初期は同市が最も繁榮を極めた際である、當時ヨハナ、フォン、ナブラが其夫君たる佛國のフリップとブルゲを訪ふた際に彼女は此市の富豪の華麗な服裝を見て次の如きことを云つたとのことである、卽ち我のみが女王であると思つたのに此市には私に等しい數百の女王を見ると。

中世の商業的區域　吾人は中世に於て三つの大なる商業的方面を區別し得るのである、卽ち印度洋及亞剌比亞海方面と地中海方面と北海及バルト方面である、斯くの如き印度洋及北方方面の全體に亙つた商業には其處に三つの主なる中心點がある、第一はシリア及小亞細亞方面の諸港と共にアレキサンドリラが茲に第一の要素をなし、第二は以太利方面に於ける都市的共和國で第三はブルゲ及リュベックを有する北方の都市である、而して以上三個の中世に於ける商業的中心が宛然鎖の如く互に相結合せることは水陸兩方面に於て茲に絶えざる流通的經濟を見るに至つたのである。

中世に於ける取引狀態　中世商業の取引範圍に關しては最近公にせられた幾多の論文を通じて吾人は略ぼ當時の狀態を察するを得るのである、例者アロイス、シュルテの西部獨逸と以太利との間に於ける中世商業及交通の歷史であるとか、ゾムバルトの近世資本主義論の如きは之れが有力な材料である、而して是等の資料によつて吾人の認め得る點は中世に於ける商業狀態は單に中世史の立脚地に立ちて考察す可きもので決して十九世紀や二十世紀の商業と比較す可からざることである、何んとなれば石炭が輸送上の動力として海陸兩方面に使用せらるゝことになつてから此方面に一大革命を齎らせし結果、中世と近世との間には之れが商業上に於て比較すること全く不可能となつたのである、シュルテはサンゴタルトを經て輸送せられた中世の貨物の總額は一年間のものを以てするも今日の二列車位のものであつたと云つて居るのである、又、今日、ライン河の水運に供せらるゝ船舶は約千二百噸を積載する能力を有するのであるが、ハンザが其の隆盛時代に使用したものは四五百噸を出でなかつたもので北海方面に見る漁船の稍々大なるものに過ぎなかつたものである、吾人は今或種の商品の輸出狀態に就いて見るに中世の英國の主なる輸出品である羊毛は千二百七十八年には平均三千噸に過ぎな

かつたのであるが千八百九十九年に於て獨逸に輸入せし量のみにて羊毛が二十一萬六百七十七噸に達して居るのである。

個々の商人の集積した資本はシュルテ及びゾンバルトが幾多の材料によつて吾人に示した如く必ずしも然かく大なる額に達しなかつたのである、例者千三百九十一年武士階級の掠奪を被むつたバーセル商人の損害額は九千五百四十四フロリンに達したのであるが之れが六十一人の商人の分を合せしものとすれば一人分は平均百五十フロリンに過ぎないのである、更に著しい例證は彼の富有な都市と稱せられたアウグスブルグの町人の十五世紀末に於ける資産狀態に就きて見るに三萬フロリンの財産を有したものは全市僅かに四人で六千フロリンの所有者が單に七十人に過ぎなかつたといふことである、更にゲォルグ、フォン、ベローは其論文「中世の獨逸に於ける大商人と小賣商」に於て十三世紀より十五世紀に至る間の商人は小資本家のみで所謂大商人と稱せられしものは極めて少數であると云つて居るのである。

更に當時の取引に上つた商品に就いて見るに十三世紀に於て百キログラムの胡椒のマルセーユに於ける相場は四百八十一麻で、之れがロムバルヂーに於ける價格は五百十二麻、シャンバーニュでは六百二十麻、英國では六百八十三麻より七百九十六麻となつて居るのである、毛織物二十反のカヂスに於ける相場は二百五十六フロリンであるが、それがフロレンスでは三百九十五フロリンとなつて居る、又、十四世紀に於てフランダー及フロレンス方面の商業に於て最も主要な商品であつた上等の帽子一ダースの仕入値段は半フロリンで之れが賣値段は十五フロリンで平均後者は前者の價格に二十五パーセントを加へしことゝなるのである、此點から見れば中世に於ける商取引は非常な利益を齎らした如くであるが、然し是等の貨物を輸送する際に其處には海陸共に盜難に罹ることの多きことも考へなくてはならぬのである、又、貨物の價格が之れが通過する稅關の課稅の爲めに高めらるゝことも存したのである、現にマインツからケルン迄は水路僅かに四十二時間の行程であるが其間に十三箇所の稅關を通過しなくてはならぬのである、斯くて當時商人の愁訴ありしに不拘、獨逸皇帝は此水路を自由に解放することは不可能である、何んとなれば單に選擧侯のみならず、寧ろ個々の領主にしてライン流域を支

配するものは之れが關稅を以て自己の最も收入多き資源としたのである、而して水運上に於ける課稅の負擔が甚しき結果、彼等商人は更に轉じて陸路を求めたのであるが之れ亦た交通不便なる爲めに著しく其費用を要したのである、故に是等の費用を除く外は其利益は必しも世人の想像するが如き大なるものではなかつたのである、今、當時に於ける大企業家の利益の程度を見るために當時有名であつた三人の伊太利の企業家に就いて調査するにペルチの利益は千三百八年から千三百二十四年の間に於て年平均額十六パーセント、バルヂは千三百十年から千三百三十年の間に於て平均二十パーセント、ストロチは千三百十八年から千三百三十九年の間に於て平均十三パーセントであつたのである。

中世商業概論　之れを要するに中世の時代は種々なる方面に於て近世的企業の前驅的狀態を構成せるもので、此時代に於て吾人の見る著しき史的現象は羅馬の敎界が形式上、個人の營利的衝動を壓抑せんとせしに不拘、羅馬其者に於ける近世的な法王の存在に彼等をして殿堂的宗敎の價値を發揮せしめんとせし結果、資金の必要を感じ、之れが供給を歐洲各國の信徒に仰ぐに至り、然かも當時に於ける盜賊の橫行と交通機關の不備とは以太利の都市を中心とする錢莊の發達を促すに至り、玆に近世資本主義の萠芽を發するに至つたのである、卽ち宗敎の經濟化之れ中世商業史上の最も顯著な事實である。（以上中世終）

後編　近世

第一章　總論

以上、吾人は中世の經濟生活に就きて其一般を敍述したのであるが、更に轉じて近世に就きて見るに葡萄牙及西班牙によつて新大陸が相次で發見せられたことや、勢力ある大國家の出現せしことは從來の經濟的狀態に一大變化を及ぼし、從つて商業上の潮流の如きも以前と異なり北部歐洲方面にては英國と和蘭とはハンザの勢力を奪ひ更にヴェニスとゼノアとは共に東西貨物の集散地たる地位を失ひ、之れに代つて大西洋方面にてはリスボンが香料に關した當時の世界的市場と化し、アントワープはブリュージを凌駕して歐洲に於ける商業の中心となるに至つたのである、斯くの如きは道德上、政治上、經濟上の諸源因によるもので、卽ち文藝復興期に於ける人智の進步個人主義の發達、投機心を刺戟した大戰爭、金融狀態の混亂、新大陸に於ける貴金屬の採掘等である、而して中世式の學問すたれて人道主義が勃興した如く都市經濟は之れが舊觀を改め、國家は都市を自已の下に隷屬せしめ

しと共に之れが獨立權を奪ひ、其結果、町人の保護主義、排外主義は之れが終りを告げ所謂手工者の組合は存するも彼等は勞働者の團體を支配する能力なく、工業上の新中心は昔時の特權ある都市と併立して發生するに至つたのである、例者、英國にてはシェフイルド、バーミングハム)而して當時に於ける企業的精神は尙ほ當時の學問界に於ける自由討究の精神と同じく總ての傳統主義を排し、所謂投機的精神を無限に擴大したのである、以上經濟上の大變化は中世の資本家によつて營まれた活動を更に新人物の階級に移すに至つたのである、此事は十五、十六兩世紀に於ける企業家中には十四世紀に於ける企業家の子孫少きを以て知るを得るのである、而して新時代を飾る新人物中には獨逸のフェガーの如きが存したのである、尙ほ十五世紀末に於ける經濟的活動が其頂點に達したのは十六世紀の後半期で其後重商主義の爲めに以上の運動は多少阻害せられた傾向を有したが、然し監督官、領事の任命、商業會議所の設置等によつて國民經濟は著しく改造せられ、殊に十八世紀末から十九世紀の初期にかけて英國及其他の諸國に見し諸器械の發明や蒸氣力の工業上に適用せられたことは更に經濟上に一大變化を來し、彼の十六世紀に

見し如き經濟的現象は十數倍の力を以て出現せし結果として從來企業界に活動した人物は自から活動の舞臺を遠ざかり之れに代つて企業的精神に富む新人物が出現するに至つたのである。

第二章　發見時代

歐洲商業の廻轉期

歐洲に於ける商業が膨脹し發展せし上に於て十五世紀末は一個の新らしき廻轉的時期である、當時人心が單なる宗教的生活のみに沒頭せずして新たなる天地に自己の開放を求めんとしたことは茲に世界周航の夢を實現するに至つたのである、而して印度に赴く海路や新大陸の發見は歐洲の經濟生活に根本的の變化を與へ、殊に此時代の特徴とする處は歐洲人が地中海又たはバルト海の如き一局面に於ける通商を以て滿足せずして所謂世界的商業の活舞臺に出づるに至つたことである。

葡萄牙人海外發展の理由

斯くの如き活動の當時に於ける先驅者は從來此方面に於て何等世の注意を惹かなかつた葡萄牙人である、而して當時僅かに百萬の人口を有した同國をして遠く海外に發展せしめた理由の第一は同國が西班牙と其境を接せし結果、此方面に對する膨脹發展が不可能であつた上に、更に此方面の通商的關係を困難ならしめた要素はピレニー半島を流るゝ諸川の上流が何れも夏期に於て水量が涸渇すると共に河中に幾多の岩塊が存して居ることである、斯くて葡萄牙人は以上述ぶるが如き地理的障害の爲めに僅かに是等諸川の下流地方と沿岸地方との間に於ける水運に從事するの止むなきに至つたのである、更に第二の理由は宗教上の狂熱に加ふるに企業的精神に富んだ同國の國民性である而して斯くの如き運命の下にあつた葡萄牙人に對して大葡萄牙を齎らす道を教へたものは同國王アルフンス五世の王子ドン、エンリクである、彼は祖國の將來は海上にありとの故を以て熾んに航海業を奬勵し、遂に同國をして約百年に亙つて世界的商業上、最も有力な地位に置かしむるに至つたのである。

葡萄牙の對外的活動

葡萄牙の南進政策は漸次亞弗利加の西海岸に及び、次で千四百八十六年バルトロメウス、デアッが颶風に遭つて亞弗利加の南端に達した際に彼は海路印度に赴くことの必ずしも困難にあらざることを見出したのである

が、爾來千四百九十八年ヴスコダガマに至つて彼は遂に亞弗利加大陸を周航して當時印度の西海岸にあつては重要な通商地であつたカリカット(古里)に達したのである、斯くして歐亞兩大陸間の海上交通は直接開始せられたのであるが然し當時に於ける亞剌比亞人は紅海、彼斯灣方面は勿論、東はマラッカに至るまで、其の勢力を振ひしものなりしを以て葡萄牙人にして此方面に其勢力を扶殖する爲めには先づ亞剌比亞人を此方面から驅逐することが必要である、斯くて此事業に對して大なる成功を留めたものはアルフォンス・アルブケルケであつたのである、爾後葡萄牙はマラバル沿岸にあるゴア(臥亞)を以て同國太守の駐在地となし、更にモルッカ(美洛居)及マラッカ(滿剌加)を占領し、其の勢力は漸次支那及我邦に及ぶに至つたのである、薩摩の僧玄昌が種子島の島主種子島久時に代つて作つた

我國に於ける葡萄人の來航

と稱せらるゝ鐵砲記の中に「隅州之南有一島、去州一十八里、名曰種子、我牧祖世々居焉、天文癸卯秋八月二十五丁酉、我西村小浦有一大船、不知自何國來、船客百餘人、其形不類、其語不通、見者以爲奇怪矣、其內有大明儒生一人名五峯者、今不詳其性字、時西村主宰有織部丞者、頗解文字、偶遇五峯以杖書於河上云、船中之客不知何國人也、何其形之異哉、五峯卽書云、此是西南蠻種之賈胡也」と又曰く賈胡之長二人、一曰牟良叔舍、一曰喜利志多陀孟太、手携一物長二三尺、其爲體也、中通外直、而以重爲以、其中雖常通、其底要密塞、其傍有一穴、通火之路也、形象無物之可比倫也、其爲用也、入妙藥於其中、添以小團鉛、先置一小白於岸畔、親手一物、修其身、眇其目、而自其一穴放火、則莫不立中、其發也如掣電之光、其鳴也如驚雷之轟、聞者莫不掩其耳、時堯見之、以有稀世之珍矣、始不知其名、亦不詳其自何用、既而人或名爲鐵砲者、不知明人之假名乎、抑不知我一島之假名乎、一日時堯重譯、謂二人蠻種曰、我非日能之、願學焉、蠻種亦重譯答曰、君若欲學之、我亦罄其蘊奧以告焉、時堯不言其價高而難及、而求蠻種之二鐵砲、以爲家珍矣、其妙藥之擣爲和合之法、令小臣篠川小四郎學之」とあるのである、而して以上の五峰は支那近海

支那に於ける海賊

に於て海賊を營んで居た王直のことで爲時、支那の海賊中、所謂我邦の倭寇と結托せしものゝ多かつたことは籌海圖編、洋防輯要等の明かに吾人に示す處で、今、相田學士の「倭寇と江蘇省」によれば少くとも次ぎの如きものがある。

(イ)王直――彼は別表の戰に敗れてから日本に亡命し松浦に居を構へ(平戸大曲記

に平戸津に大唐より五峰(王直)と申人罷着て今の印山寺屋敷に唐様に屋形を立てゝ居位申しければ夫れをとりへにして大唐の商船絶えず、剩へ南蠻の珍物は年々滿々と參り候間京堺の商人諸國皆集り候間西の都とぞ人は申しける)嘉定二十六、七年の頃から中國九州地方の倭寇を誘致して盛んに定海、海州鹽城、乍浦、杭州、南滙、嘉定及吳松等を侵掠し後嘉定三十七年定海に來つて互市開港を要求したが、總督胡宗憲のために欺かれて擒はれ同三十八年十二月誅に伏したのである。

(ロ)林碧川――彼は鄧文俊、沈南山等の海賊と共に嘉定三十一年頃から倭寇と結托して江淞一帶の地を掠奪したのであるが、彼は江蘇の沿海地方のみならず、嘉定、太倉、常熟、崑山及蘇州等の内地に深く侵入したのである。

(ハ)徐海――支那海賊の覇者と稱せられたもので、我が和泉、薩摩、肥前、肥後、攝津、對馬等の倭寇軍を率ゐ、嘉定三十四年正月拓林に屯して南方金山衞、乍浦を掠め、嘉興より東平湖を犯し轉じて蘇州、常熟と攻め深く太湖に入つて其沿岸地方を荒して湖州迄侵入したのである。

(ニ)陳東、葉明――彼等の一隊は嘉靖三十四年正月隊を分ちて一隊は川沙から入寇し葉明の軍は老鶴嘴から入つて其附近を掠奪し常州、鎭江、松江の一帶を荒し廻つた後隊を合して乍浦を攻めたのである、而して陳東は主として肥後、筑前、豐後、和泉、博多、紀伊の倭寇を率ゐ來つたと籌海圖編にあるが、此軍は葉明の軍と聯合して崇明から上海を攻めて居る、三十四年三月一旦日本に遁歸し三十五年再び來寇し川沙、松林を攻めた後、乍浦に於て總督胡宗憲の軍と戰ひ敗れて茲に全滅した、葉明は三十五年正月、筑州、和泉、肥前、薩摩、紀伊、博多、豐後の諸倭寇を率ゐて老鶴嘴に駐屯して附近を掠め遂に胡公の爲に擒にせられたのである。

(ホ)李光頭、許棟――彼等は主として福建地方に侵入し、嘉靖十九年是等支那賊は倭軍を率ゐて雙嶼港を攻め之を本據として居るのである。

(ヘ)蕭顯――嘉靖三十二年四月蕭顯叛し倭夷と聯絡して直隸、上海一帶を犯したのである、此一隊は普陀山を根據として海鹽、龍王塘、乍浦、長沙灣、嘉興、嘉善等を侵略して慈谿にて全滅したのである。

尙ほ以上の外、金子老、鄭宗興、阿亞八、徐銓、方武、洪澤珍、嚴山老、許西池、蕭雪峰、謝老等無數の支那海賊は何れも倭寇と聯絡して之を導き、或は自から倭寇を標傍して、所在を掠奪したもので、而して是等の海賊中最も勢力あり、最も多くの部下を有し明朝にとつて一敵國たる觀を呈したのは汪直(王直)である、彼は徽州の人で列表の戰に敗れてから日本に亡命し平戸に居住し其部下をして江淞の邊境を寇せしめ、又、呂宋、安南、マラッカ方面に貿易し巨萬の富を積み自から稱して五峰船士と云つたのであるが、胡宗憲が巡按御使となるに及んで王と同鄕の故を以て使者を王直の處に遣はし勅命と稱して欺いて彼を招き定海に於て捕へ斬に處した時に嘉靖三十八年十二月である、而して王直の欺かれて捕へらるゝや、其餘黨の頭目毛烈は部下を率ゐて舟山の岸港によつて官兵と戰ひ之れを破つたのであるが、其後明將俞大猷の爲めに破られて四散したのである。

平戸と葡萄牙人

以上、述べし王直によつて我邦の地を踏んだ葡萄牙人はアントニオ・ダ・モタ、フランシスコ・ゼイモト、アントニオ・ペショトの三人で彼等は暹羅のドドラ港からジャンク船に乘り込み貿易の爲め寧波に渡らんとせしものが暴風の爲に我薩南の種子島に漂流したのである、爾後、葡萄牙の商船は千五百四十二年以後年々四五年間は鹿兒島及山川の諸港を訪ふたのである、而して同國の商船が轉じて平戸に入港したのは天文十九年卽ち西曆千五百五十年でドワルテ・ダ・ガマの船が之れが初期である、當時平戸の領主松浦隆信は多年支那貿易の利益を享けし點より葡萄牙商船の其領內に入港するやこれが通商を便にして大に利益を收めんがために同時にザビエルの如き宣敎師をも歡迎したのである、斯くの如く葡萄牙の商船が薩摩より轉じて平戸及豐後に向つたことは主として薩摩の領主が基督敎を禁止した爲めで斯くて天文二十年(一五五一)にはドワルテ・ダ・ガマの船豐後の日出港に來り、其翌年も亦た此國の船豐後に來り、更に二十二年及弘治元年(一五五五)にはドワルテ・ダ・ガマの船平戸に來り同二年ヂョゴ・バス・デ・アラゴンの船同三年フランシスコ・マルチノーの船などが何れも平戸に入港したのである、然るに其後或事件の爲めに葡萄牙の商船が一時横瀨浦に移つたことがある、其理由は永祿四年(一五六一)平戸に入港した葡萄牙船の乘組員と平戸の町人との間に一日些細のことで爭論が起つた際、伊藤甚三郎と稱する武士其場を通り合せて雙方を宥

めんとしたのであるが、言語が通ぜざる爲めに葡萄牙人は之を以て敵を助くるものと考へ劍を拔いて其手を傷けたのである、そこで伊藤も之れに應じて鬪ひ、其報に接して船長以下葡船の乘組員多數上陸して加勢し平戸の武士町人も之れに參加せしを以て雙方共に死傷者多く、葡萄牙人側では船長フェルナン・デ・ソーザを始め十四人殺され領主が之れを制止するに及んで僅かに爭鬪が止つたのである、松浦隆信は此悲しむ可き事件の爲め葡萄牙人の感情を疎隔し、或は貿易斷絕せんことを恐れて書を豐後のバードレ・トルレスに贈つて基督敎徒を庇護し敎會堂の建設を約したのであるがバードレ・トルレスは隆信を以て基督敎を好まず、眞に布敎を許すの意なきものと認めたので、當時大村の領主が橫瀨浦を提供し葡萄牙人若し同港に來つて貿易を營むに於ては十年間一切の課稅を免除し同港附近一帶の地域は悉く基督敎徒に與へ異敎徒は二里半以外に居住せしむることを約したので、先づアルメイダとして大村侯と交涉せしめ、永祿五年(一五六二)葡萄牙商船來航するに及んで自から平戸に至つて船長に說き同港を去つて橫瀨浦に向はしめ、バードレも同船に乘つて橫瀨浦に赴き領主大村純忠と交涉して此處を葡萄牙の貿易港と定めたのである、同港は周圍約四里に達し港前に一小島あつて風を防ぎ港內波浪の患なかりしより同年更に他の葡萄牙船來りしを始めとして商船年々此港に入り、從つて附近の基督敎徒は勿論、京阪地方から商人の來往するもの多く、同處は俄かに繁榮の地と化したのである、然るに永祿七年(一五六四)大村の領內に叛亂があつて佛敎徒は其機會に乘じて橫瀨浦を襲ひ全港を燒き滅せしを以て宣敎師は皆此地を去りバードレ・トルレス以下の一部は肥後の高瀨に赴き、イルマン・ルイス・フロイスは籠手田兵部少輔に招かれて度島に行きイルマン・フェルナンデスも亦少し遲れて同處に至つて熱心に布敎に從事したのである、永祿七年葡萄牙の商船サンタ・カタリナ號外シャンク一隻來航したのであるが橫瀨浦が全滅して居る爲め平戸に來航したので隆信は使を度島に派しフロイスを平戸に招くことを約して其斡旋を求めたのである、然るに其後隆信は直ちに約を履行しなかつたので、フロイスはサンタ・クルス號の船長ペトロ・アルメイダを說いて平戸を去る五海里許の處に停船せしめて領主の要求に應ずること能はざることを示せしして以て隆信は遂にフロイスの平戸に入つて敎會堂を建設することを許可したのである、斯くて

サンタ・クルス號は平戸に入つて貿易をなしフロイスは葡萄牙人及平戸の信徒から盛大な歡迎を受けて、直ちに教會堂の建設に着手し翌年十一月落成して天門寺と稱したのである然るに隆信の基督教に對する態度は依然として冷淡であつたので宣教師等は親善な關係を有した大村の領内に葡萄牙の貿易を移すことを希望し永祿八年(一五六五)ドン・ジョアン・ペレイラの船外一隻が來航するに及んで、之を大村領の福田港に向はしめたので隆信は之れを以つて大なる侮辱となし暴力に訴へて葡萄牙船を自己の領内に還らしめんとし戰艦約五十艘を率ゐて之を襲ひ爲めに死傷者二百六十七人を出して空しく引き揚げたのである、其後葡萄牙船は或は福田港に或は口ノ津、志岐の諸港に出入し元龜元年(一五七〇)始めて長崎に入港し爾來同處を以て貿易の定港となしたのである然るに慶長十一年(一六一四)から寛永十六年(一六三九)に至る二十五年間益々抑制せられて遂に全然排斥せらるゝに至つたことは彼等が主として德川政府の好まざる宗教に同情を寄せし點に存するのである現に島原亂の際に葡萄牙の老兵士で同時に航海業者であつたドュアルテ・コレアは叛徒と關係を有せし故を以て千六百三十八

蘭葡人我邦より追はれし理由

年の秋獄に投ぜられたのである、然るに英國人と和蘭人とは努めて宗教上より遠ざかりし結果彼等は遂に葡萄牙人に代つて我邦に於ける對外的商業を支配するに至つたのである、而して葡萄牙對日本の貿易が廢絶せし爲めに最も大なる影響を被むつたのはマカオである。

支那に於ける葡萄牙の殖民地

支那に於ける葡萄牙の殖民地は必ずしもマカオのみでなく他にリアムボー、チンチエオ・ラムバカオの如き存したのであるが、然し十六世紀から十七世紀に亙つて東洋方面に於ける西洋文物輸入の門戸となり支那、日本に向つて近世史を齎らす主要な動機を構成したものは實にマカオに外ならないのである、今、マカオ殖民地の由來に就いて矢野博士の「葡萄牙のマカオ殖民地の起原」によれば左の如くである。

「葡萄牙人がマカオに據つて殖民地を設くるに至つた由來に就て第一に擧ぐ可きは占領說である、是は葡萄牙殖民省に於て執る所の見解であつて、ジェススに引用せる十八世紀末の殖民大臣マルテイニョー・ド・メルロ・エ・カストロのマカオ知事兼總督ド・レモス・フアリア宛覺書に見えて居る說である、ジュングステットに五十年

以前に記された一大臣の覺書として引用してあるのも同一のものである、之れに據ると葡萄牙人は支那海に於て横行せる海賊を其儘に放任せんか、航海貿易は終に荒廢に歸せんことを慮り、準備を整へて之れを攻擊掃蕩して支那人に安堵を與へたのみでなく、更に進んで香山澳に據れる賊の渠帥を伐ち、其勇敢なる抵抗を排して之れを破り、遂に香山島を奪取占領したのである、當時葡萄牙人の實際に占領したる香山島の地域の限界は明かにし難きも、兎に角葡萄牙人の此地域に對する權利は葡萄牙人の鐵と血とに依つて得たもので、いはゞ征服に基づく權利である、支那皇帝から恩惠的に讓與されたものでなければ條件的に割讓されたものでない、彼等の占領したる香山島の中でマカオ半島は最も貿易に適するが故に市街を造營して此處に永居の計をなすに至りしものに過ぎない、支那人は葡萄牙人の此地域に對する征服の權利を確認したのでなければ葡萄牙人の公然市街を造營し永居の計をなすことを許容する筈がない又葡萄巨人にしても自己の權利を自覺して全然支那の法律政治の支配を受けないと云ふ確信を持つたのでなければ此の如く巨資を投じて市街を造營するが如き百年の大計を決行する筈がない、マカオの殖民地は此の如く葡萄牙人が征服の權利に依つて獲得し創立したものなれども殖民地の將來の安全を期する爲めには支那皇帝よりその領有の承認を經る必要がある、それで殖民地の創立者は、之を支那皇帝に要求し、支那皇帝に依つて其海賊討滅の功を認められ許容せらるゝに至つたことを主張したものであると云ふ傳說が記錄に留められて居ると云ふのである、猶ほ殖民大臣は此覺書に於てマカオ殖民地の管轄權の及びたる香山島の征服地域に於て各種の農場が有り、殖民地は當初其生產品に依つて維持するとを得、全く支那人に依賴するの必要なかりしこと、又島の名も支那名の香山(Heangchan)より轉訛してアンサーン(Anc 3o)と稱せられたこと、此アンサーンの葡萄牙殖民地が肥沃豐饒なりしため、支那人を誘致するとなり、次第に支那人のために侵蝕せられ知らず〳〵葡萄牙の占領地は僅にマカオ半島內に局限せらるゝに至りしことを述べてマカオ殖民地の征服の權力に依つて得たことを力說して居る。

ジェススに引用せるフアリア・イ・ソウサの記事に據ると支那人はマカオを巢窟と

なせる海賊を驅逐する勇氣なく之をサンシャン島の海上にありし葡萄牙人に依賴しマカオを以つて其居住地とするの權利を提供したので、葡萄牙人は之を快諾し、終に武力を以て宿年の志を遂げマカオを獲得するに至つたのである、葡萄牙人は當時地勢の險に據つて防戰したる海賊を勦滅し一手武器一手斧鑿を以て其欲する儘にマカオの殖民地を建設したのである、この所傳が當時の事情に照して尤も事實を得て居る樣に思はれる。

セメドーにも殆んど同樣の記事が見えて居る、卽ち之に據ると葡萄牙人が始めて支那に來りサンシャン島に於て貿易を行つて居た頃海賊の一大群は彼等の巢窟に最も適當な小さいながらに全部巖石より成り守るに便利なるマカオの地に據つて連りに近傍の諸地を劫掠したのであるが支那人は怯懦にして自から之を討伐する勇なかりしか或は自ら危險を冒さず他人の力に依つて之を討伐するを得策としたものか兎に角葡萄牙人の勇敢用ゆべきを知りマカオの海賊掃蕩を條件として其地を彼等の居住地として提供したので葡萄牙人は直ちに之に應じ衆寡の勢、懸絕したるに拘はらず戰術に於て遙かに超絕したるが爲め自ら少しの損傷を被むることなく、海賊に非常なる打擊を與へ容易に勦滅の功を奏しマカオを支配する地位に立ち各々欲する處に隨つて土地を選定し、家屋を建設するに至つたと云ふことである。

千六百五十九年頃フイリッピン島よりマカオに渡りし西班牙のドミニカン會の宣教師ナゾアレットは其の支那帝國記に於て當時マカオの住民の多數はマカオの由來に就て曾て海賊の此の地に據つて近傍の人民を攻め惱ましたる時葡萄牙人は支那人より依賴され已むを得ず兵を動かして之を驅逐した結果讓與されたものであると云つて居ることを記して居る。

此の如く葡萄牙人は支那官憲の依賴を受けマカオの海賊を掃蕩し其報酬として之を提供されたものであると云ふ小說は信用すべき葡萄牙著作家中に之を發見することが出來るのみならずマカオの葡萄牙人の間には長い間さう云ふ說が信ぜられて居たのである、この所傳の方がかの葡萄牙人が武力に依つて無主權の地を征服占領したものであると云ふ說に比して餘程無理が無い樣に思はれる。

然るにジェスはマカオの諸記錄に據つてマカオの由來に關する一異說を擧げて居る、それはマカオは支那の皇帝より海賊討伐の功を表彰する爲め恩賞として葡萄牙人に給賜されたものであるといふ說で、ファリア・イ・ソウサ、セメドー等のマカオは海賊討伐の條件として提供されたものであるといふ說に對しては一の異說と言はなければならぬ、それは海賊の廣東海上に橫行せる當時葡萄牙人は其の大群を攻擊し之れを勦滅し其マカオに於ける巢窟を奪ひ其生存者をして此後海賊の島と稱せらるゝ島に奔竄するの已むなきに至らしめし功績は地方官憲より支那皇帝に上奏され支那皇帝より葡萄牙人の指揮官にチャバ・ド・オロウと云ふ立派な金字の文書を賜はつて其功を表彰さるゝことゝなり同年卽ち千五百五十七年に葡萄牙人はマカオ居住の勅許を得、此勅許文は其後マカオ議事堂の石造部や木造部に銘刻さるゝ樣になつたといふことである。若し此の如き勅許文若しくは之れを銘刻したる碑文がマカオにあつたとすればそれは必ずマカオに於て僞造されたものと信ずる外は無いジェスが引用せる葡萄牙殖民大臣マルティニョー・ド・メルル・エ・カストロの覺書にもマカオの創立者等は彼等が自己に依つて領有したるマカオの一層安全な保障を得る必要上、其領有權が支那皇帝より確認せられたもので、支那皇帝は其臣民が海賊の剽掠侵劫を免るゝに至つた報酬として彼等の要求を許し且つ種々の特權を與ふるに至つたと主張して居ると言つてあるが、之を主張するに當つて其主張の根據として此勅許文を僞造したものであることは疑が無い而して此の如き勅許文が僞造され而かも支那官憲の之を觀過したる所には彼等が葡萄牙人の武力の援助に依つて海賊を討伐し、其條件としてマカオ居住を許したと云ふ證據と見られる支那皇帝が葡萄牙人の功績を承認しマカオの地を以て葡萄牙人に讓與したりとの說はマカオ創立者が熟慮審計の結果案出したる說ではあるまいか、葡萄牙人が武力に依つて海賊を平定したりとは云へ僅かに領土主權を讓與する權能なき地方官憲の違法の約束に依ると云ふことでは不安心である之を支那皇帝の恩賜に歸するに非ざれば結局之を維持する爲めに兵力を以て爭はざるべからざる時機の來ることは明かである、而かも兵力を以て爭ふことの不可能にして不利益なることはフソアムボーやチンチュオを失ひたる實例に鑑み

ても明かである、兵力を以て爭ふ程なればマカオを維持する必要がないマカオを維持するは支那と平和な貿易の發達を圖るにある、當時のマカオ創立者は斯の如き考を以て此勅許文を僞造せしものであるまいか。

此の如く葡萄牙人は支那官憲との約束に依り武力を以て海賊を討伐しマカオの居住を許さるゝに至つたものと解釋すればピントーがマカオの起原を以て千五百五十七年渡來の官憲が支那商人の要求に依り葡萄牙人に與へたる結果に歸し、未開の荒土が化して繁榮の歐羅巴風市街となり葡萄牙人は宛かも自國の鄉土にある思を爲して安堵樂居した如く記して居る記事も又ジングスラットに引用せるラ・クレルドの葡萄牙人がマカオと云ふ一荒島に至る許可を請ひて許され又其後暫時にして若干の家屋を自由に建造する許可を得たと云ふマカオ由來說も必ずしも海賊討伐說と撞着するものと思はれない。

ジングスラットは千七百七十七年にマカオの一主敎ドム・アレキサンデル・ダ・シルヴァ・ペドロサ・ギマライエンスがマカオ知事として元老院に與へた敎書に葡萄牙人は地租を納めて支那皇帝よりマカオの借地使用權を得たやうに述べてあることを記して居るが、これは後代の事實より推定した憶說に過ぎないやうである、ジングスラットはマカオの由來に就て別に一說を立て、支那東部の福建省及び浙江省より驅逐されし冒險者の一大群はサンシャン及びラムバカオに於いて商品の市場を求めしも賣行十分ならず密貿易を始めて東海上を荒し廻つた揚句貿易を確實な基礎の上に於て行ひ海賊の危險を避け、又支那の巡哨船に强迫せらるゝ高價な密貿易默許料を免れる必要を感じ支那商人と協力して支那官憲に運動し懇願贈遺等の方法を繼續して遂に其の目的を達し千五百五十七年アマと稱する荒蕪の一島嶼は彼等の居住地として提供せらるゝに及んで彼等はラムバカオより四艘の船に乘じて直ちに此の地に赴いたのである、これが抑々マカオ殖民地の始まりで在來の假小屋は堅牢なる家屋に改造せられ禮拜堂は設けられ俄かに葡萄牙殖民地の面目を具備するに至つたのであるが葡萄牙殖民其者は猶ほ自から其力の弱く到底兵力を以て其地位を維持するの不可能なるを知り從來の政略を踏襲するに決し服從と贈遺とに依りて大小官吏の歡心を結び二十五年間もマカオの繁榮發達に就て目を閉ぢしむることを得たのであ

ると言つて海賊を否認して居る然し乍ら葡萄牙人が服從と贈遺とに依つて巧みに支那の官場に運動したと云つても地方守土の責任ある支那大小の官吏を盡く懷柔して支那の領土たるマカオを讓與せしめ又二十五年間葡萄牙殖民地として其發達繁榮に放任せしむることに成功したとは考へられないのである

以上は矢野氏が葡萄牙方面の傳說に就ての考察であるが、更に同氏は葡萄牙人が海賊討伐を條件としてマカオに居留するを許されし點を支那側の材料によつて考察せし點を見るに嘉靖四十三年(千五百六十四年)の廣東御史龐尙鵬の撫處濠鏡澳夷路の示す處は葡萄牙人がマカオに據つて家屋を築造するに至りしは主として交易上の便利よりして地勢の不便なるラムバカオの碇泊地を避けしものにして卽ち使三搬屋而隨舡往來其灣泊各有定所。悉遵往年定例……若以啓衅爲憂。則禍孽之萌。亦當早見而預待之。況有舊澳見存。皆以耳目所親見聞者。彼將何人執怨乎。蕃舶抽盤雖有一時近利。而竊據內地。實將來隱憂と云て居る、次ぎに明史佛郎機傳に先是暹羅。占城。瓜哇。琉球。浡泥。諸國互市。俱在廣州設市舶司領之。正德時移於高州之電白縣。嘉靖十四年指揮黃慶納賄時於上官。移以濠鏡。歲輸課二萬金。戶郎機道得混入。高棟飛甍。櫛比相配。閩粵商人趨之若鶩。久之其來益衆。諸國人畏而避之。遂專有所據とあり、卽ち同史の意味する處は林富の上奏の結果廣東に通ぜし貢市舶以外の諸國商舶も嘉靖十四年(千五百三十五年)以來高州電白縣よりマカオに移つて貿易するを許さるゝ樣になつたが、此時も葡萄牙人は許されなかつたのである、葡萄牙人のマカオに來りしは許されしものにあらずして寧ろ混入せしものである、マカオの葡萄牙殖民地と化せしは割據されしものではなくて葡萄牙人の來らざりし以前より此處に貿易を許されし諸國人は却つて葡萄牙人を畏避せしものとなすのである更に香山縣志によれば歲課二萬金の輸納者は佛郎機にして、佛郎機の地稼が始まりしは萬曆以來にして此二萬金は地租にあらずして船課であると記せるが、明史は之れと異なつて歲課二萬金の輸納者は佛郎機にあらずして暹羅、占城瓜哇等の諸國で彼等はマカオに出入せしのみにあらずしてマカオの地を租借して之れに居住せしと云ふにあり、更に澳門紀略は嘉靖二十二年蕃船託言舟觸風濤。願借濠鏡地暴諸水漬貢物。海道副使汪柏許之。初僅菱舍商人牟奸利者、漸運瓴甓掠桶爲屋。佛郎機遂得混入。高棟飛甍。櫛比相抱。久之遂爲所據。と記せる如く嘉靖三十二年汪柏の許

可を得てマカオの地を借り草小屋を造り次第に家屋を建築するに至りしは佛郎機以外の蕃舶で、同國は後ち混入するに至りしものと解釋せざるを得ないのであるが、然し佛郎機以外の蕃舶がマカオに家を借りしとは信ぜられざるを以て佛郎機遂得混入云々の文は明に明史佛郎機傳の文を補綴せしもので此澳門紀略の文は二つの史料に對して何等の批判を加へずして單に混合竝列せしものに過ぎないのである、而して澳門紀略中の蕃船が汪柏の許可を得てマカオの地を借り家屋を建設せし條中此蕃船は佛郎機の船舶を指せしもので、決して佛郎機以外の蕃船を指せしものでない廣東通志が引用した粵大記丁以忠傳中に時佛郎機夷違禁潛住南澳海道副使汪柏慫慂之以忠力爭曰此必爲東粵他日憂蓋再思之相竟不從尋擢右布政使とあるが海道副使汪柏に依つて南粵に潛住したものは佛郎機で南澳は濠鏡澳卽ちマカオを指すものたるとは疑なく澳門紀略の蕃舶が汪柏の許を得てマカオの地を借り家屋を建築したと稱する記事は丁以忠傳の佛郎機夷が汪柏の慫慂によつて南澳に居住せしと稱する記事と同一の事實を述べしものたるとは明かで蕃船は佛郎機船を指せしことは疑ないとである、只だ佛郎機の船舶とすれば朝貢國でない佛郎機が濕荷となつた貢物を乾かすといふ名義でマカオの地を借りたといふことであるが明史佛郎機傳に嘉靖四十四年僞稱滿剌加入貢已改稱蒲都麗家守臣以聞下部議言必佛郎機假托乃郤之の記事あるを以て見れば汪柏が丁以忠の力爭を排し朝貢國に非る佛郎機のマカオ居住を許すに當つて名義をマラッカに借りしものと見做さるゝのである。

マカオに於ける葡萄牙殖民地の成立起源

更に明史佛郎機傳に自朱紈死海禁復弛佛郎機遂縱橫海上無所忌而其市香山澳濠鏡澳者至築室建城雄踞海畔若一國然將吏不肖者反視爲外府矣とある如きは明かに時の支那官憲が海賊に對する防禦策にして寧ろ佛郎機の築室建城を歡迎せしことが想像せらるゝのである、斯く見る時は汪柏が反對論を排して葡萄牙人のマカオ居住を慫慂せしことも又マカオの殖民地は海賊討伐の條件として支那より割讓せられしとの葡萄牙側の所傳も同時に妥當的なる譯である、次ぎに之れが成立の年代に就きてはピントーの記事によれば廣東の官憲が支那商人の要求によつてマカオを葡萄牙人に與へた年は千五百五十七年卽ち明の嘉靖三十六年となつて居る、而してジングステットは千五百五十七年外國人が

支那官憲の許可を得て阿媽灣と稱する一荒島に聚居するに至つたと稱するピントーの記事に對して葡萄牙の著作家中他に疑ふものなきことを認むると共に此年に葡萄牙商人の一群はアマと云ふ荒蕪地の一島嶼に居住するを許されラムバカオより四艘の船を以て直ちに之れに赴き在來の假小屋に代へて堅牢な家屋を改造するに至つたことを述べてゐる、更にジェススもマカオの諸記錄によつて千五百五十七年に支那の商人が葡萄牙人の爲めにマカオ居住の勅許を得たことを述べて居る、要するに葡萄牙人は嘉靖三十二年頃に始めてマカオに居留を許され其後四、五年を經過する中に漸次家屋の建造を見るに至り、茲に支那方面に於ける葡萄牙殖民地の基礎が成立するに至つたのである。

世界商業史上に於ける葡萄牙人の活動

要するに以上述ぶるが如き葡萄牙人の活動は世界商業史上一新時期を齎らしたもので、即ち西部歐羅巴は回教國に代つて經濟上の覇權を握り斯くて亞刺比亞人は東洋西洋の間に於ける媒介者たりし地位を失ひ小亞細亞及地中海方面を經て歐洲方面に齎らされし東洋方面の貨物は今や直接海路によつて葡萄牙方面に陸揚せられ、周圍の中心的地位にあるリスボンは十六世紀の初期に於て世界商業の中央市場たる觀を呈するに至つたのである、爾來葡萄牙の商業は益々發展し彼等は單に世界の各地より珍奇の貨物を齎らせしのみにあらずして又昔時に於けるフェニキアの故智を學びて務めて他の競爭者の現はれることを避け、よりて以て自國の經濟上に於ける獨占的地位を維持せんことを務めたのである、而して當時葡萄牙人が土人との通商狀態に就きてゾムバルト教授が近世資本主義に記せし處によれば古靴の價が三百ヂュカット西班牙の上衣がヂュカット葡萄酒用の酒杯が二百ヂュカットの相場で取引せられたもので書籍鏡、絹織物の如きに至つては更に不法なる値段を以てせられたのである、其の結果當時の葡萄牙人は普通四百パーセントの利益を得たのである、然かも斯くの如き不法行爲は久しからずして土人の怒を招き加ふるに葡萄牙方面の宣教師の狂熱的な宗教的干渉と同國官吏の壓迫とは益々土人の不平不滿を甚からしむるに至つたのである、要するに當時の葡萄牙人は後世に見るが如き眞の意義に於ける殖民者にあらずして寧ろ武力によつて自己の勢力を發展せしめんとした一種十字軍時代の騎士の如きものである、大仕掛の海賊商賣といふのが寧ろ當時の葡萄牙を批評した適當